

越谷市制
施行
50周年



歩みついで半世紀 さびに飛躍の半世紀
越谷市制  周年
KOSHIGAYA

越谷市



INDEX

第1章	越谷今昔物語	4
第2章	あの頃、あの時、懐かしの写真集	12
第3章	越谷50年の歩み	22
	古代	24
	中世	25
	近世	26
	近代	27
	昭和30年代	28
	昭和40年代	32
	昭和50年代	36
	昭和60年～平成6年	40
	平成7年～平成20年	44
	道路整備	48
	鉄道整備	50
	治水対策	52
	環境	54
	コミュニティ・市民参加	56
	産業	58
	医療・保健	60
	福祉	62
	消防	64
	教育・文化・スポーツ	66
	国際交流	68
	防災・防犯・危機管理	70
第4章	越谷の観光案内	72
	春・夏	74
	秋・冬	76
	文化財・史跡	78
	越谷の地名	80
	いつまでも残したい風景	96
	いつまでも残したい自然	
	植物	98
	生きもの	100
	伝統工芸	102
	越谷の民話	108
第5章	越谷ゆかりの著名人	112
第6章	子どもたちに託す未来の越谷	120
第7章	越谷もの知りページ	130
資料	データからみた越谷市の推移	132

市制施行50周年を祝して

越谷市議会議長

小林 仰



越谷市制施行50周年、誠におめでとうでございます。この記念すべき慶事を、32万市民の皆様とともにお祝いできることを大変喜ばしく思います。

本市は昭和33年11月に市制を施行し、今年で半世紀になりますが、古くから「水郷こしがや」として親しまれており、水と緑豊かな自然環境と調和したまちづくりが着実に進められてきました。そして、この節目の年に、本市の新しい顔となる越谷レイクタウンも誕生し、県南東部地域の中核都市として、さらに大きな飛躍を遂げてまいります。

今日の発展の陰には、まちづくりに向けた先人たちのたゆまない努力と情熱があったからこそと考えており、ここに改めて感謝を申し上げます。そして、今後とも新しい時代にふさわしい越谷市の発展のために、一層のご協力を賜りますように念願する次第であります。

近年、地方分権に向けた動きが活発になる中で、地方財政の確立や市民福祉の充実を図るためにも地方議会の果たす役割はますます重要になっていきます。本市議会も今年50周年を迎えるわけですが、市民の負託に応えるべく更なる努力を重ねてまいりる所存です。引き続き市民皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

このたび発刊されます記念誌は、50周年を機に、今日の越谷を築かれた先人たちの偉業に思いを馳せ、将来のまちづくりへの決意を新たにすべく、大変意義深いものであると考えております。編集委員の皆様をはじめ、ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます、お祝いの言葉といたします。

市制施行50周年

市民との協働で新時代を築く



越谷市長 板川 文夫

越谷市は、本年、市制施行50周年という記念すべき年を迎えました。昭和29年11月に越谷地区の2町8カ村が合併し越谷町となり、その3年後の昭和33年11月3日に、県下で22番目、全国で543番目に市制が施行され「越谷市」が誕生しました。わたしたちの郷土は、豊かな水と緑に恵まれ、古くから「水郷こしがや」として親しまれてきました。江戸時代には日光街道第三の宿場町としてにぎわいをみせ、今もその名残をとどめるなど、豊かな自然と歴史が融合したまちです。

市制施行当時、人口4万8318人だった本市は、昭和40年代以降人口が急増し、首都近郊の住宅都市へと大きく変容してまいりました。現在、県南東部地域の中核都市へと発展したのも、先人たちの熱意と努力のたまものであると確信しております。さらに、本年3月には、JRW蔵野線の越谷レイクタウン駅が開業し、広大な調節池を中心に良好な住宅地や大規模商業施設が集積した親水文化創造都市が誕生しました。

今後、越谷市がさらなる発展を遂げるためには、32万市民の皆様のご協力が不可欠です。現在、そして将来にわたって市民の皆様が、「越谷に暮らしてよかった」と実感できるまちを築くため、今後も市民との協働によるまちづくりを推進してまいります。

このたび、先人の築き上げてきたこれまでの歩みを中心に記念誌を編集発行しました。編集委員の皆様のご尽力にあらためご尽力にお礼を申し上げますとともに、この記念誌を手にとっていただいた皆様へ、ふるさと越谷に一層理解を深め、愛着を持っていただければ幸いです。

市民とともに歩んだ半世紀

市民全員で市制施行50周年を祝う

越谷市制施行50周年記念事業推進市民委員会委員長

青木 並五郎



越谷市制施行50周年を心からお祝い申し上げます。越谷市は、昭和33年11月に人口4万8318人のまちとして産声を上げました。

それまで、旧日光街道沿いに形成されていた市街地も、交通の発達により大きく変貌してまいりました。特に、東武鉄道伊勢崎線への地下鉄日比谷線の相互乗り入れを契機に人口が急増し、旧住民と新住民との交流がまちの課題となり、自治会やスポーツ・レクリエーション活動を通じて交流を深めてまいりました。

その後も、市民と行政が連携を図りながらまちの発展に尽力してきたところでございます。越谷市の市制施行からの50年はまさしく市民とともに歩んできた歴史そのものでございます。

そのような中、市制施行50周年を市民全員でお祝いするため、平成19年8月に「越谷市制施行50周年記念事業推進市民委員会」を組織いたしました。市民委員会は、多くの市民の参加により、行政および市内のさまざまな団体と連携し、記念事業を企画・運営することを目的に設置いたしました。

このたび、編集発行いたしましたこの記念誌も市民委員会の記念誌作成部会が中心となり作業を進めたものでございます。編集に当たりましては、市民の皆様から昔のたいへん貴重な写真や市内の小学生から未来の越谷を描いた絵画、中学生から作文を提供いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

結びに、越谷市の益々の発展をご祈念申し上げますとともに、この記念誌が越谷市を理解する一助となれば幸いです。

第1章 越谷 今昔物語



現在

東武鉄道開通当初は、停車場誘致に積極的でなかった越ヶ谷町も、その後、商工業者を中心とした町民の間から、産業の振興や町の発展には、交通運輸の要ともいえる停車場の設置が必要であるとの要望が高まり、大正9年（1920）4月に駅が設置されました。昭和33年（1958）には、市制が施行され、人口の急激な増加とともに乗降客が増えていきました。高架複々線化され、輸送力の増強が図られ、駅周辺の整備も進められました。

越谷駅



昭和30年代初期



昭和30年

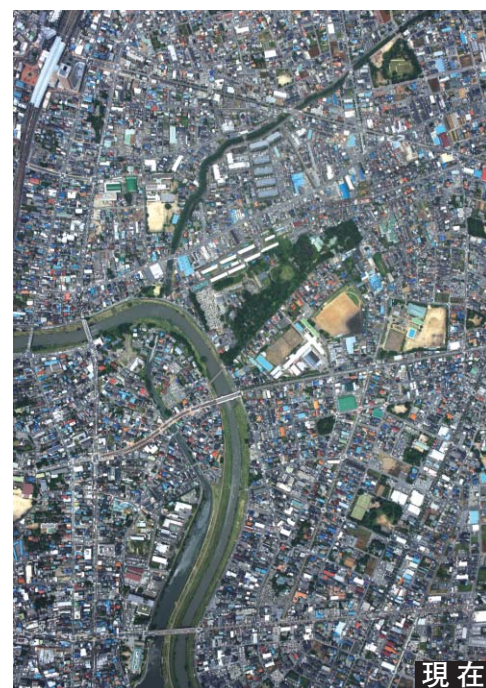
武州大沢駅 （現在の北越谷駅）

開設当初は、越ヶ谷停車場の駅名でしたが、大正9年（1920）に越ヶ谷町に駅が設置されたことにより、「武州大沢駅」に改称されました。昭和31年（1956）には武州大沢駅から浅草行きの折り返し運転が開始され「北越谷駅」に改称されました。昭和37年5月の地下鉄日比谷線の相互乗り入れの開始にあわせ、東武鉄道伊勢崎線で初の橋上駅に改修されました。

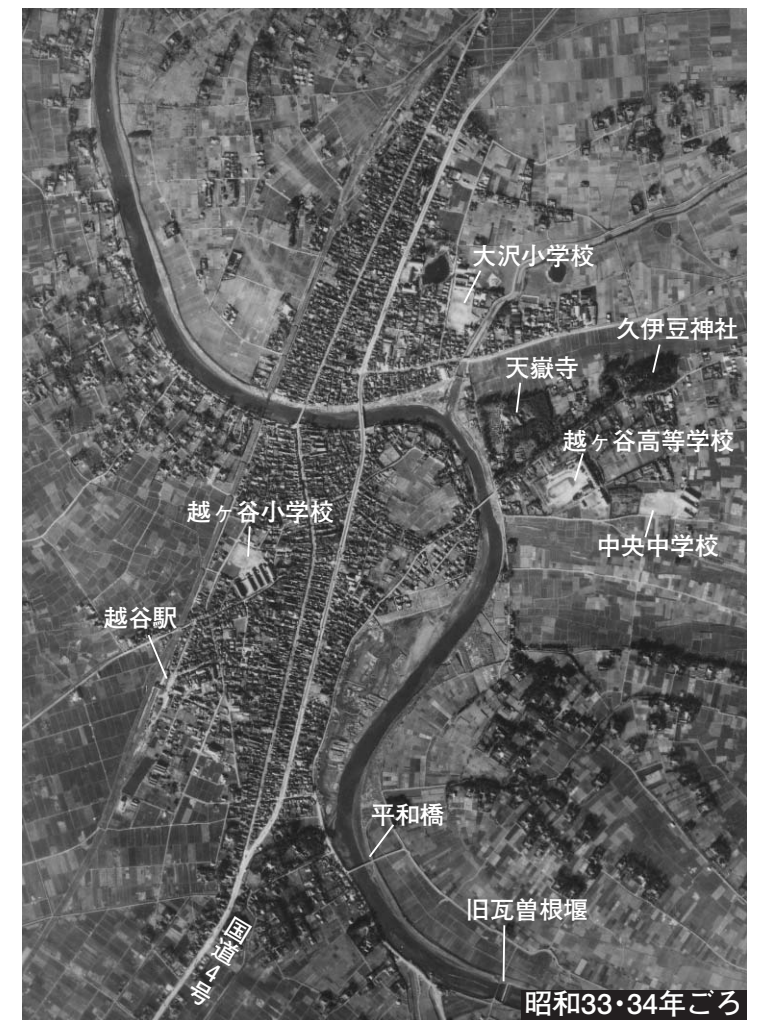


現在

昭和33年（1958）の市制施行当時、市の人口は4万8318人でした。空から見た様子も農地が広がり、旧日光街道沿いに市街地が形成されています。この50年間で人口は6・6倍になった反面、面積に占める農地割合は約70%から約30%に減少しています。



現在



昭和33・34年ごろ

上空から見た越谷市の変遷

蒲生駅

明治32年（1899）12月に通称三軒家（現在の南越谷一丁目辺り）に開設されましたが、のち現在の場所に移されました。平成20年（2008）3月、蒲生駅東口線の開通により東口にもロータリーが整備されました。



昭和30年ごろ



現在



昭和37年

大袋駅

大正15年（1926）10月に開設されました。市内を通る東武鉄道伊勢崎線の駅で西口に改札口のない唯一の駅ですが、大袋西口線の道路整備とあわせて平成22年度に西口ロータリーが整備され、改札口ができる予定です。



現在

新越谷駅

昭和48年（1973）4月、新松戸駅から府中本町駅まで国鉄（現在のJR）武蔵野線が開通しました。南北鉄道ばかりであった県内に、東西を結ぶ大動脈が誕生しました。この武蔵野線の開通後の昭和49年7月に東武鉄道伊勢崎線との連絡駅である新越谷駅が誕生し、東西南北の交通の要所となりました。これにより駅周辺は商業地として飛躍的に発展しました。平成19年度には、新越谷駅、南越谷駅とも1日6万人を越える乗降客がありました。



昭和49年



現在

せんげん台駅

昭和41年（1966）に入居が始まった春日部市の武里団地6200戸の住民の交通を確保するため、昭和42年にせんげん台駅が上間久里地内に橋上駅として開設されました。駅名は、駅の近くを流れる千間堀にちなんで名付けられました。



昭和42年



現在

旧日光街道



昭和33年ごろ 中町・越ヶ谷三丁目



現在

慶長7年（1602）、江戸を中心にした五街道のひとつとして奥州街道が指定されました。現在は、日光街道と呼ばれ市内を南北に貫通し、重要な幹線道路として多くの往来があります。この日光街道は明治時代になると一等道路に指定され、大正9年（1920）には、国道4号と改められました。昭和7年（1932）から拡幅整備が進められ、拡幅の難しい市街地は避けて新道が整備されました。

国道4号 草加バイパス の開通

国道4号（現在の県道足立越谷線）の交通量や事故の増加に対処するため、当時の建設省は昭和39年（1964）度から総工費約50億円の予算で草加バイパスの建設に着手し、昭和42年4月に、足立区保木間から市内上間久里まで下り2車線が開通し、12月に全面開通となりました。



現在



昭和42年 神明町二丁目・南荻島付近。後方は西中学校

新平和橋と平和橋

市役所わきの元荒川に架かる新平和橋と葛西用水に架かる平和橋は、つながって一つ一つの橋のように見えます。昭和35年（1960）から始まった元荒川と葛西用水の用排水分離工事により、現在の位置より下流に架かっていた旧平和橋の架け替えとして建設されました。ちなみに、旧平和橋は昭和20年代の前半に架けられた木製の橋で、それ以前は瓦葺根橋と呼ばれた木橋が架かっていました。



現在



昭和42年

寺橋わきの水練場 （宮前橋付近）



昭和32年

越ヶ谷の久伊豆神社参道前の寺橋わきの水練場（水泳場）では子どもたちが元気に泳ぐ姿が夏の風物詩となっていました。

この水練場は、プールがなかった時代に子どもたちが水泳を楽しんでもらおうと青年団が設けたもので、話を聞いて岩槻や春日部からも子どもたちが訪れていました。



現在

国体の開催



昭和42年



平成16年

越谷市では、第22回と第59回の国民体育大会が開催されました。昭和42年（1967）に開催された第22回大会では、秋季大会でバドミントン競技が行われ、昭和天皇、皇后両陛下が会場を訪れ試合をご観戦されました。平成16年（2004）に開催された第59回大会では、夏季大会で成年女子サッカー、秋季大会では、バレーボール（成年男子6人制）、軟式野球（成年）が行われました。また、この大会では選手の民泊が行われ市民との協働による国体開催となりました。

越ヶ谷秋まつり (越ヶ谷地区の旧日光街道周辺)

江戸時代中期から伝わる豊年を祝う祭りで、おおむね3年に1度行われます。古い伝統と格式があり、江戸時代の名残をそのまま伝える歴史絵巻を見るようです。祭りは久伊豆神社から神様がお出ましになる神輿渡御で始まり、到着した神輿は各町内の山車8台に迎えられ町内を巡回します。



現在



昭和33年

見田方遺跡公園 (越谷レイクタウン地区)

平成20年(2008)3月に開設した越谷レイクタウン駅の北側には見田方遺跡公園が広がります。昭和41年(1966)から42年にかけて遺跡の発掘調査が実施され、住居跡から土器や勾玉などが出土しました。この地区では、新たなまちづくりが進められ、2万2400人が住むまち「越谷レイクタウン」が誕生しました。



現在



昭和41年

久伊豆神社(越ヶ谷)



昭和31年



現在

越ヶ谷の久伊豆神社の創建された年代は不明ですが、「吾妻鏡」の建久5年(1194)6月の条に、武蔵国大河土御厨において久伊豆宮神人と喧嘩出来の由、との記述があり、この久伊豆宮とは当社を指しているとの説もあります。この久伊豆宮については、武蔵七党のうち私市党あるいは野与党の氏神ともいわれています。

区画整理



昭和40年 北越谷駅西口



現在

人口の増加による無秩序な開発を防ぎ良好な都市基盤を整備するため、積極的に土地区画整理事業が施行されています。昭和36年(1961)に市内で最初に区画整理事業が始まった北越谷地区では、道路や公園、北越谷駅西口駅前広場の整備を行うとともに、良好な住宅地の整備が行われました。

第2章

あの頃、あの時、 懐かしの写真集

市民の皆さんからお寄せいただいた写真は、越谷ならではの数々のエピソードが詰まっています。そんな思い出の写真の中から名シーン、名場面をご紹介します。

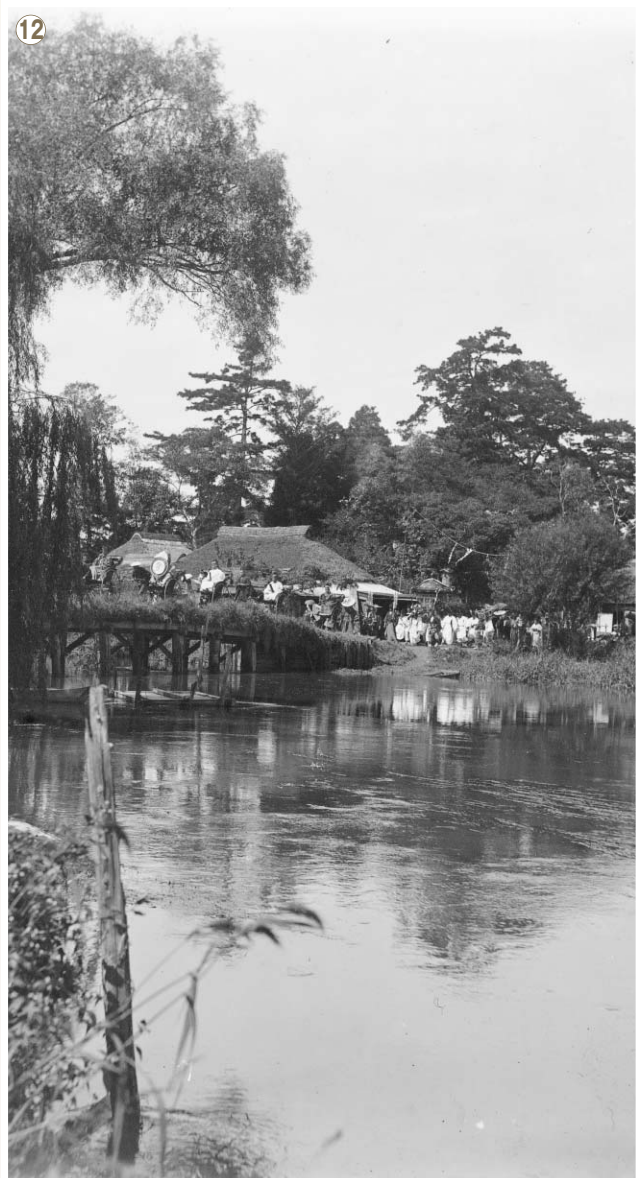
[明治時代]



- ① 元荒川の鉄橋を渡る蒸気機関車
- ② 蒸気機関車の通過を見物するために舟で待つ人々
- ③ 越ヶ谷停車場（現在の北越谷駅）に停車する客車
- ④ 越ヶ谷町の町並み
- ⑤ 久伊豆神社の参道入口



[明治～大正時代]



⑩ 越ヶ谷古梅園

⑪ 元荒川に架かる鉄橋

⑫ 寺橋を渡る神輿渡御の行列

⑬ 越ヶ谷停車場完成祝賀会（大正9年）



[明治時代]

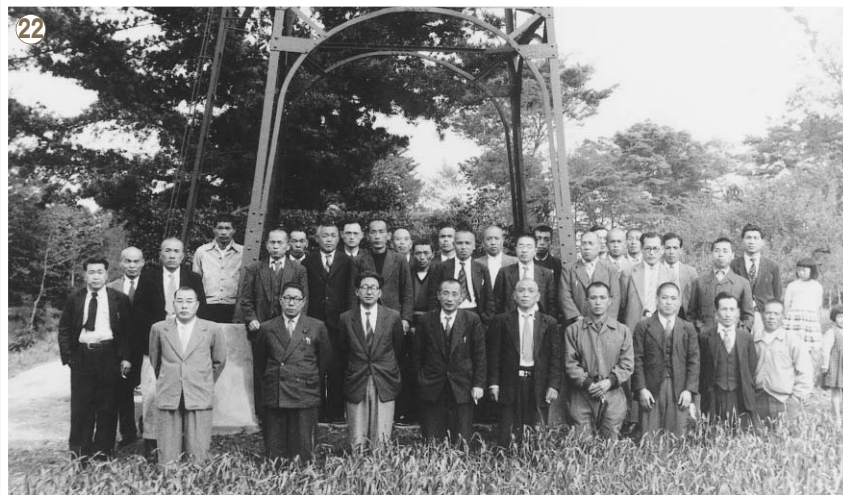
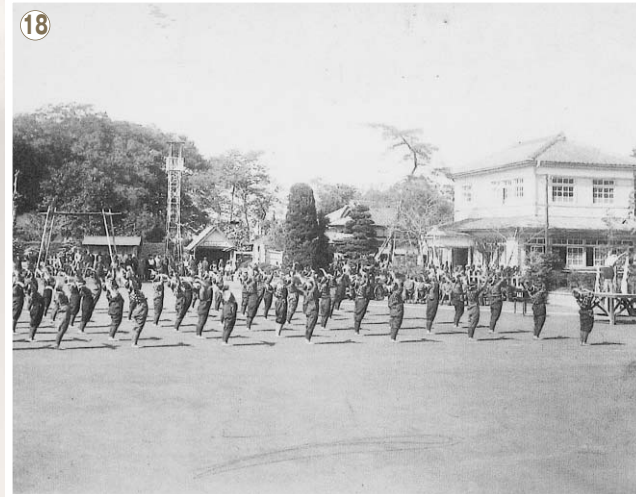
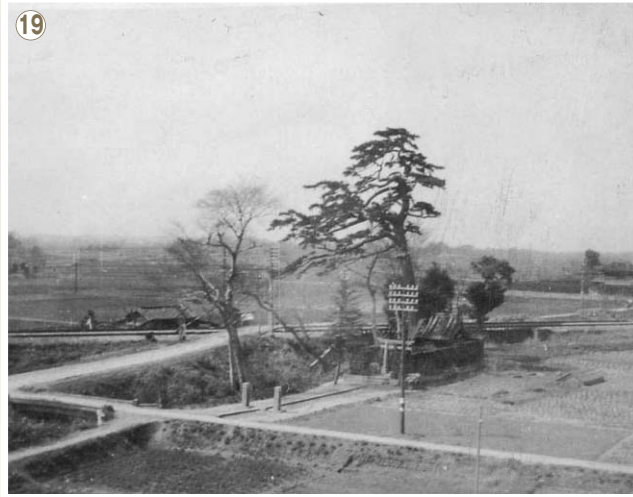


⑥ ⑦ ⑧
明治43年8月の大洪水

⑨ ゆかた地の天日干し



[昭和初期～20年代]



- ⑱ 新方尋常高等小学校の授業風景（昭和10年代）
- ⑲ 蒲生西一丁目の久伊豆神社付近（昭和20年代）
- ⑳ 田植え風景（昭和20年代）
- ㉑ 桜井村の火の見やぐら（昭和27年）
- ㉒ 桜井村消防団第六分団（昭和27年）



[昭和初期]



- ⑭ 久伊豆神社のフジ
- ⑮ 久伊豆神社の境内
- ⑯ 国道4号瓦曾根交差点付近（昭和15年）
- ⑰ 大袋村大道の水田に着陸した飛行機（昭和8年）



[昭和40年代]



28 平和橋下から見る福社会館（昭和44年）

29 葛西用水ボート場（昭和47年）

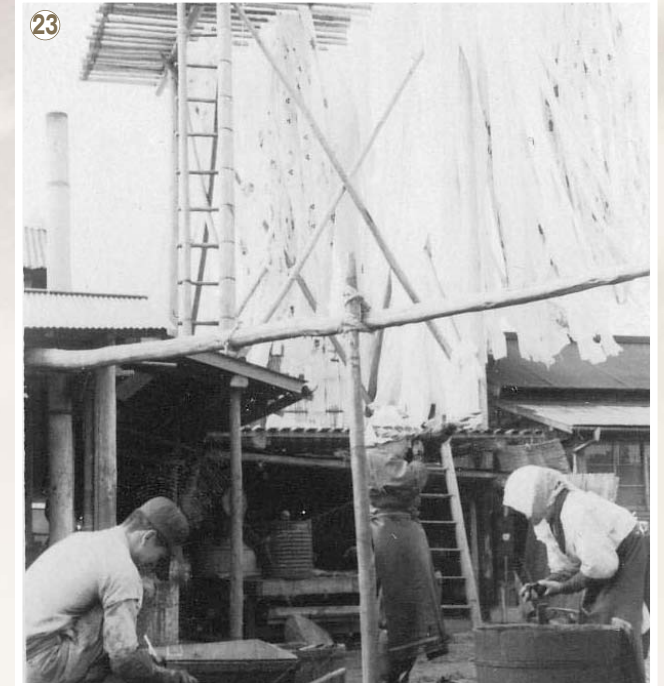
30 にぎわう蒲生中央通商店街（昭和45年）

31 大相模地区での馬を利用した耕作（昭和42年）

32 越ヶ谷秋まつり（昭和46年）



[昭和30年代]



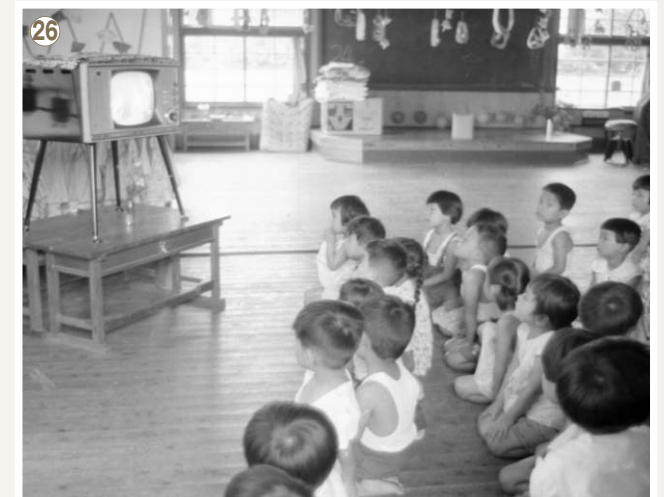
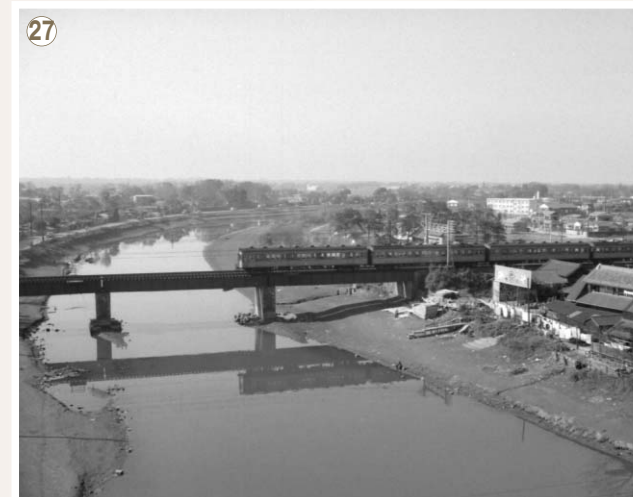
23 染物工場での反物の天日干し（昭和30年代）

24 元荒川で洗い物をする人たち（昭和30年代）

25 東小林の香取神社での紙芝居（昭和30年代）

26 テレビに見入る蒲生保育所の子どもたち（昭和37年）

27 元荒川に架かる鉄橋を通過する電車（昭和39年）



[平成元年～現代]



38 赤水門と呼ばれた旧瓦曽根堰（平成8年）

39 しらこぼと橋と旧瓦曽根堰（平成8年）

40 蒲生駅（平成9年）

41 越谷駅付近（東柳田町付近）の稲掛け風景（平成3年）

42 東埼玉資源環境組合展望台からの風景（平成9年）



[昭和50・60年代]



33 越谷駅東口（昭和51年）

34 越谷駅東口（昭和61年）

35 南越谷駅南口（昭和54年）

36 越谷コミュニティセンターと
南越谷駅・新越谷周辺駅（昭和55年）

37 南越谷駅と新越谷駅を結ぶ通路（昭和61年）



第3章

越谷 50年の歩み



越谷市制施行記念式典〔昭和33年〕

古くは海の中、見田方遺跡から土器

今から約4〜5000年前、縄文時代後期のころ、越谷を含む約10メートルの等高線までの地は海の中になりました。やがて今から約3000年前になると、地球の気温が現在のような温度に下がり、海が後退し河川によって運ばれた土砂によって沖積地が形成されました。

人々は丘陵地や台地から稲作に適した沖積地に移り住み、自然堤防に集落を構え農業を始めようになりました。こうした中で、越谷に人々が住みつくようになったのは、大相模地区の見田方の地から竪穴式住居跡が発見され、数多くの土器や装飾具、モミなどが出土したことから、古墳後期から古代にかけてと推定されます。

その後、大和朝廷により国や郡が設けられ、当時、越谷は元荒川を境に武蔵国と下総国、綾瀬川を境に武蔵国埼玉郡と足立郡に分けられていました。このころ大相模郷に天平勝宝2年(750)に大聖寺が、貞観2年(860)に野島の浄山寺が創建されたと伝えられています。



▲見田方遺跡から出土した土器



▲浄山寺

6世紀後半 645 大化元
750 天平勝宝2
771 宝亀2
860 貞観2
939 天慶2
1034 長元7
1040 長久寛徳年間
1180 治承4
1184 寿永3
1194 建久5
1249 建長元
1326 嘉暦元
1333 元弘3
1345 貞和元
1461 寛正2
1478 文明10
1562 永祿5
1567 元龜3
1572 天正14
1586

見田方(大成町)に古墳時代後期の集落がつけられ、人々の生活が営まれるようになった。大化の改新が始まり、天皇を中心とした律令制による統一国家が樹立されていく。大相模不動坊(相模町大聖寺)が創建されたと伝える。武蔵国は東山道より東海道に編入される。以来奥州海道、甲州海道など海道と称された。野島に天台宗慈福寺(現在の曹洞宗浄山寺)が創建されたと伝える。平将門、王城を建設、新皇と称した大沢(現在の北越谷)の浅間社が勧請されたと伝える。野与党の一族古志賀谷二郎為基や大相模二郎能高が越谷に定住。野与党の氏神久伊豆宮を祀ったと伝える。源頼朝、武蔵国に入り平氏を攻める。源頼朝、大河土御厨を豊受大神宮(伊勢神宮の外宮)に寄進する。大河土御厨(越谷の一部を含む八条領など)と越ヶ谷久伊豆宮神人との争いが起きる。越谷最大最古の板碑が建立される(現在の御殿町)。金沢称名寺文書新方検見帳に恩間の地名が載せられている。鎌倉北条氏滅亡。足利尊氏、大泊安国寺に利生塔を造塔したと伝える。足利成氏、上杉方と越ヶ谷野に戦い古河に敗走したと伝える。越ヶ谷天縁寺開基と伝える。北条氏康、葛西の本田氏に越谷・舎人(足立区)の両郷を与えたとした文書を発給。太田氏資、平林寺領馬籠(岩槻)四条(越谷)の領地を安堵する。呑龍上人、平方の林西寺に入り剃髪する。岩槻城代北条氏繁、大相模不動院に控書を発す。太田氏房、大相模不動院に禁制を発す。

中世

中世の動乱と板碑

平安末期から鎌倉期にかけて武士が登場しましたが、この武士を中心に新田開発が進められていきました。越谷には武蔵七党のうち野与党の一族に古志賀谷(越谷)二郎為基、大相模二郎などの名がみられます。武蔵七党野与党の氏神が久伊豆神社といわれています。

また、中世には生前に死後の冥福を願って立てられた石の塔婆が数多く建立されています。これを板石塔婆とも板碑ともいいます。越谷にはこの板碑は建長元年(1249)銘のものはじめ200基以上が確認されており、当時の人々の生活の一端をうかがうことができます。子育てで有名な呑龍上人が住職を務めていた平方の林西寺をはじめ、迎摂院、安国寺、天獄寺など市内の主な寺院は、中世の開山を伝えています。

鎌倉期から南北朝を経て戦国時代を迎え、天正2年(1574)に上杉謙信の関東撤退後は北条氏が関東を制覇することになりました。



▲建長元年板碑 (御殿町)



▲林西寺

1590 文禄3
1594 慶長5
1600 慶長7
1602 慶長9
1603 慶長10
1604 慶長11
1607 慶長14
1617 元和3
1625 寛永2
1629 寛永6
1630 寛永7
1641 寛永18
1647 明暦3
1657 明暦13
1660 万治3
1662 寛文2
1680 延宝8
1695 元禄8
1696 元禄9
1698 元禄11
1704 宝永元
1706 宝永3
1716 享保元
1742 寛保元
1762 宝暦2
1780 安永9
1783 天明3

小田原北条氏滅亡。代わって徳川家康関東移封江戸城を本城とするよう命ぜられる。伊奈忠次、利根川を太日川(江戸川筋)に替え。これにより鷺宮以南の利根川は廃川となり古利根川と称される。関ヶ原戦の勝利で家康天下に君臨。奥州海道を公道に指定。四丁野村の一部に越ヶ谷宿が取立てられる。家康、江戸に幕府を開く。家康が越ヶ谷御殿を造成する(現在の御殿町)。家康廟を日光山に改葬。以来、奥州海道の千住く宇都宮を日光街道と呼ぶようになる。三野宮・大道・大竹・恩間を岩槻藩領とする。荒川を入間川筋に瀬替。熊谷からの荒川は元荒川と称された。草加宿成立。日光街道はほぼ旧4号国道筋になる。関宿より金杉間の新江戸川開通。江戸城焼失。越ヶ谷御殿が江戸城二の丸に移される。幸手用水路(葛西用水)が開かれる。見田方・南百・千疋・四条・麦塚・柿ノ木、後に東方忍藩領になる。小菅村から隅田村までの新綾瀬川開通。綾瀬川は排水専用河川となる。

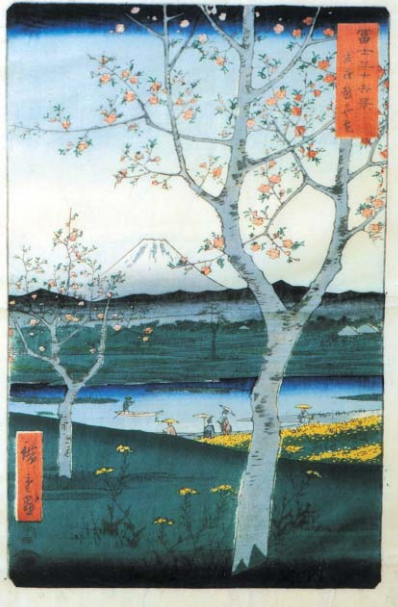
越ヶ谷地域などの幕府領総検地。越ヶ谷宿など日光街道に助郷帳が交付される。砂原・後谷は米倉藩領に、荻島などは旗本知行所に分給される。関東洪水。越谷地域の被害も甚大。富士山大噴火。越谷地域にも灰が降り不作。鷹場復活。越谷地域も鷹場となる。関東洪水。越谷地域の被害も甚大。蒲生一村総検地。名主処罰。大松屋福井家越ヶ谷宿本陣となる。浅間山噴火。越谷地域も大凶作。大沢町大火。

日光街道第三の宿場町の誕生

天正18年（1590）7月、豊臣秀吉の関東攻めで北条氏は滅ぼされ、かわって徳川家康が関東へ入国しました。徳川氏は荒川や利根川の流路の大改修を行うほか、葛西用水の開発など幾多の用排水路を整備しました。

また、慶長7年（1602）に奥州街道（後の日光街道）にも伝馬制が敷かれ、越ヶ谷宿が取り立てられました。宿場は公用荷人運輸の継所として設けられたものです。街道沿いに新しく家並みが造成され、天保14年（1843）には、戸数1005軒、人口4603人を数え、旅籠（はたご）屋は、本陣、脇本陣を含め57軒に及びます。

徳川家康は民情の視察を兼ね、鷹狩りをしながら各地を訪れていました。はじめ寺社や民家などで休んでいましたが、しだいに家康の別荘である御殿が設けられていきました。増林にも御茶屋御殿が設けられましたが、慶長9年（1604）に越ヶ谷に移されました。



◀歌川広重の「武蔵越かや在」 埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵



▲旧日光街道沿いの古い家並

近代

近代化と交通の変革

現在の越谷市域は明治元年（1868）武蔵知県事、同4年には埼玉県、同12年には南埼玉郡の管轄となり、同22年には市制・町村制で2町8カ村になりました。

この間、学校や郵便所、町村役場が整備されました。同26年には千住・粕壁間に千住馬車鉄道が、同32年には千住・久喜間に東武鉄道が開通しました。

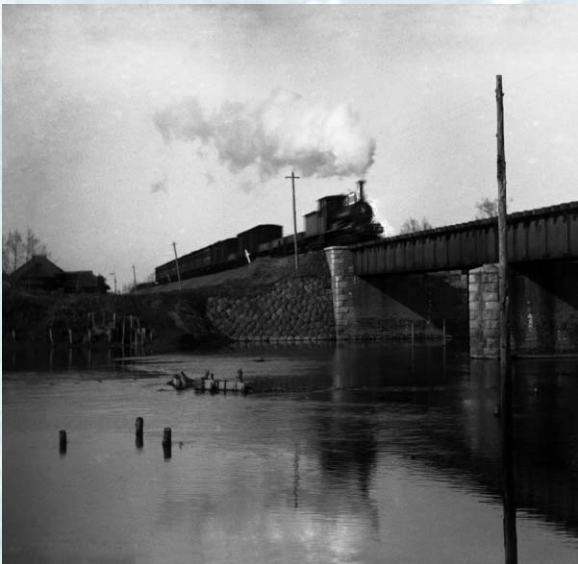
当時の停車場は北千住、西新井、越ヶ谷（現在の北越谷）、粕壁（現在の春日部）、杉戸（現在の東武動物公園）、久喜の6停車場でした。

そのころ越ヶ谷町などの貨物輸送は、綾瀬川などから舟で運んでいましたが、大正9年（1920）4月に越ヶ谷町に停車場が開設されてからは鉄道輸送に切り替えられました。

また、大正2年（1913）には越ヶ谷町・大沢町に初めて電灯がともりました。



▲高瀬舟



▲元荒川の鉄橋を渡る蒸気機関車

19世紀	18世紀	明治	昭和	大正
1816	1786	1869	1930	1904
文化13	寛政4	明治2	昭和5	大正37
大沢町大火	関東洪水。越谷地域の被害も甚大。関東郡代伊奈氏滅亡。家臣会田七左衛門家などの土地は取上げられる。	越谷町に公立の啓明学校が設立される。	越ヶ谷地区2町8カ村が合併し越谷町となる。	日露戦争が始まる。越谷の出征兵にも多数の戦没者が出る。
越ヶ谷町山崎篤利・小泉市右衛門・町山善兵衛、平田篤胤の門人となる。	大沢町に公立の啓明学校が設立される。	越ヶ谷町大火	越ヶ谷町立実科高等女学校が県に移管。越ヶ谷高等女学校と称される（現在の越ヶ谷高等学校）。	宮内庁埼玉鴨場が開設される。
徳川幕府大政奉還	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	健康保険類似組合「越ヶ谷順正会」が設立	東武鉄道越ヶ谷駅が開設され、大沢の旧越ヶ谷駅は武州大沢駅と改称される。
（明治元年）薩長を中心とした鎮撫隊越谷に往復。幕府崩壊。維新政府が樹立される。江戸城が皇居となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	農地解放により大地主姿を消す	古利根川大吉の重り土橋が改築され古利根堰と寿橋が建設される。
越谷地域は大宮県（同年浦和県）と小菅県の管轄となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	越ヶ谷大沢自治体警察が発足（26年廃止）	関東大震災。越谷の被害も甚大。郡制廃止
江戸大地震。越谷地域の被害も甚大。水戸天狗党拳兵。倒伐隊越ヶ谷宿に止宿	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	11月 越ヶ谷地区2町8カ村が合併し越谷町となる。	越ヶ谷町立実科高等女学校が県に移管。越ヶ谷高等女学校と称される（現在の越ヶ谷高等学校）。
長州征伐・御用金を課せられる	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	12月 町長選挙が行われる。初代町長に大塚伴鹿氏が当選	東武鉄道越ヶ谷駅が開設され、大沢の旧越ヶ谷駅は武州大沢駅と改称される。
徳川幕府大政奉還	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	新警察法施行（自治体警察廃止）	越ヶ谷町立実科高等女学校が開設される。
（明治元年）薩長を中心とした鎮撫隊越谷に往復。幕府崩壊。維新政府が樹立される。江戸城が皇居となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	電気掃除機 冷蔵庫 洗濯機が三種の神器と呼ばれる	越ヶ谷町立実科高等女学校が開設される。

19世紀	18世紀	明治	昭和	大正
1816	1786	1869	1930	1904
文化13	寛政4	明治2	昭和5	大正37
大沢町大火	関東洪水。越谷地域の被害も甚大。関東郡代伊奈氏滅亡。家臣会田七左衛門家などの土地は取上げられる。	越谷町に公立の啓明学校が設立される。	越ヶ谷地区2町8カ村が合併し越谷町となる。	日露戦争が始まる。越谷の出征兵にも多数の戦没者が出る。
越ヶ谷町山崎篤利・小泉市右衛門・町山善兵衛、平田篤胤の門人となる。	大沢町に公立の啓明学校が設立される。	越ヶ谷町大火	越ヶ谷町立実科高等女学校が県に移管。越ヶ谷高等女学校と称される（現在の越ヶ谷高等学校）。	宮内庁埼玉鴨場が開設される。
徳川幕府大政奉還	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	健康保険類似組合「越ヶ谷順正会」が設立	東武鉄道越ヶ谷駅が開設され、大沢の旧越ヶ谷駅は武州大沢駅と改称される。
（明治元年）薩長を中心とした鎮撫隊越谷に往復。幕府崩壊。維新政府が樹立される。江戸城が皇居となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	農地解放により大地主姿を消す	古利根川大吉の重り土橋が改築され古利根堰と寿橋が建設される。
越谷地域は大宮県（同年浦和県）と小菅県の管轄となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	越ヶ谷大沢自治体警察が発足（26年廃止）	関東大震災。越谷の被害も甚大。郡制廃止
江戸大地震。越谷地域の被害も甚大。水戸天狗党拳兵。倒伐隊越ヶ谷宿に止宿	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	11月 越ヶ谷地区2町8カ村が合併し越谷町となる。	越ヶ谷町立実科高等女学校が県に移管。越ヶ谷高等女学校と称される（現在の越ヶ谷高等学校）。
長州征伐・御用金を課せられる	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	12月 町長選挙が行われる。初代町長に大塚伴鹿氏が当選	東武鉄道越ヶ谷駅が開設され、大沢の旧越ヶ谷駅は武州大沢駅と改称される。
徳川幕府大政奉還	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	新警察法施行（自治体警察廃止）	越ヶ谷町立実科高等女学校が開設される。
（明治元年）薩長を中心とした鎮撫隊越谷に往復。幕府崩壊。維新政府が樹立される。江戸城が皇居となる。	徳川幕府大政奉還	越ヶ谷町大火	電気掃除機 冷蔵庫 洗濯機が三種の神器と呼ばれる	越ヶ谷町立実科高等女学校が開設される。

昭和30年代

越谷市誕生。 そして人口急増へ

昭和28年（1953）、町村合併促進法が施行され、町村合併の気運が高まる中、昭和29年11月に越谷地区2町8カ村が合併して、越谷町となりました。昭和30年9月には、町役場新庁舎が越ヶ谷一丁目に完成しました。その後、草加町の伊原、麦塚、上谷の越谷町への編入を経て、昭和33年11月に市制が施行され人口4万8318人の越谷市が誕生しました。

当事の暮らしに目を向けると、昭和31年に経済企画庁（現在の内閣府）から発表された経済白書の副題には「もはや戦後ではない」と記されており、日本経済は高度成長へと進み出しました。昭和35年には、人口が5万人を突破しました。また、人口の増加に合わせて地下鉄日比谷線が北越谷駅まで相互乗り入れ、首都圏のベッドタウンとして、その後の人口の急増時代を迎えることとなります。東京五輪開催で日本中が沸いた昭和39年、マイカー時代の到来に合わせて道路整備が進められ国道4号・草加バイパスの工事が始まりました。



▲第1回町内一周駅伝競走〔昭和31年〕



▲越谷町役場庁舎（後の市役所庁舎）〔昭和30年〕



▲堂面橋が完成〔昭和31年〕



▲越谷町合併3周年記念式典〔昭和32年〕

昭和34年（1959年）		昭和33年（1958年）				昭和32年		昭和32年（1957年）			昭和31年（1956年）			昭和30年（1955年）										
10月	9月	8月	5月	4月	3月	12月	11月	9月	8月	7月	4月	12月	10月	8月	4月	2月	1月	11月	10月	9月	4月	3月	1月	
市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	大袋地区の簡易水道の通水式が行われる初の鉄筋コンクリート造り校舎が中央中学校に完成	越ヶ谷中学校と大沢中学校を統合、中央中学校が開校する	宮前橋が完成	国際興業バス、越谷〜大宮間（大門野田経由）バス路線の運転を開始	大袋地区の簡易水道の通水式が行われる初の鉄筋コンクリート造り校舎が中央中学校に完成	市制施行後初の市議会が庁舎会議室で開かれる	日中貿易全面停止。1万円札が発行される。東京タワー、国立競技場が完成。岩戸景気が始まる	定例市議会が開かれる。昭和34年度の予算総額2億6637万円、一般会計1億7000万円	越ヶ谷中学校と大沢中学校を統合、中央中学校が開校する	宮前橋が完成	国際興業バス、越谷〜大宮間（大門野田経由）バス路線の運転を開始	大袋地区の簡易水道の通水式が行われる初の鉄筋コンクリート造り校舎が中央中学校に完成	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる	市制施行後初の市議会議員選挙が行われる



▲国道4号バイパスの工事が開始〔昭和39年〕



▲越谷市消防署が開署〔昭和34年〕



▲越ヶ谷商店街（中町・越ヶ谷三丁目）〔昭和30年代〕



▲葛西用水と元荒川の分離工事〔昭和35年〕

昭和39年（1964年）				昭和38年（1963年）		昭和37年	
10月	8月	6月	4月	8月	7月	6月	4月
震災が発生	30カ年計画で下水道事業に着手	市営火葬場が登戸町に完成	都市計画法により市内の用途地域を指定自治会連合会が発足	稲の害虫防除としてヘリコプターによる初の農薬散布が行われる	蒲生地区の一部を除き商店の週休制が実施される	浦生地区の一部を除き商店の週休制が実施される	農業振興特別指導事項が実施される
地下鉄日比谷線が中目黒まで全線開通	国道4号バイパスの工事が始まる	市営火葬場が登戸町に完成	都市計画法により市内の用途地域を指定自治会連合会が発足	稲の害虫防除としてヘリコプターによる初の農薬散布が行われる	蒲生地区の一部を除き商店の週休制が実施される	浦生地区の一部を除き商店の週休制が実施される	農業振興特別指導事項が実施される

昭和37年(1962年)		昭和36年（1961年）		昭和35年（1960年）				昭和34年
5月	4月	3月	1月	11月	9月	8月	7月	4月
大相模見田方耕地で古墳時代の土器発見	安全都市宣言をする	東武ガスが1600戸に都市ガスの供給を始める	北越谷地区で初の土地区画整理事業に着手	増林浄水場が完成	警察署庁舎が新築移転（大沢）	草加・越谷清掃組合が設立される	越谷で全国初の胃ガン集団検診始まる	蒲生中学校を南中学校と改称する
消防署で救急車が購入され、救急活動開始								

昭和40年代

日本の経済成長とともに 都市化するまち

農地の宅地化や地下鉄日比谷線の東武伊勢崎線への相互乗り入れなどに伴い、昭和42年（1967）には、人口が10万人を突破しました。都市化の進展でまちの様子も大きく変り、人口の急増は、まちを活性化させる反面、さまざまな問題を抱えました。農地の埋め立てによる無秩序な住宅地の拡大、地下水の汲み上げによる地盤沈下、排水不良による浸水被害、汚水流出による河川の汚濁、交通事故や防災上の問題、学校や医療施設などの不足が生じてきました。これらに対応するため市では、さまざまな方策が進められましたが、増え続ける人口に追われるようなまちは、この時代が続き、昭和42年には、埼玉県体が開催され、越谷市ではバドミントン競技が行われました。また、この年、草加バイパスが開通し、高度経済成長に伴い増える交通量に対応しました。さらに、現在の市庁舎が完成、市制施行10周年を祝う式典とともに新築落成記念式典が執り行われました。



▲市制施行10周年並びに市庁舎新築落成記念式典〔昭和44年〕



▲開通した国道4号バイパス（南荻島交差点付近）〔昭和42年〕



▲現在の市役所庁舎が完成〔昭和44年〕

昭和44年（1969年）					昭和43年（1968年）			昭和42年							
11月	10月	9月	6月	5月	4月	3月	12月	11月	8月	5月	4月	2月	1月	12月	
市役所に市民相談室を開設		北部浄水場が完成		5小学校に給食の配送を開始	給食センターが完成、市内5中学校、元助役の池ノ谷与一郎氏が名誉市民になる	市制施行10周年・市庁舎新築落成記念式典が執り行われる	市制施行10周年、県越谷保健所、県越谷土木事務所が開所	養護老人ホーム「順正苑」が開設	松伏水道企業団が合併、越谷・松伏水道企業団となる	越谷市水道事業と越谷・松伏水道企業団が合併、越谷市水道事業となる	瓦曾根溜井埋立地に市役所庁舎並びに県合同庁舎が完成	浦生第二小学校（校舎は浦生小学校）、県立越谷北高等学校が開校	越谷市水道事業と越谷・松伏水道企業団が合併、越谷市水道事業となる	川端康成氏がノーベル文学賞を受賞。三億円強奪事件が発生。小笠原諸島がアメリカから返還される	
					国民健康保険法が改正される（越谷は国保発祥の地）	社会福祉協議会が社会福祉法人となる	市役所に交通事故相談所を設置	東小林汚水処理場が完成	市制施行10周年を迎える	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市史編纂事業に着手	戸籍謄本、抄本、住民票写しの交付の電話受付が始まる	市役所に交通事故相談所を設置	浦生、大里でみどりの箱を設置し、県内初の機械化によるごみ収集が行われる	
					市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される	市独自の宅地造成事業協議基準が設置される

昭和42年（1967年）				昭和41年（1966年）				昭和40年（1965年）						
10月	9月	5月		6月	10月	11月	12月	4月	1月	10月	11月	9月	5月	3月
埼玉県体開幕、バドミントン競技が第1・第2体育館で行われる	人口が10万人を突破	消防署庁舎が完成	北越谷地区土地区画整理事業の記念会館（後の北越谷公民館）が完成	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	不動橋架け替え完成	東部清掃組合に尿処理場が完成	北越谷地区土地区画整理事業の記念会館（後の北越谷公民館）が完成	川柳小学校が開校	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更
				越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更	越谷松伏水道組合が越谷・松伏水道企業団に名称を変更



▲武蔵野線が開通〔昭和48年〕



▲第1回商工物産展〔昭和46年〕



▲スポーツ・レクリエーション都市宣言〔昭和49年〕



▲交通安全市民パレード〔昭和46年〕

昭和49年 (1974年)	昭和48年 (1973年)	昭和47年	昭和47年 (1972年)	昭和46年 (1971年)	昭和45年 (1970年)	昭和44年(1969年)
11月 佐藤栄作氏がノーベル平和賞を受賞。長島茂雄選手が現役引退。高校進学率が90%を超える 9月 「しあわせ号」がスタート 7月 スポーツ・レクリエーション都市宣言をする 6月 新越谷駅が開業 5月 寝たきり老人のための移動浴そう車 4月 大袋東小学校(校舎は大袋小学校、北陽中学校、県立越谷南高等学校が開校)が開校 1月 北越谷地区が行政区域となる 12月 第二学校給食センターが完成 12月 大沢・大袋・蒲生・南越谷の4小学校に市内で初めて児童保育室が開業	12月 市役所に緊急処理センターが開業 11月 市立児童相談所が開業 10月 島村平市郎氏が市長退任 10月 市長選において黒田重晴氏が当選 11月 市営斎場が東町に完成 12月 第1次オイルショック。江崎玲於奈氏がノーベル物理学賞を受賞。70歳以上の老人医療の無料化を実施	1月 公害防止条例が制定される 2月 移動図書館しらかばと号の巡回が始まる 3月 消防署蒲生分署が開業 4月 蒲生南小学校、北越谷小学校(校舎は大沢小学校)が開校 4月 武蔵野線(新松戸〜府中本町)が開通し南越谷駅が開業 越谷貨物ターミナル駅が開業 准看護学校が開校 県立児童相談所が開業 市立児童相談所が開業 市立児童相談所が開業	12月 戦後初の花火大会が元荒川で開催 8月 戸籍謄・抄本、住民票の写しなどの取られる 6月 越谷市総合振興計画の基本構想が策定される 5月 三野宮橋の架け替え完成 4月 越谷市総合振興計画の基本構想が策定される	12月 大袋で日本万国博覧会(EXPO70)が開業。日航機よど号ハイジャック事件。三島由紀夫が割腹自殺。人口が初めて1億人を超える(第11回国勢調査より) 4月 消防署谷中分署が開業 2月 大沢北小学校が開校 4月 精神薄弱児(現在の知的障害児)通園施設「みのり学園」が開校される 6月 県立越谷青年の家が開所 9月 人口が15万人を突破 11月 第1回交通安全市民集会を開催 12月 第1回商工物産展が第1体育館で開催 12月 第1回農業祭が第1体育館で開催 環境庁を設置。円が変動相場制へ移行 大袋北小学校(校舎は大袋小学校、富士中学校)が開校	12月 大阪で日本万国博覧会(EXPO70)が開業。日航機よど号ハイジャック事件。三島由紀夫が割腹自殺。人口が初めて1億人を超える(第11回国勢調査より) 12月 消防署谷中分署が開業 11月 大沢北小学校が開校 10月 精神薄弱児(現在の知的障害児)通園施設「みのり学園」が開校される 8月 県立越谷青年の家が開所 4月 人口が15万人を突破 3月 第1回交通安全市民集会を開催 3月 第1回商工物産展が第1体育館で開催 3月 第1回農業祭が第1体育館で開催 3月 環境庁を設置。円が変動相場制へ移行 3月 大袋北小学校(校舎は大袋小学校、富士中学校)が開校	12月 レクリエーション協会が発足 12月 アポロ11号が人類初の月面着陸。東名高速道路(東京IC〜小牧IC)が全面開通。大学紛争が激化し、東大安田講堂が占拠され機動隊が出動 12月 文化連盟が発足 12月 堂面橋の架け替え完成 12月 南中学校が移転、東越谷小学校(校舎は越ヶ谷小学校と増林小学校)が開校 12月 新都市計画法による市街化区域と調整区域が決まる 12月 図書館で図書の巡回貸し出しが始まる 12月 大塚伴鹿氏が市長退任 12月 ごみ収集区域が市内全域になる 12月 市長選において島村平市郎氏が当選 12月 埼玉東部地区の4市5町による埼玉東部広域行政協議会が発足 12月 神明橋が開通

昭和50年代

福祉・医療の充実と 快適な生活へ

昭和50年代に入ると、住民の医療や福祉に重点が置かれ、重度心身障がい者の医療費の無料化や看護専門学校の開校、市立病院の開院がありました。人口は年々増加し、昭和51年（1976）には、20万人を突破しました。また、人口の増加に伴い小・中学校が各地域で相次いで開校されました。市制施行20周年となる昭和53年には、「越谷市民であることに誇りと責任を持ち、水と緑と太陽に恵まれた豊かなまちを築くため限らない願いをこめて」という市民憲章が制定されました。昭和54年には、市民のふれあいを目的に建設が進められていた越谷コミュニティセンターが開館し、市制施行20周年記念式典が盛大に執り行われました。昭和57年になるとせんげん台駅南陸橋が開通し、東西の往来が便利になりました。

住みよい環境として、生活の利便性だけでなく快適性（アメニティ）が求められるようになり、越谷の美しい自然を選んだ越谷アメニティ八景が選ばれ、絵はがきも発行されました。昭和58年には、市制施行25周年記念として式典で「文化都市宣言」が多数の市民の前に宣言され、越谷市の一層の発展を祈りました。



▲市制施行20周年・越谷コミュニティセンター落成記念式典（昭和54年）



▲市立病院が開院（昭和51年）



▲県営しらこぼと水上公園がオープン（昭和54年）

昭和55年 (1980年)	昭和54年 (1979年)	昭和53年 (1978年)	昭和52年 (1977年)	昭和51年 (1976年)	昭和50年 (1975年)
12月 葛西用水土手にチューリップが植えられ、平和橋たもとにフジ棚ができる 7月 水道管理センター（現在の越谷・松伏水道企業団庁舎）が完成 5月 精神薄弱者（現在の知的障害者）通所授産施設「しらこぼと職業センター」が開所 4月 大袋中学校が開校 市役所別館が完成 私立獨協埼玉高等学校が開校	9月 消費生活センターが越谷コミュニティセンター内に開所（現在は中央市民会館内） 8月 越谷コミュニティセンターが開館。市制施行20周年記念式典・越谷コミュニティセンター落成記念式典が執り行われる 7月 越谷税務署が開署 6月 県営しらこぼと水上公園が開園 西高等学校が開校 明正小学校、武蔵野中学校、県立越谷西高等学校が開校 4月 新東京国際空港（成田空港）が開港。 サンシャイン60が完成。冒険家の植村直巳氏が世界初の単独北極点到達に成功 3月 下間久里の獅子舞が県指定文化財になる 2月 市立病院が越谷市医師会に加盟 1月 都市総合交通規制を実施	11月 市立病院が越谷市医師会に加盟 6月 流通センター内に流通公園サッカー場が完成 5月 勤労者住宅資金貸付制度を開始 4月 市制施行20周年を迎え市民憲章、市の木、市の花、市の歌が制定される 越谷市総合振興計画第2次中期計画が策定される 2月 市立病院が越谷市医師会に加盟 1月 第一回ミス交通安全コンテストを開催 黒田重晴氏が市長選に当選 王貞治選手が756号本塁打を打ち、初の国民栄誉賞を受賞。有珠山（北海道）が爆発。樋口久子選手が全米女子プロゴルフ選手権で初優勝	11月 消防署間久里分署が開署 8月 県立越谷養護学校が開校 4月 国道4号バイパス越谷～春日部が開通 3月 光陽中学校が開校 地方自治団体による越谷コミュニティセンターが完成 2月 東部清掃組合し尿処理場の総合脱臭装置が完成	11月 東海道・山陽新幹線（東京駅～博多駅）が全線開通。ベトナム戦争が終結。沖縄国際海洋博覧会が開演 9月 人口が20万人を突破 8月 粗大ごみ処理センターが完成 7月 ロッキード事件が発生。鹿児島市立病院で日本初の五つ子が誕生 6月 消防署間久里分署が開署 5月 東部清掃組合し尿処理場の総合脱臭装置が完成 4月 国道4号バイパス越谷～春日部が開通 3月 光陽中学校が開校 2月 市立病院が越谷市医師会に加盟	2月 越谷市総合振興計画中期計画策定 3月 初代市長の大塚伴鹿氏が3人目の名誉市民になる 4月 平方小学校、弥栄小学校、大間野小学校が開校 市立第二小学校に障がい児学級を設置 市立高等看護学院（後の看護専門学校）が開校 10月 老人農園が開園 11月 重度心身障がい者の医療費が無料になるスポーツ少年団が結成 第三セクターによる越谷コミュニティプラザ株式会社が設立される 東海道・山陽新幹線（東京駅～博多駅）が全線開通。ベトナム戦争が終結。沖縄国際海洋博覧会が開演



▲市立図書館が開館〔昭和58年〕



▲あだたら高原少年自然の家が二本松市（福島県）にオープン〔昭和56年〕



▲市制施行25周年・文化都市宣言記念式典〔昭和58年〕



▲台風18号による被害〔昭和57年〕

昭和59年（1984年）		昭和58年（1983年）		昭和57年		昭和57年（1982年）		昭和56年（1981年）		昭和55年					
9月	5月	4月	3月	12月	11月	9月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	イラン・イラク戦争が始まる。1億円拾得事件。オリンピック Moskva 大会に日米中独などが不参加	
NHKが衛星テレビ放送開始	グリコ・森永事件。1万円、5000円、10000円の新札が発行される。	越谷張り子だるまが県伝統的手工芸品に指定される	西体育館が開館	千間台中学校が開校	老人福祉センター「けやき荘」が開館	大韓航空機墜落事件。三宅山噴火。東京デイズニールランドが開園	越谷総合食品地方卸売市場が開場	第2次越谷市総合振興計画基本構想が策定される	消防署大相模分署が開署	越谷ひな人形が県伝統的手工芸品に指定される	市制施行25周年・文化都市宣言記念式典が執り行われる	第1回消費生活展を開催	移動図書館しらかばと号が2台になる	第1回伝統的地場産業合同展示会を開催	
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始
						市立図書館が東越谷に開館する	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	蒲生電話局が開局	第1回市民環境賞が決定	環境管理計画が策定される	公共下水道が蒲生の一部で供用開始	大相模中学校が開校	市立図書館が東越谷に開館する	移動図書館が蒲生の一部で供用開始

昭和60年～平成6年

快適で便利な生活のため 都市基盤を整備

日本経済が安定成長に移行したところから人口の増加が落ち着きはじめ、スポーツや文化活動などの健康的で余暇を楽しむ生活が求められ、各施設の整備や各種団体の育成などの施策が進められました。昭和60年（1985）には、人口が25万人を突破しました。また、快適で便利な生活が営めるよう、道路や橋、公園、公共下水道、鉄道の高架複々線化事業など都市基盤の整備が進められました。昭和62年には、児童館「コスモス」の開館や県民健康福祉村のオープンがありました。昭和63年には、市制施行30周年を記念して「シラコバト」が市の鳥に制定されました。

平成に入ると東武鉄道伊勢崎線の連続立体交差事業が着工されました。平成3年（1991）には近隣公園として、全国初の本格的日本庭園「花田苑」が、平成5年には「こしがや能楽堂」が開館しました。平成6年には、一部高架が開通し、元荒川以南の踏切8カ所が解消されました。また、市の鳥「シラコバト」をデザインしたしらかばと橋が開通し、市のシンボルとなりました。



▲児童館コスモスが開館〔昭和62年〕



▲あだたら高原「ふれあいの森」の植樹〔昭和61年〕



▲市制施行30周年記念式典〔平成元年〕

平成2年(1990年)	平成元年(1989年)	昭和63年(1988年)	昭和62年(1987年)	昭和61年(1986年)	昭和60年(1985年)
7月 4月 3月 2月	11月 10月 8月 7月 4月 1月	11月 10月 8月 6月 5月 4月 3月 2月 1月	11月 9月 7月 6月 5月 3月	11月 10月 8月 5月 4月 1月	11月 10月 9月 7月 5月 4月 3月 1月
花田小学校が開校 インテリジェント・シティ整備基本計画が承認される	「越谷発・地球環境シンポジウム」を開催 吉越橋が開通 昭和天皇崩御、「平成」と改元。消費税が導入される(3%)。ベルリンの壁崩壊。東京証券取引所の平均株価が史上最高値(38915円)をつける	建設省から63年度インテリジェントシティの指定を受ける 市制施行30周年記念式典が執り行われる 越谷都市計画都市高速鉄道東武鉄道伊勢崎線連続立体交差事業が着工開始 越谷駅西口が開通 市長選において島村慎市郎氏が4選 初代越谷市長で名誉市民の大塚伴鹿氏の市葬が行われる 昭和天皇崩御、「平成」と改元。消費税が導入される(3%)。ベルリンの壁崩壊。東京証券取引所の平均株価が史上最高値(38915円)をつける	東武鉄道伊勢崎線連続立体交差事業が開設 小鹿野町に市民保養施設「おがの山荘」を開設 総合体育館が完成	あだたら高原「ふれあいの森」の植樹を開始 台風10号により市内に被害がでる 越谷駅前通りの電線埋設工事が始まる 新方川・綾瀬川が河川激甚災害対策特別緊急事業に採択される 定野野橋が開通 スペースシャトル「チャレンジャー号」爆発。大島三原山大噴火。チエルノブイリ原発事故。東京サミットが開催 越ヶ谷久伊豆神社周辺と宮内庁埼玉鴨場を環境保全区域に指定 児童館コスモスが開館 県民健康福祉村がオープンする せんげん台駅東口が放置自転車整理区域に指定される	地盤沈下対策事業として逆川改修が始まる アメニティタウン計画が策定される 防災行政無線市内98カ所に設置 東部清掃組合第二工場ごみ処理施設が稼働する 人口が25万人を突破 全国初のふれあい公園(借地方式)制度を開始 環境保全条例が制定される 市長選において島村慎市郎氏が3選 市立病院で世界初の卵管内受精による赤ちゃんが誕生 第1次行政改革大綱が策定される 日航機が御巣鷹山(群馬県)に墜落。つくばで国際科学技術博覧会が開催 環境保全条例が施行される 越谷郵便局の新局舎が完成 地裁家裁簡易裁判所が東越谷に移転 県立越谷総合技術高等学校が開校 キャンベルタウン市からの初の公式使節団が来市 あだたら高原「ふれあいの森」の植樹を開始



▲老人福祉センター「くすのき荘」が開館〔平成5年〕



▲日本庭園 花田苑が開園〔平成3年〕



▲一部（下り）が高架となった東武鉄道伊勢崎線〔平成5年〕



▲中央市民会館が開館〔平成4年〕

平成6年（1994年）				平成5年（1993年）				平成4年				平成4年（1992年）				平成3年（1991年）				平成2年（1990年）																	
11月	10月	9月	8月	4月	2月	10月	6月	5月	4月	3月	2月	9月	8月	7月	6月	4月	2月	12月	11月	10月	9月	8月	5月	4月	3月	10月	8月										
<p>松本サリン事件が発生。大江健三郎氏がノーベル文学賞を受賞。関西国際空港が開港</p> <p>しらかばと橋が開通</p> <p>東武鉄道伊勢崎線（上り）の一部高架が開通し、元荒川以南の踏切8カ所が解消</p>				<p>資源化センターに、不燃ごみの最終残渣ゼロを目指し、比重選別機導入</p> <p>架け替えた不動橋が開通</p> <p>市民球場がオープン</p> <p>建設省の平成6年度環境共生モデル都市（エコシティ）に指定される</p> <p>図書館に野口富士男文庫開設</p>				<p>救急救命士（1月誕生）による高規格救急車が稼働</p> <p>農水省主催の「農村環境保全機能シンポジウム」を開催</p> <p>総合福祉計画が策定される</p>				<p>千代田橋が開通</p> <p>日本文化伝承の館「こしがや能楽堂」が開館</p> <p>老人福祉センター「くすのき荘」が開館</p> <p>資源化センターに全国初のフロン回収装置を導入</p> <p>東武鉄道伊勢崎線（下り）の一部高架が開通</p> <p>市長選において島村慎市郎氏が5選</p> <p>皇太子徳仁親王、小和田雅子さんとご成婚。日本初のプロサッカー「Jリーグ」が開幕</p> <p>救急救命士（1月誕生）による高規格救急車が稼働</p> <p>農水省主催の「農村環境保全機能シンポジウム」を開催</p> <p>総合福祉計画が策定される</p>				<p>環境自治体国際会議'93こしがや開催</p> <p>エコトピア計画が策定される</p> <p>資源化センター内の不燃物処理・資源化施設稼働</p> <p>千代田橋が開通</p> <p>日本文化伝承の館「こしがや能楽堂」が開館</p> <p>老人福祉センター「くすのき荘」が開館</p> <p>資源化センターに全国初のフロン回収装置を導入</p> <p>東武鉄道伊勢崎線（下り）の一部高架が開通</p> <p>市長選において島村慎市郎氏が5選</p> <p>皇太子徳仁親王、小和田雅子さんとご成婚。日本初のプロサッカー「Jリーグ」が開幕</p> <p>救急救命士（1月誕生）による高規格救急車が稼働</p> <p>農水省主催の「農村環境保全機能シンポジウム」を開催</p> <p>総合福祉計画が策定される</p>				<p>国際景観シンポジウム'92こしがやを開催</p> <p>環境庁の地球温暖化防止のための実験都市「エコトピア2000」に指定される</p> <p>フランス・デジョン市で越谷市設計の日本庭園起工式が行われる</p>				<p>向畑橋が開通</p> <p>中央市民会館が開館</p> <p>第1回子ども環境サミットを開催</p> <p>障害者福祉センター「こぼと館」（中央市民会館内）が開館</p> <p>越谷コミュニティセンターに南部出張所が開所</p> <p>国際景観シンポジウム'92こしがやを開催</p> <p>環境庁の地球温暖化防止のための実験都市「エコトピア2000」に指定される</p> <p>フランス・デジョン市で越谷市設計の日本庭園起工式が行われる</p>				<p>新栄橋が開通</p> <p>貯水量40万トンの大吉調節池が完成</p> <p>湾岸戦争が始まる。雲仙普賢岳が約200年ぶりに噴火。ソビエト連邦が消滅し、11の共和国へ</p> <p>向畑橋が開通</p> <p>中央市民会館が開館</p> <p>第1回子ども環境サミットを開催</p> <p>障害者福祉センター「こぼと館」（中央市民会館内）が開館</p> <p>越谷コミュニティセンターに南部出張所が開所</p> <p>国際景観シンポジウム'92こしがやを開催</p> <p>環境庁の地球温暖化防止のための実験都市「エコトピア2000」に指定される</p> <p>フランス・デジョン市で越谷市設計の日本庭園起工式が行われる</p>				<p>大杉橋が開通</p> <p>第1回建築景観賞を決定</p> <p>越谷市で初の国際会議「第7回日仏アムニティ会議」を開催</p> <p>全国から約1000人が参加し、「地域づくり全国交流会議」を開催</p> <p>貯水量40万トンの大吉調節池が完成</p> <p>湾岸戦争が始まる。雲仙普賢岳が約200年ぶりに噴火。ソビエト連邦が消滅し、11の共和国へ</p> <p>向畑橋が開通</p> <p>中央市民会館が開館</p> <p>第1回子ども環境サミットを開催</p> <p>障害者福祉センター「こぼと館」（中央市民会館内）が開館</p> <p>越谷コミュニティセンターに南部出張所が開所</p> <p>国際景観シンポジウム'92こしがやを開催</p> <p>環境庁の地球温暖化防止のための実験都市「エコトピア2000」に指定される</p> <p>フランス・デジョン市で越谷市設計の日本庭園起工式が行われる</p>				<p>建設省「うるおい・緑・景観モデル事業」の指定を受ける</p> <p>第2次越谷市総合振興計画後期基本計画がスタート</p> <p>県東南部都市連絡調整会議が発足</p> <p>自治省の「地球情報ネットワーク整備構想」の指定を受ける</p> <p>台風18号により市内に被害がでる</p> <p>近隣公園として全国初の本格的日本庭園「花田苑」が開園</p>	

平成7年～平成20年

越谷らしさを前面に打ち出した
魅力的なまちづくりへ

地方分権の進展により個性的で魅力的なまちづくりが求められるようになり、人口の増加も緩やかとなり都市施設が充実し、成長するまちから成熟するまちへと変わりつつあるなかで、安心して健やかに暮らすことのできるまち、自然と共生する緑豊かなまちが求められました。

平成7年（1995）には、県立越谷西高等学校が市内で初の夏の甲子園出場の快挙を成し遂げました。平成8年には、人口が30万人を突破し、平成9年には、東武鉄道伊勢崎線が越谷駅以南で高架複々線となり、ますます利便性が高まりました。平成10年には、市制施行40周年記念式典が執り行われ、市のシンボルマークと子ども憲章が発表されました。平成11年には、福祉のまちの実現を目指して「福祉憲章」を制定しました。また、市民と行政との協働によるまちづくりを進めるため、第3次越谷市総合振興計画が平成12年に策定されました。平成16年には、彩の国まごころ国体の開催、国道4号線東埼玉道路が開通しました。平成19年には、リサイクルの拠点施設リサイクルプラザがオープンしました。

そして今、平成20年、越谷レイクタウンがまちな開きし、21世紀にふさわしい親水文化創造都市が着々と形成されています。



▲県立越谷西高等学校が甲子園に初出場〔平成7年〕



▲市制施行40周年記念式典〔平成10年〕



▲埼玉県立大学が開校〔平成11年〕

平成12年(2000年)	平成11年(1999年)	平成10年(1998年)	平成9年	平成9年(1997年)	平成8年(1996年)	平成7年(1995年)	
11月4日 第3次越谷市総合振興計画がスタート 桜井公民館（あすはる）が開館 沖縄サミットが開催。三宅島噴火で全島民避難。白川英樹氏がノーベル化学賞を受賞	12月9日 越谷市福祉憲章を制定 越谷レイクタウン特定土地地区画整理事業に着手 地域振興券が発行される。脳死移植が初めて行われる 市役所第二庁舎が完成	4月1日 河川防災ステーションを併設した新方公民館（なのはな）が開館 埼玉県立大学が開校	11月7日 蒲生交流館、南部交流館が開館 市制施行40周年記念式典が執り行われる 子ども憲章、市のシンボルマークが制定される	3月 市立病院の増改築工事が完了し481床になる 県東南部5市1町で公共施設の相互利用（公共施設の一部を同一申込み時期、同一料金で利用可能）が開始 蒲生公民館（パコム）が開館 出羽公園越谷市相撲場がオープン 獨協医科大学越谷病院内に救命救急センターが開設 障害者福祉交流センター「しんめい」が開設 農業技術センターが開設 蒲生交流館、南部交流館が開館 市制施行40周年記念式典が執り行われる 子ども憲章、市のシンボルマークが制定される	12月10日 日米が普天間飛行場沖縄県などの返還に合意。病原性大腸菌「O157」による感染被害が相次ぐ 越谷駅以南の東武鉄道伊勢崎線が高架複々線となり、新越谷駅にも準急停車保育ステーションが新越谷駅前が開設 相生陸橋が開通 市長選において板川文夫氏が当選 島村慎市郎氏が市長退任 市立病院内「おおぞら学級」が、東越	4月1日 消防署大袋分署が開署 越谷甲冑が県伝統的手工芸品に指定される 市立病院に院内学級「おおぞら学級」が開設 大沢北交流館が開館 キャンベルタウン野鳥の森で公立動物園では全国初となるクルマサカオウムの人口ふ化に成功 緑の森公園越谷市弓道場がオープン 都市防災河川等整備構想に基づく防災取水ピットとマンホールの第1号が完成 福島県二本松市と災害時における相互応援に関する協定を締結 南部図書室（越谷コミュニティセンター1内）が開設 人口が30万人を突破 日米が普天間飛行場沖縄県などの返還に合意。病原性大腸菌「O157」による感染被害が相次ぐ	10月9日 「キャンベルタウン野鳥の森」が開園 東部清掃組合第一工場発電所が本格稼働 群馬県高崎市と災害時における相互応援に関する協定を締結 阪神淡路大震災が発生。地下鉄サリン事件が発生。円相場が1ドル70円台に第2次行政改革大綱が策定される 消防署大袋分署が開署 越谷甲冑が県伝統的手工芸品に指定される 市立病院に院内学級「おおぞら学級」が開設 大沢北交流館が開館 キャンベルタウン野鳥の森で公立動物園では全国初となるクルマサカオウムの人口ふ化に成功 緑の森公園越谷市弓道場がオープン 都市防災河川等整備構想に基づく防災取水ピットとマンホールの第1号が完成 福島県二本松市と災害時における相互応援に関する協定を締結 南部図書室（越谷コミュニティセンター1内）が開設 人口が30万人を突破 日米が普天間飛行場沖縄県などの返還に合意。病原性大腸菌「O157」による感染被害が相次ぐ



▲リサイクルプラザがオープン〔平成19年〕



▲男女共同参画支援センター「ほっと越谷」がオープン〔平成13年〕



▲越谷レイクタウンオープニングフェスタ〔平成20年〕



▲彩の国まごころ国体〔平成16年〕

平成20年 (2008年)		平成19年 (2007年)		平成18年 (2006年)		平成17年 (2005年)		平成17年		平成16年 (2004年)		平成15年 (2003年)		平成14年 (2002年)		平成13年 (2001年)				
11月	8月	4月	3月	11月	10月	8月	4月	3月	11月	10月	9月	4月	3月	12月	11月	10月	7月	5月	3月	
北海道洞爺湖サミットが開催	市制施行50周年記念式典を開催	越谷レイクタウン駅が開業	市民保養施設おがの山荘を廃止	越谷市安全で安心な防犯のまちづくり条例、越谷市路上喫煙に関する条例を施行	全国高等学校総合体育大会剣道大会を開催	賞味期限改ざんや原材料偽装などが続き、「食」の安全・信頼が大きく揺らぐ。日本列島74年ぶり猛暑、熊谷市(埼玉県)・多治見市(岐阜県)で40・9度	越谷レイクタウン駅が開業	市民保養施設おがの山荘を廃止	越谷市安全で安心な防犯のまちづくり条例、越谷市路上喫煙に関する条例を施行	全国高等学校総合体育大会剣道大会を開催	賞味期限改ざんや原材料偽装などが続き、「食」の安全・信頼が大きく揺らぐ。日本列島74年ぶり猛暑、熊谷市(埼玉県)・多治見市(岐阜県)で40・9度	越谷レイクタウン駅が開業	市民保養施設おがの山荘を廃止	越谷市安全で安心な防犯のまちづくり条例、越谷市路上喫煙に関する条例を施行	全国高等学校総合体育大会剣道大会を開催	賞味期限改ざんや原材料偽装などが続き、「食」の安全・信頼が大きく揺らぐ。日本列島74年ぶり猛暑、熊谷市(埼玉県)・多治見市(岐阜県)で40・9度	越谷レイクタウン駅が開業	市民保養施設おがの山荘を廃止	越谷市安全で安心な防犯のまちづくり条例、越谷市路上喫煙に関する条例を施行	全国高等学校総合体育大会剣道大会を開催

流通を支える道路から

都市機能の中の重要な役割へ

市内を南北に貫通する日光街道は、江戸時代の五街道のひとつに数えられ、国道4号となった現在でも、市と首都を結ぶ主要な幹線道路です。越谷市もこの道路を中心に発展してきました。

昭和33年（1958）の市制施行当時の人口は4万8318人、市内に自動車はわずか939台、51人に1台しかありませんでした。市では、昭和34年に決定された街路計画により都市計画道路の整備を順次進めてきました。昭和37年には、東武鉄道と地下鉄日比谷線の相互乗り入れが始まり人口が急増、草加バイパスの建設や新しい都市計画法が施行されて、都市計画道路は度々見直しが行われました。市内にある都市計画道路は、平成20年（2008）4月末現在で81路線あり総延長112キロメートルが計画決定され、整備が進められています。

道路は、古くから人の往来や物資の流通を支えてきました。近年では、電気・ガス・水道などのライフラインを収容する空間としても重要な役割を果たしています。また、災害時には避難経路となり、救援・救急活動を支えると共に、延焼を防止するなど都市の貴重な空間となっています。



- ① 元荒川と葛西用水に架かるしらこぼと橋
- ② 大相模地区と蒲生地区を結ぶ相生陸橋
- ③ 国道4号と国道463号
- ④ 全線開通したころの国道4号草加バイパス（南荻島交差点付近）
- ⑤ 電柱が地中化された越谷レイクタウン地区内の道路



東埼玉道路開通式



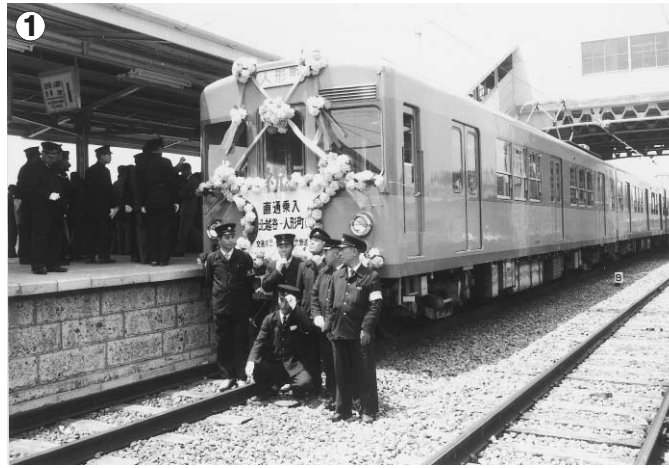
鉄道高架で市内東西の 往来がスムーズに

明治32年（1899）8月、越谷に初めて蒸気機関車が走りました。東武鉄道の北千住〜久喜間40・1キロが開通し、越ヶ谷停車場（現在の北越谷駅）が大沢町に誕生しました。その後、蒲生停車場、越ヶ谷停車場（現在の越谷駅。それまでの越ヶ谷停車場は武州大沢駅に改称）が設置されたほか、複線化、電化が進み蒸気機関車は次第に電車へと切り替えられていきました。

昭和37年（1962）に東武鉄道と地下鉄日比谷線が相互乗り入れ、昭和48年には、国鉄（現在のJR）武蔵野線が開通、昭和49年、武蔵野線南越谷駅との乗換駅として新越谷駅が開業し、通勤・通学がますます便利になりました。

鉄道は、市の発展に大きく貢献する一方で、中央を縦断することにより、まちを東西に分断するほか、踏切での交通渋滞や事故、鉄道輸送力の限界などの諸問題を抱えるようになりました。そこで、高架複々線化事業が計画されて平成元年（1989）から事業が始まりました。平成13年には、東武鉄道伊勢崎線の高架複々線が完成し、踏切が姿を消して交通渋滞は解消され、市の東西の隔たりがなくなり一体化が進みました。

平成15年には、東武鉄道伊勢崎線と地下鉄半蔵門線・東急電鉄田園都市線が相互乗り入れを開始、平成20年3月には、JR武蔵野線に越谷レイクタウン駅が開業するなど更なる発展を続けています。



- ① 地下鉄日比谷線乗り入れを祝う出発式
- ② 新越谷駅に停車する東武鉄道伊勢崎線の準急電車
- ③ 開業した南越谷駅に停車する武蔵野線の電車
- ④ 北越谷駅周辺の鉄道高架の工事
- ⑤ 鉄道高架になる前の越谷駅南側の踏み切り



越谷レイクタウン駅





- ① 台風18号(平成3年)による浸水被害
- ② 改修工事が進められていた新方川
- ③ 大吉調節池
- ④ 越谷市洪水ハザードマップ
- ⑤ 河川防災ステーションを併設した新方地区センター・公民館



浸水被害を軽減 河川・用水を整備

古くから「水郷こしがや」と呼ばれ、元荒川、大落古利根川、中川、葛西用水など多くの河川・用水が市内を流れています。肥沃な農地を潤す豊かな川の力は、時として洪水をもたらす農作物や生活に大きな被害を与えてきました。このため、河川整備事業の必要性が求められ中川水系など抜本的な治水事業が施行されました。こうした事業の進捗もよくなるにもかかわらず、急激な都市化は水田の宅地化により保水機能を低下させ、集中豪雨による浸水被害がたびたび起こるようになりました。いわゆる都市型水害といわれるものです。そこで一級河川の整備とあわせて、浸水被害の大きい箇所については排水機場やポンプ場が建設されていきました。昭和57年(1982)と昭和61年の台風の際には、2度にわたり国の河川激甚災害対策特別緊急事業に採択され、川幅の拡幅や橋の架け替えなどが進められました。平成3年(1991)には、新方川の洪水を防ぐため広さ10・3ヘクタール、貯水量40万トンの大吉調節池が完成しました。さらに、平成11年には、水防のための監視室やヘリポートを備え、水防活動の拠点となる河川防災ステーションを併設した新方地区センター・公民館が開館しました。そして、平成20年には、大相模調節池をシンボルとした親水文化創造都市「越谷レイクタウン」がまち開きました。

大相模調節池



快適で住みよい 環境づくり

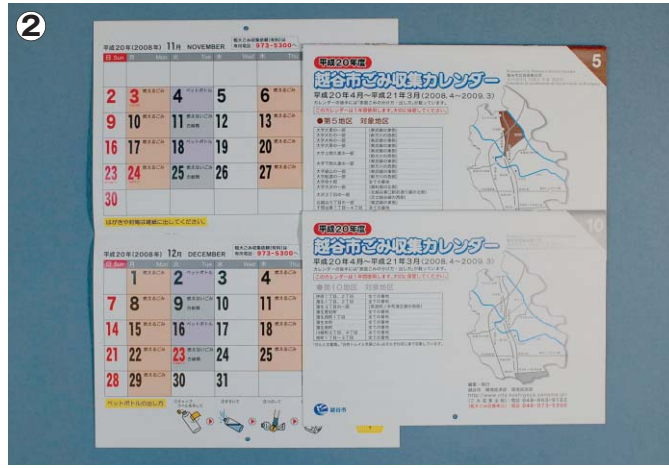
高度経済成長から安定成長に移行し、それまでの公害規制行政から、環境破壊を未然に防ぐ総合環境行政への転換を図り、昭和58年（1983）、全国に先駆け環境管理計画が策定され、昭和61年に環境保全条例が施行されました。また、地球温暖化などの新たな環境問題に対応するため、越谷市エコトピア計画や越谷地域新エネルギービジョン等が策定されました。

平成12年（2000）には、環境への負荷の少ない持続可能な循環型社会を構築するために、環境保全条例が環境条例に改正され、市民、事業者、行政の責務を定めるとともに、環境施策の基本となる事項や環境優先の基本事項が明らかにされました。

平成18年には、地球環境問題を含めた総合的な環境対策を実施するため、環境管理計画が改定され、省エネや省資源、地球温暖化の諸施策が進められています。

一方、ごみの排出量が年々増加していたため、ごみを燃料に発電機能を有する東埼玉資源環境組合第一工場を建設し、平成7年に完成・稼働しました。この工場は、1日最大800トンのごみ処理能力、1時間最大2万4000キロワットの発電能力を有しています。

また、平成18年には、かん・びん・不燃ごみ・粗大ごみを破砕・選別・再生する資源化施設「リサイクルプラザ」が稼働し、平成19年には同施設内に、ごみの減量・資源化への啓発施設を開設しました。



- ① 修繕を施しリユース展に出展される品々
- ② 越谷市ごみ収集カレンダー
- ③ リサイクルプラザ
- ④ 環境保全区域となっている宮内庁埼玉鴨場周辺
- ⑤ 逆川緑道



東埼玉資源環境組合第一工場





- ① 越谷市民まつり
- ② 出羽チューリップ
コミュニティフェスタ
- ③ まちづくりフォーラム
～自治基本条例を
私たちがつくろう～
- ④ 地区まちづくり会議
- ⑤ 民泊協会による国体の応援



市民が参加する 自立できるまちづくり

少子高齢化の進展、コミュニティ意識の希薄化といった時代背景のなか、市民の主体的なコミュニティ活動をさらに進めるため、従来から地域の特性を踏まえた活動を推進してきた自治会、婦人会、子ども会育成連絡協議会などの各種団体が構成する「越谷市コミュニティ推進協議会」が平成3年（1991）に設立されました。

その後、平成5年から順次、13地区に「地区コミュニティ推進協議会」が設立され、市民の自主的、主体的な取り組みを重視した地区からのまちづくりが展開されています。

市内13地区に設置されている地区センター・公民館を地域の皆さんと行政が協働でまちづくりを進める拠点として、「自らのまちは自らの手でつくる」という意識のもと、市民の皆さんに参加いただき、自立できるまちづくりを進めています。

さらに、協働によるまちづくりを進めるため、まちづくりの計画策定段階からわかりやすい情報の提供に努め、各種委員会などへの市民参加の機会を拡充しています。また、今後、市民と行政が協働してまちづくりを進めていくための考え方やルールを制度化し、自立した地域社会を実現するために、自治の基本原則や行政運営の原則、市民の権利・責務などを定める自治基本条例の制定に取り組んでいます。

蒲生地区センター・公民館





- ① 越谷レイクタウン地区内の大型商業施設
- ② チャレンジショップ夢空感
- ③ 農業技術センター
- ④ 地産地消の推進拠点としての役割が期待される農産物直売所(グリーン・マルシェ完成予想図)
- ⑤ 越谷の農業特産物(くわい、チューリップ、越谷ねぎ)

産業と働く人を 支援するまちづくり

古くから日光街道の宿場町として栄え、日光街道沿いに多くの商店が建ち並び、街道沿いが商業の中心地となっていました。その後、鉄道の開通により各駅周辺を中心として商業活動が活発化し商店街が形成されるとともに、昭和35年(1960)には、商工会が組織されました。現在、商業の活性化を図るため各商店街の個性・特徴を生かし、消費者ニーズの多様化に対応した商店街づくりを進めています。

工業については、昭和30年代以前の市内の主な産業は伝統工芸が中心でしたが、昭和33年ごろから47年ごろにかけて工場が進出し、工業連合会も組織され、発展してきました。

そして、今、変化する産業構造に対応するため、既存産業の高度化と社会のニーズに応える新しい産業の育成・支援、商業・業務核の形成と雇用対策、産業の振興と働く人支援のまちづくりを進めています。

「水郷こしがや」といわれるように豊かな自然に恵まれ、古くから稲作を中心に農業が営まれてきました。近年は、都市化の進行に伴い周辺に大勢の消費者を抱えているという地理的優位性を活かした都市型農業の推進を図っています。特に生産者の顔が見え、新鮮で安全・安心な地場農産物を提供する地産地消については農産物直売所を整備するなど積極的に取り組んでいます。また、農業技術センターを中心に、新たな栽培技術の研究や各種研修事業などを実施し、将来の越谷の農業を担う農業後継者の育成や支援を行っています。

こしがや産業フェスタ





- ① 小児夜間急患診療所
- ② 歯科健康フェア
- ③ 保健センター
- ④ 全国初の胃がん集団検診
- ⑤ 越ヶ谷順正会の功績をたたえた相扶共済の碑



病気を予防し、 市民の健康を守る

越谷市は、国民健康保険発祥の地として知られるとともに、昭和36年（1961）には全国初の胃がん集団検診、そして翌年には子宮がん集団検診が全国で初めて実施されるなど常に母子保健や成人病検診などの先進的な保健活動を進めてきました。

近年では保健センターを中心に関係機関と連携し、各種健診や講座、相談などを実施しています。

医療については、昭和40年代の急激な人口増加により不足する医療機関への対応として、地域の基幹病院となる市立病院を昭和51年に開院し、平成10年（1998）には増改築も完了しました。同年、獨協医科大学越谷病院内には救命救急センターが開設されました。その後、平成14年に小児夜間急患診療所が開設され、小児の急病患者に対応するため365日診療を行っています。

近年、各医療機関の医師不足が深刻化していますが、市民が安心して暮らせるよう医療施策を行っています。

市立病院





- ① 地域子育て支援センターを併設した増林保育所
- ② 保育ステーション
- ③ 児童館コスモス



- ④ 児童館ヒマワリ
- ⑤ 城ノ上小学校の学童保育室
- ⑥ 越谷市バリアフリーマップ



生きがいを持ち 安心して暮らせるまちづくり

近年、少子・高齢化が急速に進むとともに、介護保険制度の発足や障害者自立支援法の制定など、福祉を取り巻く環境が大きく変わってきています。このような中、市では、すべての人々が「生きがいをもって安心して暮らせるまちづくり」を進めるため、「越谷市地域福祉計画」などを策定し、さまざまな事業が推進されています。

高齢者福祉では、できる限り地域の中で自立した日常生活が営めるよう、老人福祉センター「けやき荘」「くすのき荘」「ゆりのき荘」を整備するとともに、シルバーカレッジなどの生きがい対策事業および食の自立支援事業などの在宅福祉サービス事業を実施してきました。また、地域包括支援センターを設置し、高齢者の総合相談、介護・予防事業、権利擁護にも努めています。

児童福祉では、平成9年（1997）、全国初となる保育ステーションを整備するなど子育てのための環境整備を積極的に行ってきました。また、子どもたちが遊びながら学習できる場として児童館「コスモス」「ヒマワリ」を開館しました。

障がい者福祉では、障がい者が地域で共に生活し、活動できる社会づくりを目指して、就労支援事業やバリアフリーマップの作成など、さまざまな施策を実施しています。

いきいき館



市民の生命と財産を守る 消防・救急・救助活動

昭和34年（1959）に市民の生命および財産を守るために設置された消防本部・消防署は、消火活動や火災予防活動を開始し、昭和37年には、救急活動も開始しました。

現在では、平成15年（2003）4月に開設した防災体験コーナーを備えた消防本庁舎をはじめ1署5分署を拠点に、消防ポンプ自動車やはしご付き消防ポンプ自動車などの配備、救急隊7隊や高度な救助器具を装備した特別救助隊を配置しました。また、119番通報のより迅速な処理を行うため、高機能消防指令装置を設置し、市民の安全・安心を確保するために消防活動にあたっています。

近年、社会環境の変化や高齢化の進展、疾病構造の変化等により、救急需要は年々増加するとともに救急業務も高度化しています。これに対処するため、救急自動車を高規格救急自動車に順次更新するとともに、救急救命士の養成に努めてきました。救命率の向上や病院前救護の充実を図るため、新たに自動体外式除細動器（AED）を市内の公共施設（144カ所・平成20年4月現在）に設置し、市民等を対象に応急手当普及講習会を積極的に開催しています。

また、火災による負傷者を減少させるために条例を改正し、設置が義務付けられた住宅用火災警報器の普及促進を図っています。



- ① 高規格救急自動車
- ② 消防本部指令室
- ③ 大型商業施設での防災訓練
- ④ 公共施設に設置された自動体外式除細動器（AED）
- ⑤ AEDを使用した普通救命講習会



消防本庁舎





- ① 市立図書館
- ② こしがや薪能
- ③ 教育センターが併設されている増林地区センター・公民館
- ④ 市内で30校目となる城ノ上小学校
- ⑤ 平成20年度全国高等学校総合体育大会剣道大会



生涯学習の推進と 子どもたちの健全な育成

公民館や図書館などの社会教育施設が整備されるとともに、社会教育事業においては主に青少年や成人を対象としたさまざまな講座、学級、各種催しなどが開催されてきました。特に公民館では、家庭教育をはじめ、青少年教育、成人教育、高齢者教育さらには、文化、スポーツ・レクリエーション活動など広範にわたる事業が実施されています。また、地域において子どもたちの健全な成長を促すため、子ども会を中心としたさまざまな事業も行われています。

学校教育では、近年の児童・生徒数の緩やかな増減により、新たな小・中学校の建設は、平成2年（1990）、花田小学校開校後、しばらくありませんでしたが、平成19年には、オープンスペース等の新しい施設設備を有した城ノ上小学校が市内30校目の小学校として誕生しました。

教育活動においては、学力の向上を図り、子どもたちが心豊かに充実した生活を送ることができるよう、学校・家庭・地域と連携・協力を強化し、公教育の理念である社会性、公共性を子どもたちに身につけさせるよう努めてきました。

平成19年には、地域に根ざした教育を推進し、幼児教育・学校教育・青少年教育など、教育の充実発展を図るため、教育センターが増林地区センター・公民館と併設しオープンしました。

市民体育祭中央大会





- ① キャンベルタウン市を訪れた青少年使節団
- ② 青少年使節団と中学生の交流
- ③ 越谷市・キャンベルタウン市姉妹都市提携20周年記念式典
- ④ キャンベルタウン市にあるコシガヤパーク
- ⑤ 越谷市民まつりでの国際交流ひろば



世界に視野を広げ、 肌で文化を感じる

市では、海外の文化・教育などに触れる機会を作る国際交流を積極的に進めるため、昭和59年(1984)4月にオーストラリアのニューサウスウェールズ州にあるキャンベルタウン市と姉妹都市提携を結びました。以来、越谷市から青少年使節団や中学生使節団などを派遣、キャンベルタウン市からもさまざまな使節団が来市しています。

姉妹都市提携の記念に、鷲高第五公園を「キャンベルタウン公園」とし、昭和61年4月に記念植樹式が行われました。また、キャンベルタウン野鳥の森には、キャンベルタウン市から寄贈されたオーストラリアの野鳥が飼育されています。姉妹都市交流のほかにも、市内の小・中学校と海外の学校の姉妹校交流も進められています。キャンベルタウン市内の学校をはじめ、アメリカ合衆国、タイ王国、中華人民共和国と姉妹校交流を行い、外国の文化を教育にも役立てています。

キャンベルタウン野鳥の森



安全・安心な市民生活を 支える防災・防犯対策

防災対策として、地震などの自然災害から市民の生命、身体および財産を守り、災害に強いまちづくりを進めるため地域防災計画に基づき、避難所・避難場所や防災備蓄倉庫、耐震性飲料用貯水槽などを整備しました。加えて、企業・団体との協定締結による物資調達体制や防災行政無線の整備、地域の自主防災組織の育成を図ってきたほか、群馬県高崎市や福島県二本松市と災害時相互応援協定を結んでいます。

また、平成11年（1999）には、台風や集中豪雨などによる洪水被害に対処するため、監視室やヘリポートを備えた水防活動の拠点施設となる河川防災ステーションを新方地区センター・公民館に併設し整備しました。

防犯については、市民が安全で安心して暮らせる防犯のまちづくりを推進するために企業・団体と安全で安心な地域社会を実現するため平成20年4月から「越谷市安全で安心な防犯のまちづくり条例」を施行しました。また、子どもたちの安全を確保するために青色回転灯を装備した車によるパトロールを実施、ホームページやメールマガジンで不審者情報を配信するなど犯罪の予防に努めています。

危機管理については、「市民の生命、身体および財産の保護」ならびに「市民の生活又は市の産業、経済の安定」を図り、安全・安心なまちづくりを進めることを目的とし、「越谷市危機管理計画」を策定し、さらに国民保護法に基づく「国民保護に関する越谷市計画」の策定をしました。



- ① 地域の自主防犯活動団体による防犯パトロール
- ② 城ノ上小学校に設置された防犯カメラ
- ③ 地区合同総合防災訓練
- ④ 高崎市から総合防災訓練に駆けつけた応援物資輸送車
- ⑤ 青色回転灯を装備した防犯パトロール車



河川防災ステーションのヘリポート



第4章 越谷の 観光案内



16 県営しらこぼと水上公園



11 日本庭園 花田苑



6 蒲生の一里塚



17 キャンベルタウン野鳥の森



12 保存民家大間野町旧中村家住宅



7 しらこぼと橋



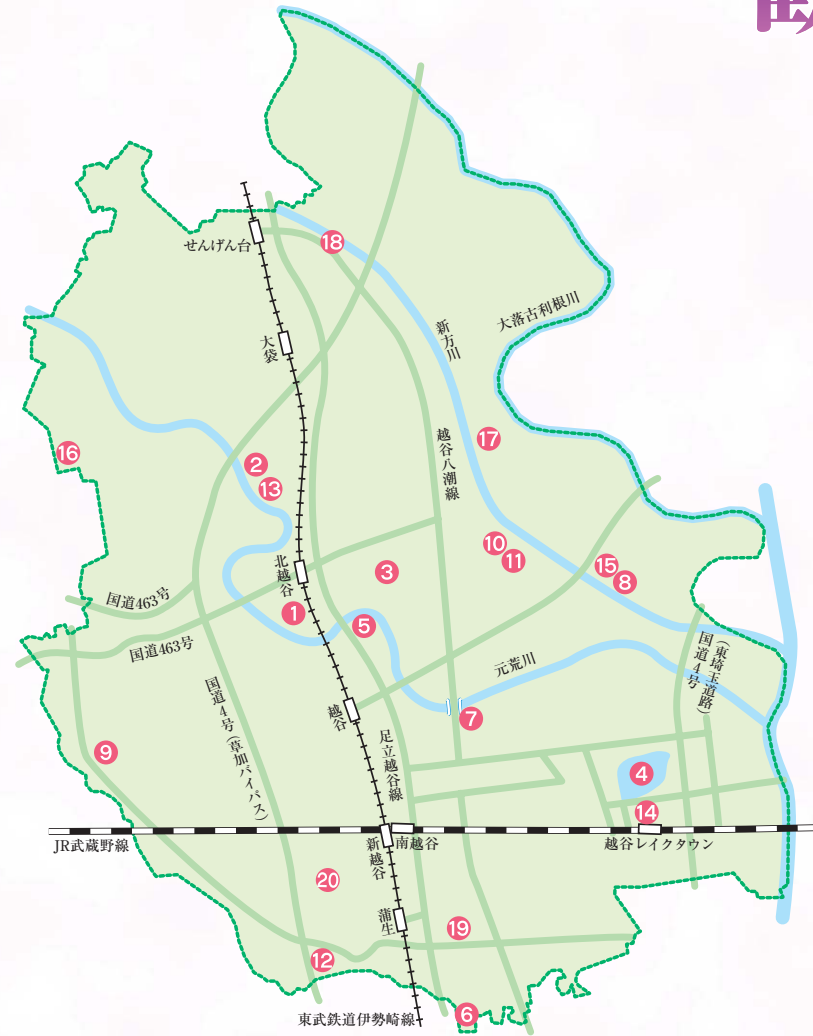
18 児童館コスモス



13 宮内庁埼玉鴨場



8 東埼玉資源環境組合展望台



1 元荒川の桜堤



19 児童館ヒマワリ



14 見田方遺跡公園



9 県民健康福祉村



2 越谷梅林公園



20 科学技術体験センター「ミラクル」



15 市民球場



10 日本文化伝承の館 こしがや能楽堂



5 建長元年板碑



4 大相模調節池



3 久伊豆神社



越谷花火大会

場所●市役所わき 葛西用水

夏の風物詩としてすっかり定着した花火大会、息つく暇なく打ち上げられる5,000発の花火は迫力満点で越谷の夜空を彩ります。会場周辺には、多くの見物客が訪れ、色鮮やかな花火に酔いしれます。



下間久里の獅子舞

場所●香取神社（下間久里）

下間久里の獅子舞は、文禄3年（1594）に京都から伝わったとされ、昭和54年に県の無形民俗文化財に指定されました。毎年7月15日に行われ、獅子舞が奉納された後、家内安全、五穀豊稔を祈願し、夜遅くまで町内の家々を回ります。



葛西用水のハナショウブ

場所●市役所わき 葛西用水

平和橋を中心に葛西用水中土手には、濃紫や薄紫、白、ほかしなど色や形がさまざまなハナショウブが咲いています。中央市民会館前の噴水などの水辺空間と一体となり“水郷こしがや”の景観に彩りを添えます。



梅林公園の梅

場所●越谷梅林公園（大林）

約20,000平方メートルの敷地には、白加賀、梅郷、紅梅、晚白加賀（おくしろかが）などの梅が、約250本植えられ、このほかに梅の見本園として34種類67本の梅の木が可憐な花をつけます。豊かな梅の香りに誘われて、多くの人でにぎわいます。



元荒川の桜堤

場所●北越谷第五公園から東武鉄道の鉄橋までの遊歩道

梅のシーズンが終わりを告げると、いよいよ桜の開花宣言です。北越谷の元荒川堤の桜並木は、北越谷第五公園から東武鉄道の鉄橋までの2キロメートルにわたって約350本のソメイヨシノが開花し、桜並木には提灯が飾り付けられ明かりがともされます。

夏

県営しらこぼと水上公園

所在地●小曾川729-1

県営しらこぼと水上公園には、流水プール、スライダープール、もぐりプール、幼児プールなど、子どもから大人まで楽しめるプールがたくさんあり、多くの家族連れなどでにぎわいます。



出羽チューリップコミュニティフェスタ

場所●出羽公園（七左町）

出羽地区内の小・中学校や自治会などで育てたチューリップを公園内に飾るほか、水耕栽培で育てたチューリップも公園の池に浮かべます。

春



北川崎の虫追い

場所●川崎神社（北川崎）

虫追いは、川崎神社で毎年7月24日に行われる、江戸時代から続いている農村行事です。平成20年に県の無形民俗文化財に指定されました。たいまつに火を灯し、あぜ道を行進しながら害虫を追い払い、豊作を祈願するものです。



葛西用水のアジサイ

場所●市役所わき 葛西用水

葛西親水緑道の中央市民会館からしらこぼと橋の区間に、ニホンアジサイや西洋アジサイなど約900株余りが植えられています。6月下旬まで色とりどりのアジサイが通る人の目を和ませています。



南越谷阿波踊り

場所●南越谷駅・新越谷駅周辺

毎年8月下旬に、「南越谷阿波踊り」が開催され、南越谷駅・新越谷駅周辺は阿波踊り一色となります。踊り手たちは日ごろの練習成果を観衆に披露、力強い男踊りやでやかな女踊りで魅了します。



葛西用水のチューリップ

場所●市役所わき 葛西用水

葛西用水のチューリップが春の風物詩として、中土手沿い約500メートルにわたり、赤や黄色など色も鮮やかに咲き誇ります。また、越谷のチューリップの切り花は県内生産量第2位の花き園芸となっています。



久伊豆神社のフジ

場所●久伊豆神社（越ヶ谷）

久伊豆神社の境内にあるフジは、樹齢200余年で、株回りが7.3メートルあり地際から7本に分かれていて、埼玉県天然記念物に指定されています。毎年4月下旬には、藤まつりが行われ、たくさんの人が訪れています。



こしがや産業フェスタ

場所●総合体育館周辺（増林）

越谷市の産業の発展のため、商工業者と農業者が一堂に会したイベントで、越谷産農産物や市内に伝わる伝統的手工芸品の展示・即売のほか近隣市町に事業所を置く製造業や建設業者による製品の展示や情報交換などが行われます。



元旦マラソン

場所●市役所周辺

年が明けると、新年のスタートを告げる最大のイベント「元旦マラソン大会」が市役所周辺で開催されます。毎年多くの人に参加し、心地よい汗を流します。



越ヶ谷秋まつり

場所●越ヶ谷、中町、越ヶ谷本町の旧日光街道周辺

江戸時代中期から伝わる豊年を祝うまつりでおおむね3年に1度行われます。古い伝統と格式があり、江戸時代の名残をそのまま伝える歴史絵巻を見るようです。まつりは久伊豆神社（越ヶ谷）から神様がお出ましになる神輿渡御で始まり、到着した神輿は、各町内の山車8台に迎えられ町内を巡行します。



花田苑の紅葉

場所●日本庭園 花田苑（花田）

花田苑は、面積2.1ヘクタール。中央には約4,000平方メートルの大きな池があり、周囲にせせらぎがある日本庭園です。正門には、市内宇田家の長屋門が復元されているほか、庭園内には茶室もあります。

冬

越谷市成人式

場所●市内11会場

正月が終わると、市内各地区ごとに成人式が行われます。各会場では、さまざまな催しが行われ、新成人たちは同級生や恩師たちと楽しいひとときを過ごします。



越谷市民まつり

場所●市役所周辺

毎年秋に開かれる越谷市民まつりは「安全・調和・明るい街づくり」を基調に、華やかなオープニング・パレードから始まり、盛りだくさんのアトラクション、模擬店などが数多く出店され、ふるさと恒例のイベントとしてすっかり定着し、20万人に及ぶ人出でにぎわいます。

秋



旧中村家住宅の雪景色

場所●保存民家大間野町旧中村家住宅

大間野町旧中村家住宅は江戸時代に旧大間野村（現在の大間野町周辺）の名主を勤めた中村氏の旧宅で、平成9年に越谷市が寄贈を受け、建築当初の姿に復元したものです。敷地内には主屋、長屋門、石蔵、土蔵があり、各建物には昔の生活用具や中村家に関する貴重な古文書などを展示しています。



オビシヤ

場所●川崎神社（北川崎）

その年の豊作を祈る農村行事で、古くは「歩射（ぶしや）」と言われていました。鶴亀と松竹梅が描かれた的を目標けて、弓で矢を射り、その年の豊凶を占うもので川崎神社で行われます。うまく的に命中するたびに大きな歓声があがります。



コスモスフェスタ

場所●新方地区センター・公民館周辺（大吉）

市内大吉の休耕田および新方地区センター・公民館周辺で開催されるコスモスフェスタは、秋風に揺れるピンクや白などのコスモスの摘み取りが行われ、たくさんの人が訪れています。



菊花大会

場所●第1体育館（大沢）

市の花でもある菊。昭和初期から始まった市内の菊の栽培は有名で、それだけに毎年開かれる菊花大会には、華麗で格調高い作品が一同に集まります。愛好家が愛情を込めて育て上げた300鉢以上の菊が優雅な香りを漂わせています。



大聖寺の山門

所在地●大聖寺
相模町6-442

大相模不動尊は天平勝宝2年(750)の創建と伝えられ、本尊は不動明王である。中世には岩槻太田氏の祈願寺として、また、江戸時代には関東三大不動の一つに数えられ、七堂伽藍を備える大寺として興隆をみた。現在の仁王門(山門)は文化元年(1804)のものである。



廿一仏 板石塔婆

所在地●慈光庵境内
増森1775

板石塔婆のうち種子(梵字)二十一仏を刻んだ板碑は、申待供養という民間信仰と習合した神仏混同の所産物で、全国で39基が確認され、市内では9基が確認されている。増森にある慈光庵(薬師堂)の廿一仏板碑は天正3年(1575)8月銘の申待供養塔、縦153cm、横46cmの完形である。



浦生の一里塚

所在地●藤助河岸そば
浦生愛宕町876

江戸時代の各道中に、旅人の行程の目安として一里(約4km)毎に塚が築かれ、エノキが植えられていた。この塚は日光街道の浦生の南端旧出羽堀の東にあり高さ2m、東西5.7m、南北7.8mの長方形で塚の東および南辺には石垣が施されている。現在では、県内の日光街道に残る唯一の一里塚である。



野島浄山寺の大鰐口

所在地●浄山寺
野島32

鰐口とは、社殿・仏堂前の軒下につるす金属製の祈祷用の鳴物具。天保12年(1841)に奉納された銅製で、直径6尺(176cm)厚さ2尺(60cm)、重量200貫(750kg)という全国でもまれな大きさである。当時浄山寺では、多くの人々の信仰を集めていたことが奉納者銘から知ることができる。



香取神社の彫刻

所在地●香取神社
大沢3-13-38

大沢香取神社の奥殿の板壁に、さまざまな彫刻が施されている。彫刻師は浅草山谷町の長谷川竹次郎で板壁の北面には紺屋の労働作業の図柄が彫刻されている。江戸時代、越ヶ谷・大沢は紺屋の盛んな所で、当時を知る貴重な民俗資料である。



烏文斎栄之筆「瓦曾根溜井図」

所蔵●市立図書館
東越谷4-9-1

旗本細田家の嫡子で宝暦6年(1756)の生まれ。鳥居清長や喜多川歌麿に師事し、細田流として一派を興した。栄之は美人画を得意とし、文化人との交流を深めていた。瓦曾根村の世襲名主中村家を訪れたとき描いたのが「瓦曾根溜井図」であったとみられる。

史跡



見田方遺跡

所在地●越谷レイクタウン駅北側
大成町3・5・6丁目、東町4丁目

昭和42年(1967)、見田方耕地(現在の大成町)で発掘調査が行われ、竪穴式住居跡が確認され、数多くの土器や祭器が出土した。出土品などから、この遺跡が古墳時代後期(6~7世紀)の遺構であることがわかり、かつて古代人が竪穴住居に住み、生活していたことが推察される。



林泉寺 駒止のマキ

所在地●林泉寺
増林3818

山門から本堂に至る参道の右側にあり、徳川家康が当地へ鷹狩りに来たとき、このマキに馬をつないだといわれている。推定樹齢は400年後後といわれ、その枝ぶりはまれに見る美しい樹形をなしている。



建長元年板碑

所在地●元荒川橋そば
御殿町3-36

この板碑は建長元年(1249)銘のもので、市内では最古で最大のものであり、弥陀一尊の一仏板碑、高さ155cm、幅56cmでその彫刻は深く雄大で鎌倉期の初発期板碑の特徴がでている。



越ヶ谷順正会 関連資料(順正会旗)

所蔵●市立図書館
東越谷4-9-1

越ヶ谷順正会は、昭和10年(1935)に疾病者救済を目的とした保険制度の組織として「順正会」の名で発足し翌年には「越ヶ谷順正会」となる。法施行前より「相扶共済」の精神で独自の組織を成立させていたことで国民健康保険制度発祥の地と称されている。



呑龍上人 供養墓石

所在地●林西寺
平方249

呑龍上人は、弘治2年(1556)一ノ割村生まれ。14歳のとき平方林西寺に入寺し僧となり、のちに増上寺で修業に励んだ。生来情深く、貧家の幼児を多数養育したことから「子育て呑龍」と称された。

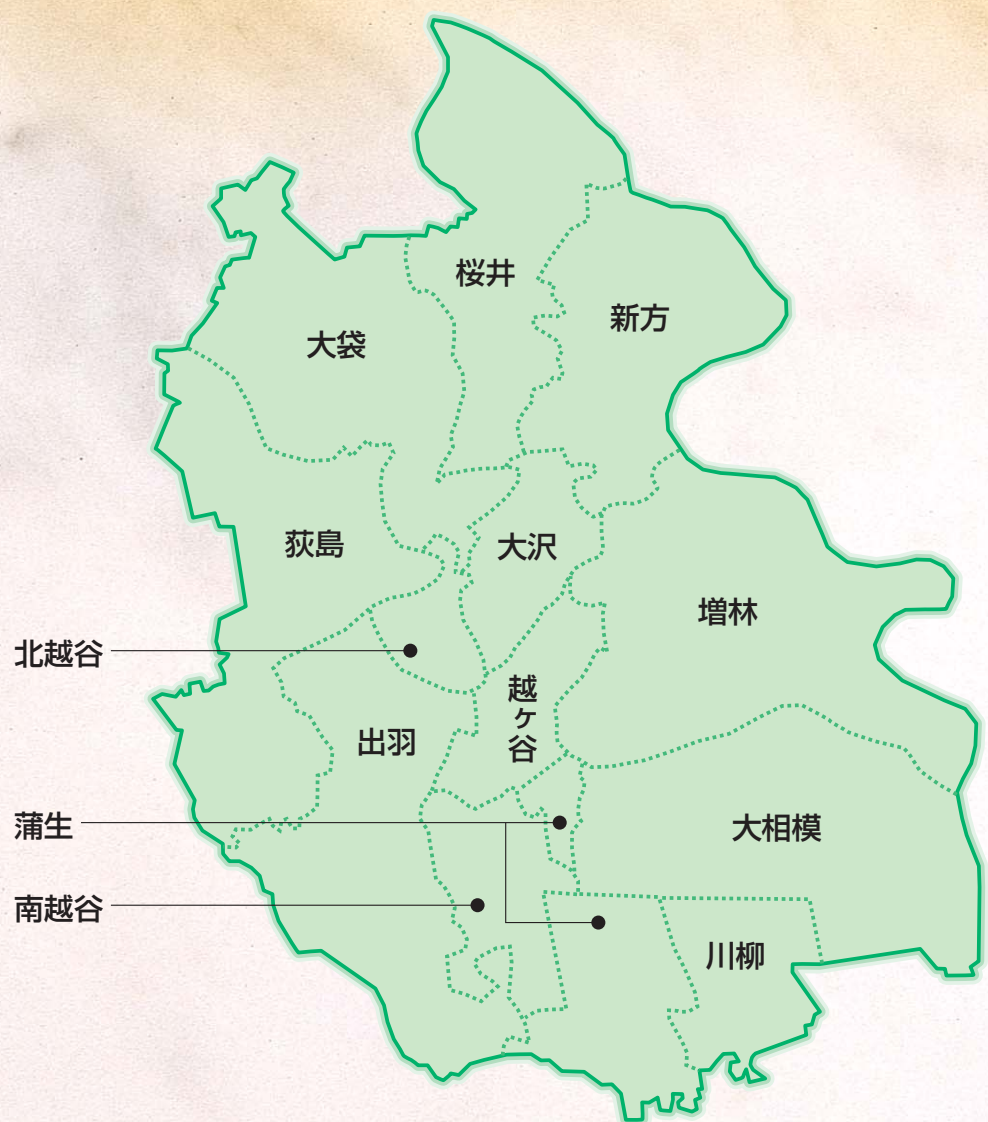


平田篤胤 奉納大絵馬

所蔵●久伊豆神社
越ヶ谷1700

平田篤胤は、江戸時代後期の国学者でしばしば越ヶ谷宿を訪れていた。この間篤胤は久伊豆神社に「天之岩戸開」の大絵馬を奉納。これには文政3年(1820)7月9日、画工山里貞由、平田篤胤(花押)の銘がのせられている。

越谷の地名



わたしたちが住んでいる土地の名前には、いろいろな意味や由来があります。人々がこの地に住み着いたとき、その場所の自然の様子やその自然環境によって名前を付けられたところが数多くあります。

また、古い時代、条里制といって田畑や住まいの区画整理が行われましたが、この条里にちなんで名付けられたといわれる所もあります。越谷には、四町野（現在の宮本町）・二町野（増林）・四町野（現在の東町）・大里などの地名がありますが、これらは、はたして条里にちなんだ地名かどうか確かでないものの、条里の遺名（なごり）ではないかともいわれています。

このほか増林のなかに「定使野（じょうつかいの）」という所がありますが、これは土豪などの使用人である定使が住んでいた所、神明下（さといけ）にある「在家」という地名はそこに人家があった所、また、西新井に「堀の内」という所がありますが、これは堀を巡らせた土豪の屋敷内であった所、大相模の「西方」「東方」は大相模郷のうち西の方、東の方という意味でしょう。また、新田を開発した人の名前をとって名付けられた所もあります。七左衛門村や弥十郎村などがそれです。

越ヶ谷地区

〈越ヶ谷郷〉

江戸時代以前は、現在の出羽地区や萩島地区（袋山を含む）、それに越ヶ谷・瓦曾根・花田・さいたま市岩槻区釣上などの広い地域を「越ヶ谷郷」と呼んでいました。この越ヶ谷の地名に関しては、関東の武士団である千葉氏の系図のなかに、今からおよそ九〇〇年ぐらい前の人とみられる「古志賀谷」という人物の名が載せられています。当時の人は、そこに住んでいた土地の名を苗字としていたので、越ヶ谷は古くからの地名であったことがわかります。

その後、徳川家康が関東に入国し、やがて天下をとると、中山道や東海道など、江戸を中心とした街道を整備し、人馬の中継ぎ所である宿場を取り立てました。

このとき、瓦曾根から四町野にまでました。家康は、この越ヶ谷御殿を大層好み、一年に三度も越ヶ谷を訪れたこともありました。

また、耕地にもそれぞれ名前が付けられています。越ヶ谷のなかには、一番・二番・三番という番号が付けられた耕地があります。これは検地（江戸時代の土地の丈量調べ）のとき、はじめに検査した順から一番、二番と付けられたといえます。

このほか堀の名では、赤山街道（県道越谷鳩ヶ谷線）を鳩ヶ谷に向かつてゆく途中に出羽堀という堀があります。この堀はその昔、会田出羽が、出羽地区の湿地を干拓するために掘り割ったので、出羽の名をとって付けられたといわれています。

*このほか越ヶ谷地区には、弥生町や柳町、宮前などの地名がありますが、これらは新しい町名です。

かけての道中筋（日光街道）に新たな家並がつくられ、宿場が設けられました。四町野や瓦曾根などから、新たに独立した町がここにつくられたわけです。そしてここが越ヶ谷郷の中心であるとして、この地の名を郷名である越ヶ谷の名をとって、特に越ヶ谷町と名付けました。

ところで「コシガヤ」の地名はいろいろ言われていますが、「コシ」とは腰とも書かれ、山や丘などのふもとを指し、「ヤ」とは湿地などの低い土地をさすそうです。すると越ヶ谷の「コシ」の上にあたる場所は、赤山の百観音や野田のさぎ山のある武蔵野台地（赤土の高い土地）にあたります。そして「ヤ」とはその台地のふもと「コシ」にあたる低い土地ということになります。こうして台地のふもとにあたる低い地域が「コシガヤ」と呼ばれたと考えられます。

大沢地区

〈大沢町〉

大沢は、元荒川（荒川）の東方にあたり、古くは下総国下河辺庄新方庄（郷）の中に含まれていました。その後、新方庄は武蔵国に編入されたので新武蔵とも呼ばれました。一説には長祿年間（二四五七〜六〇）、太田道灌が岩槻を支配したころ武蔵国に編入したともいわれています。江戸時代は、武蔵国埼玉郡新方領の中にありました。そして慶長七年（一六〇二）、宿駅制度が整備されたとき、街道筋を中心として、ここに宿場町がつくられました。はじめは越ヶ谷宿の助け合い宿でしたが、後には大沢町の行政組織のうち、交通業務は越ヶ谷町と合体したので、大沢町を含めて越ヶ谷宿と呼ばれました。それで普段は、越ヶ谷宿のうち大沢町、越ヶ谷宿



大正時代の越ヶ谷町

〈越ヶ谷町〉

越ヶ谷町は、江戸時代から独立した町でしたが、明治二十二年（一八八九）に大沢町と組合町をつくりました。その後、さまざまな理由から明治三十五年（一九〇二）に分離し、再び越ヶ谷町と大沢町に分かれました。そして昭和二十九年（一九五四）、越ヶ谷町・大沢町をはじめ二町八カ村が合併し、越ヶ谷の「ヶ」をとって

のうち越ヶ谷町と使い分けられました。

その後、明治時代になり、宿駅制度がなくなり、両町は完全に分離しましたが、明治二十二年（一八八九）の町村合併のとき、大沢町は越ヶ谷町と組合町をつくりました。しかし、明治三十五年（一九〇二）に再び分離し、昭和二十九年（一九五四）、越ヶ谷町をはじめ八カ村と合併し越ヶ谷町を構成しました。



昭和30年代の大沢町

越ヶ谷町と名付けました。現在もこの越ヶ谷町は、越ヶ谷地区と呼ばれています。

さて、越ヶ谷町は奥州街道（日光街道）の宿場として新たに誕生した町です。はじめ町内は本町と新町とに分けられましたが、この間に越ヶ谷郷のもの土豪（在地の武士）会田出羽が所有した土地があったので、そこを特に中町と名付け、三町に区分されたといわれます。このほか越ヶ谷には袋町・観音横町・御殿・新道などと名付けられた所がありました。

今でも御殿という地名が残されていますが、それは徳川家康が、今からおよそ四〇〇年前の慶長九年（一六〇四）に、將軍家の別荘である越ヶ谷御殿を建てた所だからです。もともと、この地域は、越ヶ谷郷の土豪会田出羽家の屋敷地の一部であった所です。

なお、関東に入国した家康は、鷹狩りのとき、しばしば会田出羽の屋敷に立ち寄っていました。この屋敷地を大変気に入り、元荒川べりの地を譲り受けて御殿を建

〈大沢の地名〉

大沢という地名は、もともとこの辺りが一面の沼沢地（湿った土地）で、大小七カ所の池や沼があったので、大きな沢、つまり大沢と呼ばれたといえます。町の中は上宿・中宿・下宿と区別されましたが、この上・中・下は江戸を中心としたものでなく、日光からみて上中下としたといわれます。

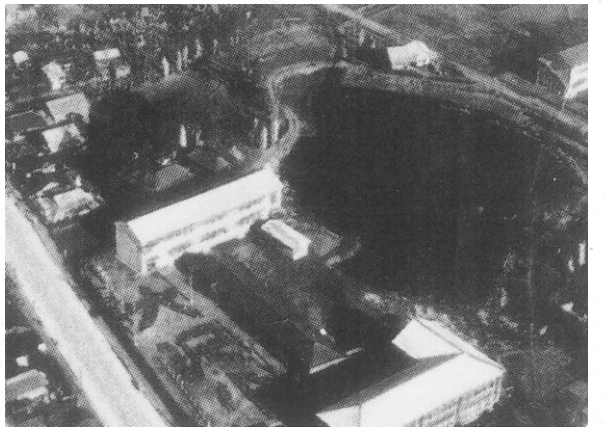
また、大沢には鷺後・高畑・鷺越などという所があります。このうち鷺後は、鷺後用水路（逆川）に沿った林の茂る古い集落で、鷺が群れをなして集まったことから、はじめ鷺代と呼ばれましたが、のち鷺後と書かれるようになったといえます。

現在の大沢の鎮守である香取神社は、大沢の元村である鷺後に祭られていた香取神社を移したものとされています。

また、耕地名には新田耕地・外河原耕地・皿沼耕地など数多くの

耕地名がありました。このうち飯御免耕地という所があります。それは、ここでとれた米を大沢の香取神社にお供えたので、はじめ「飯御免耕地」と呼びましたが、御供をはずして飯御免と呼んだといひます。

その昔、大沢には十二の池があったそうです。このうち五つの池が元禄年間(一六八八〜一七〇四)に埋め立てられて新田となり、それからは大沢の七つ池と呼ばれました。この池は内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・嘉右衛門池・観音坊池・しじめ池の七つです。このうち、内池は大沢町の名主(現在の市町村長)江沢家の屋敷内にあり、外池はその外側にあったことから、名付けられたものといわれています。これらの池は、現在ではすべて埋め立てられてありません。



日光街道沿いに建っていたころの大沢小学校と内池

桜井地区

〈新方庄〉

桜井地区は、明治二十二年(一八八九)に平方・大泊・上間久里・下間久里・大里の五カ村が合併してできた旧村で、現在では桜井地区と呼ばれています。合併のとき桜井村と名付けられたのは、

に沿って設けられた港という意味があるといわれますので、ここはもとの利根川にそった、港の一つであったとも考えられます。



安国寺の円空仏

帝神社などがあります。この平方の南端、会野川の川跡を境に、その隣は大泊の地となります。大泊の地名は、浄土宗安国寺の寺伝によると、紀伊国(現在の三重県)熊野大泊村の安国寺の住職であった、誠誓専故という僧が、今からおよそ六五〇年前の康安元年(一三六一)に、この地を通りかかり、安国寺を再建して住職になり、そして、この僧の故郷である大泊の地名を、この地の地名にしたと伝えられています。

なお、安国寺は足利尊氏が、貞和元年(一三四五)のころ、全国六十六カ国に国家の祈願寺である安国寺を指定しましたが、大泊の安国寺がその一つであったとも伝えられています。このほか安国寺は、蓮生坊と称した、熊谷直実の草庵であったともいわれますが、詳しいことは不明です。

また、大泊の地名については、一説によると、当地域はもとの利根川の一流路であった会野川に面している所であり、泊とは、川や海

〈間久里と大里〉

間久里は、江戸時代から上と下の二村に分けられました。もとは一つの村であったといひます。間久里の地名は人家のある里まで遠い所とか条里制の遺名ともみられています。また、間久里を蒔里と書いて、一説には農作業などを共同で行う所、つまり

昔この地域は下河辺庄桜井郷と呼ばれていたころがあったからだといわれています。また、桜井地区は増林地区や新方地区、大袋地区、それに春日部市武里地区や豊春地区、さいたま市岩槻区川通り地区などを含めて、その昔新方庄(郷とも)と呼ばれていました。これらの地は、粕壁から西方に曲流した古隅田川(古いころの利根川主流)を境に、その下方は元荒川と古利根川に挟まれた広い地域です。ここはもともと下総国に属していましたが、今から五二〇年ほど前、太田道灌が岩槻を支配していたころ武蔵国に編入されたので新しい方、つまり新方という地名が付けられたという説があります。しかし、新方の地名は、今からおよそ六七〇年以前から金沢称名寺の記録などに出てきますので、おそらく新しい干潟、新しい陸地、つまり新潟ということから名付けられたとみられます。

「ユイ」から起こった地名ともいわれています。このほか間久里はまこもの生い茂った里(村)、つまり「まこ里」といわれたのが「まくり」になったとも考えられています。

ここはもと、大袋地区の大竹辺りから曲流した元荒川が間久里・大里を通って大林に流れていました。そして、この川に沿って日光街道がつくられたので、旧道を中心に集落をつくっていた上間久里の人々のなかには、日光街道沿いに住居を移し、旅人を相手としたお茶屋を開きました。はじめ八軒のお茶屋が店を開いていたので、八軒茶屋と呼びました。この八軒のお茶屋のうち三軒が、元荒川からとれたうなぎの料理を食べさせましたが、このうなぎは、たいへんおいしく「間久里のうなぎ」と呼ばれ評判になっていきました。

なお、上間久里は、越ヶ谷宿と粕壁宿の中ほどの地にあたり、旅人が一休みするのに都合がよいように茶店が設けられました。このような所を「立場」といひます。

平方と大泊

平方は、市内で最も東北端に位置しています。その形はちょうど地図の上では三角形の形になっています。すなわち東の方が古利根川、西の方は平方の林西寺辺りを頂点として、会野川と呼ばれた古いころの河道が山の形に南へ下がって古利根川へ、三角の形で続いています。この会野川という名は、二つの流れが合わさっていることから名付けられたともいひます。

そして、この川によって区切られた三角形の地は、川によって運ばれてきた土砂によって陸化が進んだ所で、もとは一面の平らな畑地でした。平方という地名は、比較的高い平らな土地ということから名付けられたようです。この平方には子育て呑龍として有名な高僧、呑龍上人が住職を勤めていた浄土宗の林西寺、平方の鎮守である浅間神社、古い歴史をもった女

なお、下間久里の香取神社では埼玉県指定の無形民俗文化財である獅子舞が行われていますが、これは古くからのしきたり通行にわれているものとして有名です。また、大里の名は、大きな里(村)といわれ、間久里と同じく条里制の遺名ともみられています。が、詳しいことは不明です。

新方地区

〈新方村と船渡 大松・大杉〉

この旧村は新方地区といえます。

この新方地区のうち船渡は、古利根川に沿った地で、古くから船の渡し場があったことから名付けられた地名とみられています。このほか上川原・下川原など川にちなんだ耕地名もみられます。

また、大松の地名は、松の木が茂っていたことから名付けられたとみられています。ここには古いころ、六カ村を領有していたといわれる、六カ村栄広山清浄院という浄土宗の古い寺院があります。ここは古利根川に沿った自然堤防の発達した所で、境内には開山塚をはじめ、新方庄を支配していたといわれる新方氏の言い伝えなどが残されていて、伝説の多い寺院です。

大杉は、杉の木が茂っていたことから名付けられたようですが、詳しいことは不明です。

たい字といわれますのでこれを林の上に付けたものでしょう。「増」を「マス」と呼ぶこともありましたが、江戸時代の道しるべには「ましばやし」とありますので「マシ」が正しいようです。

さて、大字（江戸時代からの村）にあたる増林は、古利根川と元荒川に渡る広い地域で、西川・荒川・土手岸など数多くの小字があります。このうち西川や荒川は元荒川沿いの地の小字です。このほか定使野や城ノ上の小字があります。定使野は、古い時代、土豪などに仕える使用人が住んでいた所、あるいは、それら使用人の食料をとる耕地を指したようです。また、城ノ上は、昔、徳川家康の御殿がもとは増林の地に設けられていたことから名付けられたものでしょう。一説によるとこの御殿が在った所は、林泉寺という寺院の辺りといわれています。当時地元の人々はこの御殿を「お城」と呼び、この辺り一帯を城のある所、つまり城ノ上と呼んだとも考えられます。現在、千間堀（新方川）



清浄院の開山塚

〈弥十郎・向畑 北川崎・大吉〉

弥十郎は、江戸時代のはじめ大房村の住民であった弥十郎が新田として開発した地なので、弥十郎と名付けられました。はじめは、沼谷新田とも呼ばれたようですが、もともと沼沢地であっただけに、表沼・裏沼など沼にちなんだ名が多くみられます。

向畑は、もともと大吉・川崎・

のほとりに、城ノ上の名が残されています。

また、増林と花田の境にあたる、千間堀に架けられた橋を鷹匠橋と呼んでいます。江戸時代、越谷地域はお鷹場でした。この鷹場を取り締まる役人のうち、野廻りという役人がいました。この一人に増林村の榎本氏が任じられていました。そして、鷹匠が越ヶ谷宿から榎本家へ用事で行くとき、その道筋にあたる千間堀に橋がかけられました。それでこの橋を鷹匠橋と呼んだようです。

また、花田は、もともと越ヶ谷と地続きで武蔵国埼玉郡に属しましたが、今からおよそ三七〇年前の寛永年間（一六二四〜四三）、天嶽寺前に新川が掘られたため、越ヶ谷の天嶽寺や久伊豆神社とともに、元荒川の対岸になったのです。花田という地名は、荒川（元荒川）が天狗の鼻のように曲流して小林に流れていたこともあり天狗の鼻の形をした耕地、すなわち鼻田と付けられたといわれています。それがいつしか花田と書かれ

大杉・大松・船渡の五カ村が、それぞれこの地を所有していたことから向かいの畑、つまり向畑と呼ばれたといえます。これが向畑村として独立したのは元禄年間（一六八八〜一七〇三）といいますが、大松の清浄院に伝わる寛永四年（一六二七）の寺領検地帳には、向畑村と記されていますので古くからの村であったのは確かです。ここには向畑の陣屋といって、もともと新方庄の支配者であった新方氏の館があった所と伝えられています。今は陣屋の跡であった山は崩されて畑地になっていきますので、陣屋の面影はみられません。

北川崎は、もともと川崎村といいましたが、明治十二年（一八七九）、郡制がしかれたとき、同じ郡内に同じ村名の村があるのは紛らわしいとの理由から、その村名の頭に北や南が付けられたので、とと川崎は、川や海に突き出たところをいうようですが、越谷の川崎は古利根川の屈曲したところから名付けられたようです。

るようになったといえます。また一説には、越ヶ谷の鼻の先にあたる地から鼻田と名付けられたともいわれます。

〈増森・中島・東小林〉

増森の「モリ」は、神社を指したといわれ「マシ」はめでたい字といわれますので、この地に神を祭ったときに増森と名付けられたとみられます。ここは、もともと古利根川が、増森から中島にかけて、大きく曲流していました。その対岸は吉川市の榎戸という地です。ところが大正十二年（一九二三）、増森から榎戸を分断して新川が掘られました。そのあとは古川になり、今ではこの古川も埋立てられ、榎戸と増森は地続きになっています。

ここも古利根川と元荒川に挟まれた地ですが、古利根川の方を本田、千間堀から元荒川にかけての地を新田と呼んでいます。それでこの千間堀から元荒川にかけての

大吉は、大芦とも書かれ、芦の茂った地から付けられた名のようなです。なお、新方地区の西方を流れる川は現在では新方川と称されていますが、もとは千間堀と呼ばれていました。堀の長さが千間あったことから名付けられたものではなく、長い堀を千という数で表現したようです。

増林地区

〈増林村と増林・花田〉

増林村は、明治二十二年（一八八九）、増森・中島・東小林・花田・増林の五カ村が合併してできた旧村で、現在は増林地区と呼ばれています。この新しい村名は合併した村のうち増林が一番大きな村で、しかも中心的な村であったことから増林村と名付けられました。この増林の地名は林が多い地から名付けられたとみられます。増林の増は「マシ」といい、めで

地は新しく開発された所であることがわかります。増森の小字には、外河原・内河原・荒川堤外など川にちなんだ名が多くみられます。また、三町野・鳥垣・立野などの小字もあります。このうち三町野は条里制の遺名ともみられていますが、三町歩ほどの耕地から名付けられたともいわれています。

中島の地名は、中島の「シマ」が耕地を指すので、川と川に挟まれた中の耕地とも解されます。ここは、その多くが砂地でほとんどが畑地です。このほか籠場という所があります。ここは古利根川と元荒川が合わさった所の河原です。その昔、徳川家康が増林の御殿から江戸に帰るとき、ここから駕籠に乗って川を渡ったというところで、籠場と名付けられたとも伝えられています。

東小林（現在の東越谷）は明治十二年（一八七九）の郡制のとき、頭に東の字が付けられたものです。それまでは小林村といいました。小林の地名は、林があった地から名付けられたようです。この

古川に沿った地は自然堤防が著しく発達した所です。ことに小林村の鎮守である香取神社から、真言宗東福寺にかけては小山を思わせるような砂丘を形づくっています。今は区画整理で山が平にならされたため、砂丘の面影はわずかにしかみられません。

大袋地区

〈大袋村〉

大袋村は、明治二十二年（一八八九）、恩間・大竹・大道・三野宮・大林・大房・袋山それに恩間新田村の八カ村が合併してできた旧村です。この村名は大竹・大道・大林などの「大」と袋山の「袋」を重ねたものです。このうち恩間新田は、江戸時代は恩間村の中に含まれていましたが、明治四年（一八七二）に恩間村から分離して独立した村です。また、袋



元荒川に架かるメ切橋（南荻島）

でしたが、その後武蔵国埼玉郡に入った所です。このほか、元荒川の付け替えて、荻島村の一部が川の東岸になった所があります。この新川によって荻島から孤立した集落は、メ切りの地とも呼ばれました。本村との交通上、新川に架けられた橋もメ切り橋と呼ばれていました。メ切りとは川の付け替えて、もともと流れていた川筋がメ切られたという意味です。

〈袋山と恩間〉

袋山の地名は、元荒川が袋のような形でこの地を囲むように流れていたこととこの地に積み重ねられた川砂が山のように高くなっていったことから、袋の山と呼ばれたといわれています。この袋山は、新田に開発された元荒川の古川を除いては、すべて畑地で、桃や梅の産地として知られていました。

恩間は、もともと袋山とは元荒川を隔てた対岸の地でしたが、今は地続きの地です。恩間は、古く

〈大房と大林〉

大房（現在の北越谷周辺）や大林は、元荒川が曲流する辺りに位置している地で、袋山などとともに自然堤防のよく発達した地域です。その多くが畑地でしたが、特に桃や梅の名所として有名な所で、歌川広重の絵にも描かれています。このうち大房の真言宗浄光寺

の境内には、古梅園という観光のための庭園が設けられています。昭和十一年（一九三六）には、俳人の高浜虚子がここに来て俳句を詠んでいます。越谷梅林公園や浄光寺を除いては、梅はすっかりなくなりしましたが、元荒川堤には桜が植えられ、桜の名所になっています。

ところで大房の地名ですが、大房の「フサ」は笹とか萱がたくさん生えている場所を指すといわれますので、古いころこの地には笹や萱がふさふさと生い茂っていたのかもしれない。ここには海道内・沼田・沼向などの小字がみられます。海道内はもちろん日光街道がそこを通過していたことから付けられた名です。

大林の地名は、詳しいことは不明ですが、今でも松の木などの樹木が自然のままに生い茂っている所があります。現在、ここは、明治四十一年（一九〇八）に開設した宮内省（現在の宮内庁）の埼玉鴨場となっています。小字には海道西・海道東といった名があります



越ヶ谷古梅園

すが、これは日光街道を中心とする西の方、東の方ということでしょう。

〈大竹・大道・三野宮〉

大竹・大道・三野宮は、同じく元荒川に沿った村々で、江戸時代は岩槻藩に属していました。このうち大竹の地名は、おそらくもうそう竹のような大竹が茂っていたことから名付けられたものでしょう。ここには堀内などの小字があります。堀内は、古い時代、構堀といつて堀を巡らせた豪族などの屋敷内を、堀の内と呼びましたので、昔ここに豪族が住んでいたとも考えられます。

大竹の隣は大道です。この大道の地名はよくわかっていませんが古いころ立派な街道がここを通過していたことから名付けられたのかもしれない。

三野宮の地名もはっきりしませんが、古い時代、武蔵国とか下総国などの国の国司（長官）に任命さ

は「忍間」とも書かれ「おま」とも呼ばれていました。この地名は、荒川（元荒川）が押し回している地ということで「おしま」といわれましたが、いつか「おんま」と呼ぶようになりました。この地は古くから開けた地で、鎌倉時代の金沢称名寺文書の中に「新方のうちおま」の名がみられます。

この地には、江戸時代の国学者渡辺荒陽や村田春海の養女になった歌人の村田多勢子などが出ている旧家渡辺家があります。恩間新田は、この渡辺家の祖先が開発した地といわれています。また、恩間は江戸時代には岩槻藩に属していましたが、この村の中ほどに天神池と呼ばれる八反歩（約八〇アール）ほどの池があり、毎年領主からこの池の魚をとることを命じられていたといわれます。この池も今は埋め立てられてその面影は残していません。

れた人は、まず、主な神社に参拝するのがしきたりでした。この国司が参拝する順序で一の宮・二の宮と呼ばれましたが、ここには国司が参拝するような大きな神社は見当たりません。一説によると元仁元年（一二二四）、源頼朝の妻の政子が、この地に稲荷山一乗院という寺を建てたと伝えられています。その後、応永十一年（一四〇四）に、時の将軍足利義満の三男である三の宮がなくなりまし。そのとき三の宮稲荷大明神をここに祭ったことから、この地を三の宮と呼んだといわれています。なお、一乗院には、徳川家康の別荘であった神奈川御殿の建具の一部が使われているといわれています。また、この地からは日本一の力持ちといわれた三ノ宮卯之助という人物が輩出されています。

荻島地区

〈荻島村〉

荻島村は、明治二十二年（一八八九）に、野島・長島・南荻島・北後谷・西新井・砂原・小曾川の七カ村が合併してできた旧村です。このときの村名は、合併村のうち一番大きくて中心的な村であった南荻島の南を除いて付けられたものです。この南荻島や北後谷の南や北は、明治十二年（一八九九）の郡制施行のとき付けられたものです。これらの村のうち野島・小曾川・砂原それに荻島の一部は元荒川に沿った地で、長島は古いころの綾瀬川沿いの地、西新井や後谷は、荒川（元荒川）が、もともと綾瀬川に乱流していたころの河道沿いに連なる村です。古くは武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷の中に含まれていました。

〈野島・小曾川

砂原・北後谷〉

野島の「シマ」は、水に囲まれた島ということだけでなく、耕地を指すそうですので、野の中の耕地ということから起こった地名のようです。この地には貞観二年（八六〇）という古いころの創立を伝える、野島山浄山寺という曹洞宗の寺院（もとは天台宗）があります。



浄山寺

江戸時代には「野島の地藏さま」として有名で、たくさんの方々が訪れていました。小字には川端などの名があります。

野島の隣にあたる小曾川は、同じく元荒川べりの地です。小曾川の「ソ」は石や砂という意味があるそうです。また「カワ」は側、すなわちそばとも解されていますので、砂地のそばの地、ということから付けられた名とみられます。ここには前原・沖田などの小字があります。

砂原も小曾川と同じく砂地の地から砂原と呼ばれたのでしよう。ここには沼ノ方という小字もありますので沼があったとみられています。

後谷は、元荒川と綾瀬川の間にあたる地です。古い時代、荒川（元荒川）が荻島から西新井を通って綾瀬川へ流れていたことがありました。この古い流れに沿った自然堤防上に、後谷や西新井の集落が連なっています。その前後は水田に適した一面の湿地でした。ことに後谷の後方は一面の湿地、

つまり「谷」であったのでこの地名が付けられたのでしよう。ここには、外谷・内谷など谷のつく耕地地名が多いことから、全体に低い地であったことが考えられます。

〈南荻島・西新井・長島〉

荻島の地名は、荻島の「シマ」が耕地を指すといわれますので、元荒川べりの荻（水辺に生える芦の一種、すすきに似た花をつけます）の茂った所の耕地とも解されます。

出津という小字は、現在、文教大学や住宅地になっている所で、ここは元荒川が屈曲した所で、もとは一面の河原、すなわち遊水池でした。遊水池とは大雨などで川の水が増えたとき、ここに水をためて流れを緩やかにする所です。現在、出津と書かれています。その地形からみて川洲が出張った所であり、出洲が出津と書かれるようになったとみられます。ちなみに津とは渡し場とか港、

あるいは岸を指す言葉ですが、ここはそのいずれにもあたっていません。

西新井は、荻島の西隣にあたります。西新井の「アライ」は新しい開発地の集落を指すといわれますので、元荒川の西にあたる開墾地の里ということで名付けられたとみられます。ここには堀の内・立野などの小字があります。堀の内は前にも述べた通り豪族などの屋敷があった所を指しますので、ここにも豪族のような人が住んでいたとみられます。

長島は、古いころの綾瀬川の河道跡に沿った所で、細長い集落をなしていたことから細長い耕地、すなわち長島と呼んだのでしよう。ここはもと西新井村の新田地で、西新井新田と呼ばれていましたが、元禄八年（二六九五）に、西新井村から独立して一村をつけた所です。ここには寺浦・中通などの小字がみられます。このうち寺浦の「ウラ」は、北東の方角を指す言葉だといわれ、「テラ」は平な地ともいわれますので、長

島の中でも北東にあたる平な所ともみられます。

出羽地区

〈出羽村〉

出羽村は、明治二十二年（一八八九）に、大間野・七左衛門・越巻・谷中・神明下・四町野の六カ村が合併してできた村です。この村名は、その昔、越ヶ谷郷の豪族会田出羽が、当時一面の沼沢地であった綾瀬川べりの地を開発するため、排水用の堀を掘りました。人々は、この堀を出羽堀と呼びました。そして出羽堀を掘ってこの地域の開発のもとをつくった会田出羽をたたえ、その名をとって出羽村としたものです。

江戸時代は、武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷の中に含まれていました。このうち早くから開けていた元荒川べりの四町野や神明下を除いては、元和から寛永年間（一六一五

〜四四）にかけて、神明下村の地方代官会田七左衛門政重によって開発された所です。当時は槐戸新田、あるいは七左新田と呼ばれていました。元禄八年（二六九五）に、谷中・越巻・七左衛門・大間野の四カ村に分けられました。槐戸という地名は、槐の木が自生している川のほとりの地ということから付けられたものでしよう。なお、この地の開発者会田七左衛門政重は、会田出羽の養子といわれ、のち神明下村に分家しましたが、関東代官伊奈半十郎忠治の家臣としてたいへん活躍した人物です。

〈四丁野・神明下・谷中〉

四丁野は四町野とも表記され、条里制の遺名ともいわれますが、四町歩ほどの耕地であったからともいわれています。越ヶ谷の久伊豆神社や越ヶ谷中町の浅間神社なども、もとは四町野の中にあつたものです。また、越ヶ谷本町の市神（市場の神様）神明社も、江戸



迎摂院（こうしょういん）

時代のはじめ四町野の神明社を移したものとされています。ここには押切・御縄先・神明などの小字がみられます。このうち御縄先の御縄とは、検地（土地の検査）のことを指したもので、縄先とは、はじめに検地を受けた場所です。また、押切は、元荒川の堤防が大水で切れた所をいいました。神明は、もちろんそこに神明社があつたことから付けられた地名です。

神明下は、神明社が祭られているその下の地ということから名付けられた村名といわれ、会田七左衛門家代々の墓所もあります。

谷中は元禄八年（一六九五）に四町野村から分村した村で、ここも会田七左衛門政重による開墾地です。この中に中西・寅沖・大作などの小字があります。このうち寅沖の「オキ」はこの場合、起の当て字で、寅の年に開発された所とみられます。

〈七左衛門・越巻・大間野〉

七左衛門（現在の七左町）は、この地の開発者会田七左衛門政重の名をとって付けられた村名です。会田七左衛門政重は、七左衛門村に真言宗の観照院などを建てたほか、越巻村（現在の新川町）に真言宗の満蔵院、神明下村に真言宗政重院などを建てています。さて、七左衛門には上・中・下・屋敷前・屋敷裏・屋敷内などという小字があります。屋敷前とか屋

敷裏という小字は特定の人の屋敷を中心とした呼び方です。ここは、この地域を開墾するとき設けられた陣屋（役所の出張所）のあった所とみられますが、のちに名主の屋敷地になったので、屋敷と呼ばれたのでしよう。また、七左衛門村は、もともと沼沢地であっただけに内沼・細沼・大沼など沼にちなんだ小字が多くみられます。

七左衛門の西隣が綾瀬川に面した越巻（現在の新川町）の地です。地名は、越巻の「コシ」が山などのふもととかそのそばとかを指し、「マキ」は人家の集まった所といわれますので、綾瀬川の対岸、鳩ヶ谷から戸塚、大門に連なる台地のふもとの集落から付けられた名とみてよいでしょう。現在、越巻は、新川町と改名されていますが、それは新川と呼ばれる末田大用水路がここを流れていることで付けられた名です。

大間野は、綾瀬川に沿った地です。その地名は、大きな耕地の間にある集落ということから付けられた名と考えられます。ここには

小字がみられます。このうち街道は日光街道の通じている所、鎌田は釜の底のように深い田、すなわちくぼんだ田、塚田は、田の中に塚があったことから、このように呼ばれたとみられます。

〈蒲生〉

蒲生は、古綾瀬川（もとの綾瀬川の主流）に面した所で、水草の蒲がたくさん生えている地ということで付けられた地名とみられています。また一説には、古い時代戸塚村（現在の川口市）にあった慈輪山という寺の領地が美濃国（現在の岐阜県）蒲生郡のなかにありましたが、この寺の領地が、この地と交換されました。このとき慈輪山では、もとの領地の名をとって、この地を蒲生と名付けたともいわれます。このほか蒲生は加茂とも呼んでいました。「カモ」とは蒲の生えている水辺のことといわれますので、加茂も蒲生も同じ意味であるようです。

登戸は「ノボット」とも呼ばれ、川を渡る所を指すともいわれますので、古い時代、ここに川が流れていたか、大きな池や沼があったともみられます。一説によると、登戸は越ヶ谷から江戸へ登る戸口から起こった地名で、戸は里のことだとしているものもあります。ここには街道・塚田・鎌田などの

川東・川西という小字があります。この川とは大間野を二分した新川（末田大用水路）を指したものです。

蒲生地区

〈蒲生村〉

蒲生村は、明治二十二年（一八八九）に、蒲生・登戸・瓦曾根の三カ村が合併してできた村で、この村名は、旧蒲生村が三村のうちでもっとも大きくて中心的な村であったことから蒲生村を新村名にしたものです。古くは武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷に含まれていましたが、江戸時代には武蔵国埼玉郡八条領の中に組み入れられていました。この地域は、市内でも南西にあたる地で、この中ほどを南北に日光街道が通じていました。このうち瓦曾根は元荒川沿い、登戸は谷古田用水路沿い、蒲生は綾瀬川と古綾瀬川沿いにあたっていている地で

ここには八幡・明德・打分・下茶屋・上茶屋・奉行地などの小字があります。このうち八幡はここに八幡神社があったことから起こった名とみられます。また、明德は現在「めいとく」と呼んでいますが、おそらく、もとは「アケト」と呼んでいたとみられます。アケトとは「アクト」、つまり土砂が流れこんでできた土地ともいいますので、この地はもと低い所で、周囲から土砂が流れ込んでできた場所ともみられます。また、上茶屋・下茶屋という所がありますが、それはここにお茶屋があったので付けられた地名です。ここは、越ヶ谷宿と草加宿の中間にあたる日光街道沿いの地で、旅人が一休みするためのお茶屋が設けられていました。このような所を「立場」と呼んでいます。また、奉行地という小字は、おそらく宝暦十二年（一七六二）に、土地の争いから一村検地（一つの村の土地の検査）が行われましたが、このとき検地奉行がここに奉行の出張所を置いたので、それか

す。古綾瀬川とは、蒲生の南端の藤助河岸から東に向かつて流れていた、もとの綾瀬川の流路です。今は川柳の伊原新田に、その流れの面影を少しとどめているだけです。



藤助河岸跡に復元された小屋

ら奉行地と呼ばれたとみられます。打分もそのときの検地で、土地が分けられたことから打分と呼んだのでしよう。

大相模地区

〈大相模村〉

大相模村は、明治二十二年（一八八九）、西方、東方、見田方・南百・別府・四条・千疋の七カ村が合併してできた村です。新村名は、古い時代、西方・東方・見田方などの地域が大相模郷と呼ばれていたことから名付けられたものです。この大相模の地名は、西方（現在の相模町）の大聖寺（大相模の不動尊）の寺伝によると、天平勝宝二年（七五〇）に、良弁という高僧が相模国（現在の神奈川県）の大山で、一本の櫨の木から二体の不動尊を刻みまし。そのうち元の木で彫られた不動尊が、この地に祭られたので大の相模と

呼ばれるようになったといま
す。古いころは、西方村などが武
蔵国崎西郡（埼玉郡）大相模郷、
それに千疋・別府などが崎西郡八
条郷の中になりましたが、江戸時
代には武蔵国埼玉郡八条領に属し
ていました。いずれの地も元荒川
やその下流中川に沿った地域にあ
たります。

〈西方・東方・見田方〉

西方は、大相模郷のうち西の方
にあたる地ということで、西方と
名付けられたようです。この地に
は古い創建を伝える大相模の不動
尊や大きな勢力をもっていたとい
われる山王社（現在の日枝神社）
などがあります。また、ここには
藤塚・番場・馬場野などの小字が
あります。このうち藤塚という地
名は、藤塚の藤が「トウ」からき
たものといわれます。そして「ト
ウ」は湿地を表すといえますので、
湿地の中に塚があったことから藤
塚と呼ばれたのかもしれませんが。

さらに、馬場野の近くに番場とい
う地があることから、古いころこ
の辺りに、土豪のような武士が住
んでいたことも考えられます。

東方（現在の大成町ほか）は、
大相模郷の東にあたる地から名付
けられたとみられます。この地に
は武蔵七党と呼ばれた、七つの武
士団のうち、野与党に属した大相
模次郎能高が住んでいたといわ
れ、古くから開けていた土地とい
われています。ここには茨田など
の小字があります。茨田の「イバ
ラ」は荒地を指すといわれますの
で、あまりよくない田んぼを指す
といわれています。

見田方は、「ミタ」というのが
本田を指すといわれますので大相
模郷の中でも本田があった方とい
うことから、このように呼ばれた
のかもしれませんが。江戸時代は、
見田方をはじめ東方・南百・別
府・四条・千疋・麦塚それに柿ノ
木（現在の草加市）の八カ村は忍
藩（現在の行田市）の飛地で、柿
ノ木領八カ村と呼ばれていまし
た。柿ノ木村がこのうちで一番大

きな村であったからです。この八
カ村を取り締まった割役名主は、
代々見田方村の宇田家が勤めてい
ました。

また、見田方の地からは、古墳
時代後期の集落とみられる住居跡
が発掘されました。この見田方
地には、内輪・辻・土腐・曾根な
どの小字がみられます。このうち
土腐は、水の深い田、曾根は砂地
の所、辻は十字路の所、内輪は半
円形の所ということから起きた名
といわれています。

〈南百・四条別府・千疋〉

南百は、難渡とも書かれ、川を
渡るのに難しい所ということから
付けられた名ともいわれます。ま
た、「ナンド」の「ド」は川の合
流点を表すといわれ、大相模の南
の方の川の合流した場所というこ
とで名付けられたともみられま
す。事実、ここは元荒川と古利根
川が合流する所で、もとは渡船場
であった所です。ここには深田・

曾根・沖などの小字があります。
このうち深田は、土浮や土腐と同
じく水の深い田のことです。

また、南百から吉川に通じる中
川に架けられた橋は、現在、吉川
橋と呼ばれています。もとは
「トクエバシ」と呼ばれていまし
た。これは、明治時代の終わりご
ろ、吉川の徳江という人が木橋を
架けて交通の便をはかったので、
この橋の名を「徳江」という人物
の名をとって付けたものといわれ
ています。当時、この橋を渡ると
きは渡し賃をとったといえます。
その後、昭和の初めごろこの橋を
埼玉県が買い取りました。現在の
橋は昭和八年（一九三三）に架け
替えられたものだそうです。

四条は、条里制の遺名ではない
かといわれています。ここには待
田・根郷・長島などの小字がみら
れます。このうち長島は細長い耕
地、根郷は四条の元になった集落
の地、待田は町田といって、一團
いの田から起こった名とみられて
います。

別府は別符とも書かれます。古

い時代、時の政府から特別に許し
をえて開発された地を別符田と呼
びましたが、この別府の地がそれ
であるか詳しいことは不明です。
ここには南谷・北谷などの小字が
あります。市内でも最も南はずれ
の千疋は、千匹とも書かれます。
「セン」は川で「ヒキ」は低いと
も解され、川に沿った低い土地か



宇田家長屋門（現在はありません）

ら起こったとみられています。こ
こには芦田・三枚田・浮沼などの
小字がみられます。現在、南百・
四条・別府・千疋の地は、東町何
丁目、それに一部は川柳町何丁目
と呼ばれています。

川柳地区

〈川柳村〉

川柳村は、明治二十二年（一八
八九）に、伊原・麦塚・柿ノ木・
青柳の四カ村が合併してできた村
です。新村名は柿ノ木の「カ」伊
原の「ハ」青柳の「ヤ」麦塚の
「ギ」をとって「カハヤギ」とし
たともいわれますが、実際は「カ
ワヤナギ」と呼んでいます。その
後、川柳村は、昭和三十年（一九
五五）八月に草加町と合併しまし
たが、この川柳村のうちの麦塚・
伊原・上谷が同年十一月境界を変
更して越谷町に編入されました。
この地域は、古綾瀬川や東京葛西

用水・八条用水に沿った所です
が、その昔、利根川などが乱流し
ていた地で、砂地の所も少なくあ
りません。

〈麦塚・伊原〉

麦塚（現在の川柳町ほか）は、
市内でも南端にあります。地名の
起こりは砂地が「ムキ」出しにな
っている所に塚があったため「ム
キヅカ」といい、それが「ムギヅ
カ」になったようです。ここには
樟子山・蔵屋敷などの小字があり
ます。このうち樟子山の「シヨウ
ウ」は小ともとられ、小さい丘の地か
らこのように呼ばれたとみられま
す。また、蔵屋敷は、ここに米を
貯えておく蔵があったからとみら
れています。

伊原は、伊原本田と伊原新田と
に分かれています。このうち伊原
新田は古綾瀬川と東京葛西用水に
沿った地です。地名は「イバル」
すなわち「威を張る」といって、
新しく開発された土地を自分の土

地であると主張することから起こ
った名ともみられています。ここ
には鎌田・大角屋敷などの小字が
あります。

「わたしたちの郷土こしがや」から



鎮守のもり

どこの地区でも見られるお寺や鎮守のもりは、信仰の場であると同時に木陰を作り、子どもたちの遊び場ともなり、地域のコミュニティの場となっています。



元荒川の桜堤

北越谷の元荒川堤に植えられた桜並木は、延々2kmにわたり見事な花をつけ、広々とした河川敷と一体となり、市街地の中の行楽の場となっています。



眺望が開け 富士山の見える風景

富士山が見えることは、開けた眺望のシンボルであり、以前に比べて少なくなりましたが、富士山や日光連山を遠望できる場所は市内にまだ残っています。



古利根川の 緑豊かな水辺

市の東部を流れる古利根川の流域は、比較的人の手が加わらず、自然堤防上の緑が広い川面に映り、見る人の心を和ませます。

いつまでも

残したい風景

越谷アムニティ八景（画・大徳幸雄）昭和57年に市民投票で決定



豊かな水をたたえた 田園風景

青々と広がる水田の間を縦横に流れる大小の水路と、そこに植えられたハンノキ、点在する農家などは市を代表する景観の一つです。



元荒川と 葛西用水の開けた水辺

元荒川の宮前橋から市役所わきを経て瓦曾根堰の水門にかけては、葛西用水が隣接し、川辺は釣りを楽しむ人、お弁当を広げる家族連れなど市民の憩いの場となっています。



久伊豆神社の社叢

参道の長い松並木とフジの花、うっそうと茂る樹木を背にした朱塗りの社殿、境内に残された越谷吾山や平田篤胤の遺跡など歴史的雰囲気、緑がよく調和し、荘厳な趣があります。



古い家並・宿場の面影

旧日光街道沿いの越ヶ谷や大沢には数は少なくなりましたが、蔵造りの家や千本格子の家が見られ、古い宿場の面影を残しています。

植物

水と緑に恵まれた越谷では身近なところに自然が残っています。四季折々に美しい花が咲き、訪れる人を優しく迎えてくれます。目につく梅や菜の花、桜、藤、ボタン、チューリップ、ハナシヨウブ、コスモスなどだけでなく、ひっそりと咲いている花たち、越谷の地名が付いたコシガヤホシクサやキタミソウなど埼玉県のレッドデータブックに絶滅危惧種として指定されている花たちも精いっぱい花を咲かせています。



レンゲソウ



ホトケノザ



フジバカマ



セリ



スミレ



シロバナタンポポ



クコ



キクイモ



ガガイモ



カラスウリ



オオジシバリ



オオイヌノフグリ



イモカタバミ



イシミカワ



アキノノゲシ



キタミソウ

埼玉県レッドデータ絶滅危惧IA類
 北海道の北見地方で最初に発見されたのでこの名がついたといわれています。
 北方系の植物で日本で見られるのは、越谷市およびその周辺と熊本県熊本市だけという珍しい植物です。越谷市では、古利根川と元荒川流域で確認されていますが、最も多く群生して見られるのは、葛西用水瓦曽根溜井です。10月と3月ごろの2回、直径2mmほどの白い可憐な花を咲かせます。



コシガヤホシクサ

埼玉県レッドデータ絶滅
 越谷市と茨城県下妻市に自生していた小さくかわいいう草です。湿地に生育するホシクサ科ホシクサ属植物で日本固有の単子葉植物です。越谷市では絶滅危惧種のこの花について富士中学校科学部の生徒たちが復活させようと栽培に取り組んでいます。



ノウルシ

埼玉県レッドデータ絶滅危惧II類
 河川敷の泥地などの湿地に生える高さ30cmほどの多年草です。茎は直立し、葉は互生し、細長い楕円形で長さ5~6cm、幅6~7mmです。4~5月に茎の先端に5枚の葉を輪生し、そこから放射状に枝を出して複数の花をつけます。葉や茎を傷つけるとウルシに似た白い汁が出て、かぶれることからこの名が付けました。



オイカワ



アオスジアゲハ



ユリカモメ



トウヨシノボリ



ギンヤンマ



マガモ



ゲンゴロウブナ



タヌキ



ハクセキレイ



カブトエビ



クロアゲハ



メジロ



キジ



ヘイケホタル



アオサギ



シラコバト

埼玉県レッドデータ絶滅危惧Ⅱ類

埼玉県の「県民の鳥」、越谷市の「市の鳥」に指定されています。一時は市内の宮内庁埼玉鴨場周辺に20数羽しかいなくなり、絶滅寸前でしたが、現在では埼玉県の東部を中心に千葉県、茨城県、栃木県などの一部にも分布しています。昭和31年（1956）1月14日天然記念物に指定されました。



アオバズク

埼玉県レッドデータ地帯別危惧

夏鳥として4月の終わりごろ日本全国に渡ってきます。県内では山地の森林や低地の市街地の神社などの大木で繁殖が確認されています。市内では、神社の社叢林や宮内庁埼玉鴨場で確認されています。巣となるうろのある大木や餌となる昆虫が減ってきていることから、子育ての場所が少なくなり、個体数の減少が心配されています。



カワセミ

埼玉県レッドデータ絶滅のおそれのある地域個体群

全国の川、湖、沼などにすんでおり、ほとんどの地域で一年中見ることができます。河川周辺の土の崖に巣穴を掘って子育てをします。一時、水の汚れや、河川改修などにより低地ではほとんど見られなくなりました。市内では、平方地区の古利根川や県民健康福祉村、大吉調節池周辺で確認されています。

生きもの

市内の緑道や水辺を散策するとたくさんの生きものが生息しています。カルガモやサギ、カワウ、セキレイ、シジュウカラなど…
そのほか埼玉県レッドデータブックに掲載されているシラコバトやアオバズク、カワセミなどの鳥たちとすてきな出会いがあるかもしれません。

みんな一緒に生きよう…

越谷の
匠の技が
生み出す美

伝統工芸

伝統持

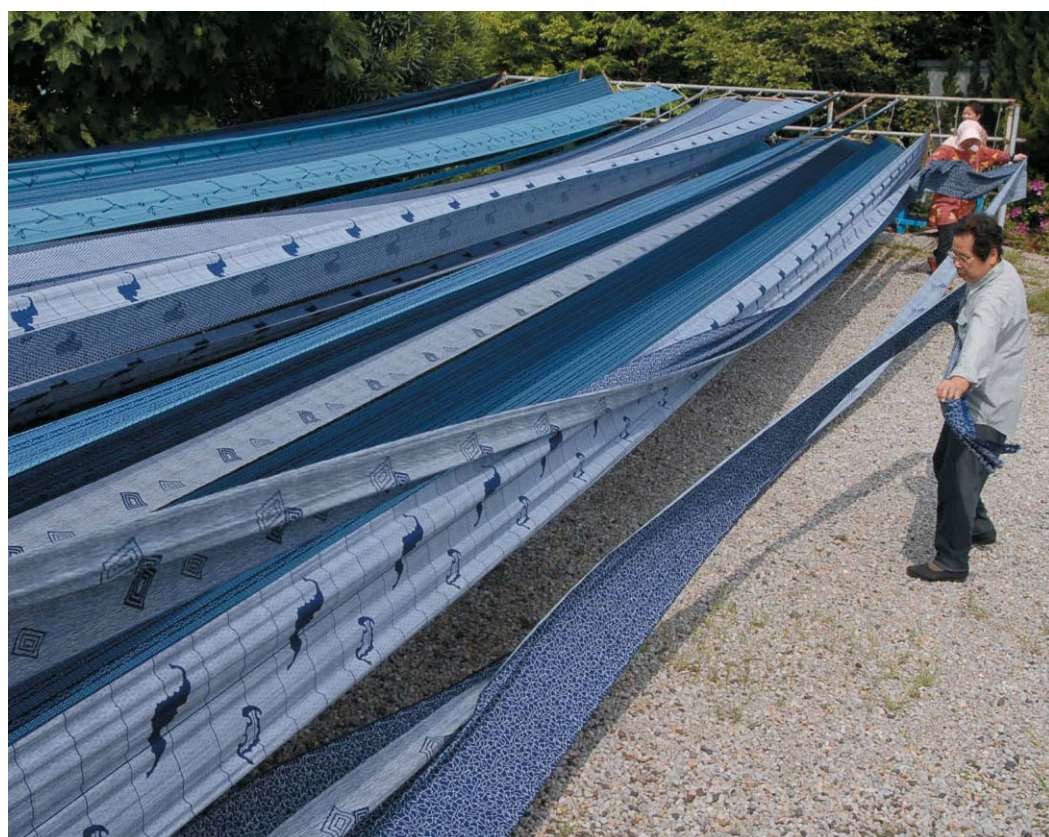
越谷ゆかた

懐かしの
藍染め

越谷は、藍染めの型付に使うもち米の産地であり、元荒川、綾瀬川などの清流で染め上げたゆかたを洗うことができるといった好条件がそろい、藍染めゆかたの産地として知られていました。昭和30年代までは、順調に生産されていましたが、生活様式の変化とともに衰退し、現在、市内に残る藍染め工場は1軒のみとなりましたが、5月〜6月の晴れた日には、昔ながらのゆかた地の天日干しが行われます。



日光街道の宿場町として栄えてきた越谷には、流通の利便性、豊かな水や緑という特徴から江戸時代にさまざまな手工芸品が生まれました。
当時、日本の中心であった江戸から近かったこともあり、越谷の品々は評判となり、やがては全国へと名を広めていきました。その後、時代の変遷とともに多くは姿を消すこととなりましたが、越谷の手工芸品はその伝統を脈々と受け継いでいます。



伝統持

越谷ひな人形

気品あふれる
優雅な顔立ち

越谷においてひな人形が作られるようになったのは、江戸時代中期、会田佐右衛門が江戸の十軒町で学んだ人形作りを越谷に伝えたのがはじまりといわれています。それから現代に至るまでの230年間、伝統を守り、発展を続けてきた「越谷びな」は、今では国内で有数のひな人形の産地として名を知られるま

でなっています。
越谷ひな人形は俗にいう「関東びな」に分類される作りです。特徴として気品あふれた優雅な顔立ちをしており、高い評価を受けています。また胴柄、頭、手足などすべての部品を市内で製作しています。



伝統持

越谷だるま

伝統の技法で作られる
やさしい顔立ち

江戸時代中期ごろ、従来あった「起き上がり小法師」という玩具に座禅を組んだ達磨大師を描いたのが越谷だるまの起源といわれています。以来、子どものほうそうや疫病除け、開運や厄除けとして長く親しまれてきました。

越谷だるまは、ほかの地方のものに比べて「色白」「鼻高」「福福しい」のが特徴で、越谷のみならず、川崎大師をはじめとする関東一円はもちろんのこと、日本中に出荷されて親しまれています。そのほとんどが手作業で作られています。だるまの命である「ひげ」ももちろん手描きで、製作した職人ごとに表情に個性が表れているのも特徴です。



伝統持

越谷手焼きせんべい

お米の風味と
昔なつかしい味

越谷手焼きせんべいの発祥に関しては諸説あり定かではありません。江戸時代に奥州街道沿いの茶店で売られていたことから評判となり、名物として広く知られるようになりました。越谷は古くから「江戸の米蔵」といわれ、良質な米の産地として有名だったことから、越谷せんべいが生まれたともいわれています。

特徴として、すべてが手作りであることが挙げられます。吟味された米を丹念に練り、天日で干した後、醤油を塗って一枚一枚焼き上げます。この時に用いられる醤油はそれぞれの店が独自に作っているため、店ごとの味と個性が生まれています。





越谷桐たんす

江戸の技術を
今なお受け継ぐ

越谷桐たんすの歴史は江戸時代初期から始まっています。越谷は、当時から江戸たんすの原産地として全国的に有名でした。現代においても生産量は全国有数で、国から伝統工芸品の指定を受けています。

越谷桐たんすは品質の高さでも有名です。質のよい会津桐を中心に東北六県の桐のみを使用し、選別から木取りまで一切の妥協を許しません。この質へのこだわりと受け継がれてきた職人の技こそが、越谷桐たんすの高品質の証しです。



越谷桐箱

精巧な技法が
生きています

越谷桐箱が盛んに製作されるようになったのは、江戸時代のあ
る出来事を経てからになります。文化年間、当時の流行作家であ
った式亭三馬が「江戸の水」という化粧水を作りました。これが
空前の売り上げとなりましたが、この化粧水の入ったガラスびん
を入れていた桐箱のほとんどを製作していたのが越谷だったので
す。以来、現在に至るまで越谷桐箱はその伝統を受け継ぎつつ、
独自の発展を遂げてきました。



越谷の民話

挿絵・戸井田 熙

花田のスマツカラ地蔵——船から降ろした地蔵様

昔、元荒川は、花田をぐるりと回って東小林（現在の東越谷）から瓦曾根に向って流れていました。このころは川の交通が盛んで、大きな荷物などは、みんな舟で運んだものです。

ある日のこと、一隻の船がお地蔵さんを積んで花田までやってきましたが、急に船が動かなくなってしまいました。

「お地蔵さんはここで降りたいのに違いない」船頭さんはこう考えると、お地蔵さんを降ろして花田と増林の境にあたる千間堀の近く古川の堤におまつりしました。

花田の人々は、これをスマツカラのお地蔵さんと呼んでいますが、スマツカラとは、砂河原（スナカワラ）がなまったものといわれ、「スナツカラ地蔵」と呼ぶ人もいます。

このお地蔵さんの背中には、「源海の三十三回忌の供養のために造立。承応四年（一六五五）の正月二十六日」と刻んであり、今から三五〇年も前のことです。

子どもが生まれると、男の子は二十一日目、女の子は三十三日目にお宮参



足止めの狛犬——品行方正に役立った狛犬

越ヶ谷の久伊豆神社には、石で刻まれた狛犬が一对、神殿の番人のようにいかめしく空をにらんで座っています。この狛犬は享保七年（一七二二）に奉納されたものといえますから、今から約二八〇年余り前になります。

悪いところへ遊びに行つてばかりいるとか、家出人で困っている家族が、この狛犬の足を麻ひもで結び、家から離れないよう願をかけると、不思議に悪いところへ遊びにいかなかったり、家出人が帰ってきたといえます。

そんなところから、足止めの狛犬と呼ばれ、大そう信仰されてきました。今でも、このようなお願いをする人がいるのでしょうか、久伊豆神社の狛犬の足は、いつでも麻ひもでしばられています。



ぎょうだいきさま——道普請の神様

蒲生一丁目のもとの日光街道の傍らに、鳥のようななかっぱのような、なんとも奇妙な形をした石の塔が建てられています。土地の人は「ぎょうだいきさま」と呼んで、鷲の神様だといっています。

はてさて、なんでまたこのような奇妙なものが建てられたのでしょうか。この塔ができたのは、宝暦七年（一七五七）といえますから、今から二五〇年ほど前のことです。

これには「砂利道供養」と刻まれていて、実は宝暦七年には、日光街道の大修理があり、街道の修理完成を記念して蒲生の人々が中心となって建てたものでした。そして、道を歩く村人や旅人の道中安全を願い、「わらし」を備えてお祈りし

りをするものですが、花田では、越ヶ谷の久伊豆神社にお参りしたあと、必ずこのスマツカラのお地蔵さんにもお参りをするということでした。長い年月風雨にさらされたスマツカラのお地蔵さんは、今では花田の住宅街にまつられ大きく変わりゆく越谷の姿を見守っています。

オイテケ堀——供養の後、平穩に

現在のように、上流にダムがあるわけではなく、土木工事も貧弱であった昔のことです。川の多い越谷付近では、夏から秋にかけては、大きな水害をたびたび受けたものでした。

約二二〇年ほど前の天明六年（一七八六）七月の大水も、そのひとつでした。見田方の八坂神社わきの元荒川堤防が切れて、大相模の人家や田畑が、それはもう大きな損害を受けてしまいました。

堤防の切れたところが、川底のようによくぼんでしまつて、大きな大きな内池が残りました。今でもそこは、ヨシや雑草が生い茂っています。

それからのことです。日が暮れてからこの辺りを通ると、池の中から、「オイテケ、オイテケ」と悲しい声が聞こえてきます。また、ある人は、ここには大きな白い蛇が住んでいて、池のはたを通る人を水の中に引きずり込むのを見たことがあるといふのです。ですから、みんなはここを「オイテケ堀」と呼んで、誰も近寄ろうとしませんでした。

ある日のこと、一人の巡礼者がオイテケ堀のそばを通りかかると、いつものように、「オイテケ、オイテケ」と悲しい声が聞こえてきて、何も知らない若い巡礼者は、あつという間に大蛇に飲み込まれてしまいました。翌日、このことを知った村人たちは、かわいそうな巡礼者のために早速ここに水神宮と弁天宮をおまつりし、池の主をなくさめました。それからというもの白い蛇も姿を消し、「オイテケ、オイテケ」の声もなくなったということです。

水害をたびたび受けたところでは、こうした言い伝えがたくさん残っています。当時の人々が大水をどんなに恐れ、恨んでいたかを物語っているようです。

たといいます。

道中安全を願う心が、なにか人間にはない大きな力を秘めたものとして、「ぎょうだいきさま」をつくりあげたのでしょうか。「ぎょうだいきさま」は今日も、道ゆく人々を黙って見守っています。



塩かけ地蔵——子どもを守る神様

元禄年間というから、今から約三〇〇年前のこと。大沢の農家と兵衛さんの家に、次々と太った男の子が誕生したそうです。

初節句も無事にすみ、すくすくと育っていききましたが、ある日のこと、子どもたちは高い熱を出すと、そのまま意識をなくしてしまいました。若い両親は、それまで経験したことのない病気に、すっかり気が動転し、ただオロオロとすればかりです。医者よ薬よと八方手を尽くして手当てをしましたが、一向によくありません。おばあちゃんも、かわいい孫のこと、気がきではなく、あちこちの神や仏に祈りましたが、さっぱり治りません。そんなある日、近所の人がこう教えてくれました。

「大沢のお地蔵さんは、大層ご利益があるそうじゃ」

おばあちゃんはさつそく出かけて、「かわいい孫の病気を治してくれるなら、必ず『塩断ち』をいたします」と願かけしました。塩のない生活をするのは、大層辛抱のいることだったので

その夜のこと、お地藏さんがおばあちゃんの夢枕に立って言ったそうです。「三日三晩ののち、孫の病は治るぞや」

すると、どうでしょう。お告げのとおり孫はみるみる元気になりました。おばあちゃんは、願かけの証（あかし）として三日分の塩を持ってお礼参りに出かけた。

大沢光明院のお地藏さんに、塩を振りかけるのが習わしになったのは、それ以来のことだといひます。

今では、お地藏さんは、長い間に塩でとかされ、もとの形もわからないほどですが、それでも子どもの苦しみや悲しみが救われたためだと、醜い姿でも満足しているようにみえます。

セイケ測 — 増森のセイ魚

むかし古利根川が増森の方を大きく回して流れていたころの話です。このころは川を利用した船の交通が盛んで、増森には荷物を積み下ろしする河岸場もありましたが、ここにセイケ測というとても水の深い場所がありました。このセイケ測には大昔からここに住んでいる川の主がいて、それはそれは大きな魚であつたといひます。その魚はセイ魚といひました。

ところが長い間には川の様子もだんだんと変わり、セイ魚が住んでいる深い湖も年々浅くなってきました。さすがの主も浅瀬となつては、住むことができせん。

「わしは、この増森が大好きなんじゃが、もうここには住んではおられん。兄弟のいる鐘ヶ測へいく」
こういひ残して、セイ魚はとうとう古利根川下流の鐘ヶ測へ住み家をかえてしまいました。

それからのことです。古利根川を利用して江戸の間屋へ荷を運ぶとき、船が鐘ヶ測付近にくるとしばしば転覆することがありました。困ってしまった増森の人たちは、額を集めてみんなで相談しました。

「なんせ転覆の事故はセイケ測にいたセイ魚が鐘ヶ測に住むようになってから」
に出ています。越谷の金剛寺といひのは、もしかすると末田（岩槻）の金剛院かも知れません。そのころ、越谷には金剛寺といひのお寺はありませんでした。また戦国時代の岩槻の殿様が戦さのため特別に訓練した犬を飼っていたといひ話も残っていますから、このかしこい白い犬はそのころの犬と何か関係があつたのかも知れません。



左甚五郎の竜 — 一夜のうちに彫りあげた

昔むかし、日光に東照宮を建てるという將軍様のいひつけで、飛驒の国の工匠たちが大勢日光に呼び寄せられたときのことです。

ある日の夕暮、蒲生の清蔵院といひお寺に一人の若者が訪れ、
「日光に行く途中の者ですが、泊まる場所がなくて困っています。どうか今晩一晩泊めてください」

と、お願いするのです。お寺のお坊さんは、若者を快く泊めてやることにしました。若者は、大層うれしそうにして、何べんもお礼をいひました。そしてどうしたことか、一枚の板を貸してくれといひます。何のことかわからないまま、お坊さんは板を探して若者に渡すと、その晩はそのまま寝てしまいました。

次の朝、お坊さんが起きてみると、もう若者はいません。そのかわり、竜の彫りものをした昨日の板が、山門にかけられていました。一晩泊めてもらったお礼にと、若者が一夜のうちに彫りあげたものですが、それはそれは見事なもので、

だ。きつとこれはセイ魚の仕業に違いない」

「セイ魚が悲しんでいるのだ。すまないことをした」

それからというもの増森の人たちは、船で鐘ヶ測を通るときセイ魚にあいさつして通ることにしました。

「おれは増森の者だよ。これは増森の船だよ。セイ魚よ、堪忍だよ。悪さしないでくれ」

こうして大きな声をかけながら進むと、それからは無事に通ることができたといふから不思議です。

その後の時代のことですが、古利根川には新しい川筋が掘られ、セイケ測は開墾されて田んぼになりました。今ではこの田んぼも埋め立てられてしまいました。

かしこい犬 — 大評判の二匹の白い犬

昔、越谷の金剛寺といひ寺に二匹のかしこい犬がいたといひことです。

金剛寺の住職が、江戸の本所（現在の墨田区）にある本寺（支配寺）に手紙を出すときは、いつも二匹の白い犬に行かせました。一匹の犬の首に手紙を結びつけ、もう一匹の犬に二〇〇文の銭を結びつけて使いにい出してやると、足の早い犬で、四時間ほどで用をたして帰ってきました。

ちゃんと道順を知り、ちゃんと用をたして帰ってくるのですから、たいしたものです。使いにい出す前日には、明日は江戸へ用をたして帰ってくるんだよと、よくいひ聞かせ、当日は二升のご飯を与えます。二匹の犬は一升ずつ食べ終えたと、まっすぐ本寺へ駆けつけました。本寺では犬が到着すると、早速ご飯を炊いて与えます。そして犬がご飯を食べている間に返事を書き、犬の首にこれを結びつけて帰してやります。

犬は一もくさんに帰ってくるのですが、途中一度だけ蒲生の酒屋に立ち寄ります。酒屋の主人は、犬を見ると、首に結んである二〇〇文の銭を受け取り、そのかわりに二升のご飯を炊いて与えるのがならわしになっていました。二〇〇文は、そのための代金でした。

この話は、「潭海」（たんかい）といひ寛政七年（一七九五）に書かれた本の中

まるで竜が生きているように見えます。

それからいく日かしてのことです。夜になると決まって、村の田んぼや畑が荒らされてしまうのです。お百姓さんにとって、一生懸命耕した田畑がメチャメチャにされてはたまりません。村人は相談して、一晩中交替で見張りを立てることにしました。

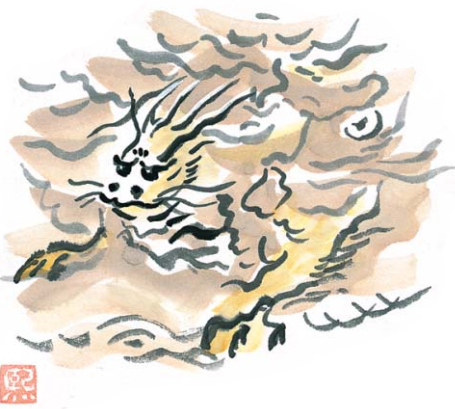
ところがどうでしょう。毎晩田畑を荒らすのは、お寺の門の額から抜け出した竜の仕業だったので。

次の日、早速村人たちはお寺に詰めかけ、竜が抜け出さないようにと釘を打ち込んで両方の眼をつぶしてしまいました。

これでもう安心して眠れると思つたのもつかの間のことでした。夜になると今度は、田んぼに大きな穴が開けられていました。作物を荒らしまわつたあととは、前よりもひどいものです。困ってしまった村人たちが、何とかしてくれとお坊さんに頼みこむと、お坊さんは、竜の額に金網の罫をして、両眼の釘を抜いてやると、

「竜よ、村人たちが困っている。作物を荒らしたりしてはいけませんよ」と、優しく語りかけてやりました。それからというもの、竜はおとなしくなつたといひことです。

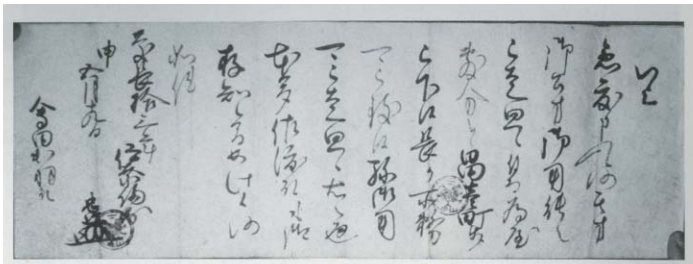
この竜を彫つた若者は左甚五郎といひう人だつたといひわれていますが、左甚五郎の彫つた竜や虎が、夜になると抜け出して、田畑を荒らしまわるといひ話は、ほかにもたくさんあります。しかし、どうして左甚五郎の竜や虎は村人たちに迷惑をかけるようなことをするのでしょうか。そのことについては残念ながら伝わっていません。



会田出羽資久

荒川（現在の元荒川）と綾瀬川に挟まれた地のうち釣上（現在のさいたま市岩槻区）までを越ヶ谷郷と称したが、この地の会田出羽は、岩槻城主太田資正より資の一字を授けられた有力な開発領主であった。出羽資久は、綾瀬川の氾濫で荒廃していた沼沢地の干拓を図り、谷中より蒲生愛宕山地先の綾瀬川まで落し堀を掘り割った。これを出羽堀と称される。折しも関東に入国した徳川家康は太閤検地を実施して、百姓集団による行政村を成立させていった。この過程で家康は、荒川べりの要衝地四町野村に陣屋を構えた（現在の御殿町）会田出羽資久屋敷にしばしば立寄り、新政策実施についての協力を依頼、出羽家の一族庄七郎資勝を家康の近習衆に取立てたりした。出羽資久はこの家康治世のもとで越ヶ谷郷を解体し、数多くの行政村成立に尽力した。

このなかで慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原戦の勝利で事実上天下に君臨した家康は、翌六年には東海道や中山道など、江戸を中心とした公道を指定、人馬徴用の伝馬を制度化した。さらに慶長七年には奥州道も公道に組入れ、人馬継立の宿場を造成させた。このとき出羽資久は自己の所有地である四町野村の一角に宿場を造成、越ヶ谷郷の中心として、当所を越ヶ谷宿と称した。道中や宿場の整備とともに、慶長九年、家康の求めに応じ広大な出羽資久屋敷を提供、家康はここに壮



功績が記された伊奈備前差添書

大華麗な越ヶ谷御殿や御賄屋敷を建立、鷹狩りを兼ねてしばしば御殿を訪れて逗留、そのつど出羽夫妻にお目見えを許し、御馬驗鍾馗の御旗や御紋付団扇など数々の品物が与えられたといわれている。

さらに慶長十三年五月には、家康奉行衆、関東代官頭伊奈備前守忠次の差添状により、「御公方（家康）御用能々走り回らせられ候、付ては屋敷分として畑一町歩下され候」として屋敷地一町歩が給与された。この一町歩の実坪は三町四反余歩、つまり越ヶ谷中町全域が会田出羽家に与えられたわけである。その後も家康はしばしば越ヶ谷御殿に逗留しているが、慶長十八年には秋から冬にかけて、三度も越ヶ谷御殿を訪れ、同年十二月には十九羽

第5章 越谷ゆかりの著名人

こしがやの歴史を支えた人物館



木造会田七左衛門坐像

の鶴を捕えることができた」と御機嫌であった。同十九年と元和元年（一六一五）は大坂城攻めで京都に詰めていたが、大坂夏の陣で豊臣氏を滅亡させ、戦後処理の後十一月江戸に凱旋、真先に越ヶ谷御殿に入つて鷹狩りをしようとした所、鷹場に水があふれて鷹狩りできなかつたため、この地の代官会田資勝は改易に処せられていた。つまり農業振興のため荒川を堰止めた瓦曾根溜井を造成したからである。この家康は元和二年四月に没したが、二代将軍秀忠も数回にわたり重臣を引き連れて一カ月にわたり越ヶ谷御殿に逗留、この間、会田出羽ならびにその子資重に三番叟の掛軸などを与えたという。うち出羽資久は元和五年十月死去、この出羽氏や五〇〇石の旗本に定着した会田資信等歴代の供養墓石は越ヶ谷天嶽寺墓地に残されている。

出羽地区の開発者 会田七左衛門政重

天正十八年（一五九〇）五月、岩槻城は豊臣軍に攻められて落城した。このとき岩槻城主太田氏房ゆかりの子息が、城中より助け出され、越ヶ谷郷の領主会田出羽資久屋敷門前に捨子として放逐されたと伝えられている。会田出羽はそのまゝにしている衣裳はじめ、腰に差した短刀や守袋などから岩槻城の落人と覚り、当時九歳のその子を引き取って養育、会田家の一族として会田七左衛門政重と名付けて養育した。政重は生来利発に長じ剛勇

な人物であったので、資久は成長の後、関東代官頭伊奈半十郎忠治に推挙、伊奈忠治の家臣に組み入れられた。よって政重は荒川沿いの神明下村に別家を創設した。忠治の家臣に組み入れられた政重は、追々その学識や才能が認められ、忠治重臣の一人として各地の検地奉行を勤めたりした。たとえば寛永六年（一六二九）には足立郡鴻巣領東間村、篠津村（現在の白岡町）・花野木村（現在の北本市）、寛永十二年には多摩郡山口領下荻窪村、阿佐ヶ谷村、堀之内村などの検地奉行を勤めている。また、国回衆として各地を巡察、寺院などの訴えを受けていた。

この間、政重は元和元年（一六一五）より、義父会田出羽と綾瀬川の乱流で荒廃していた沼沢地に排水堀である出羽堀を開削、沼沢地を干拓したが、この地の新田開発を進めることになった。この新田開発にあたっては、神明下会田七左衛門家の『神明縁起書』を意識すると、伊奈忠治に仕えていた会田政重は、元和年間荒廃地大沼の沼辺を檢視、この地を安

住の地とすることを願ひ、縦横に溝を掘り巡らしたり、農道を設け人馬道の橋を架けるなど、力を尽くし心を励ませて新田の開発に努めさせた。この間去る者は引留めず、来る者は温かく迎えて新田開発にあたらせたが、追々移住民は増大し、各地から鶏犬の声聞こえる豊かな集落となつていった。よってその主伊奈半十郎はこれを賞してこの新田地を管領に組入れ、この地を七左新田と称させたなどである。ちなみにこの七左新田は、当時槐戸新田と称し、その開発石高は一〇二〇石六斗三升であった。

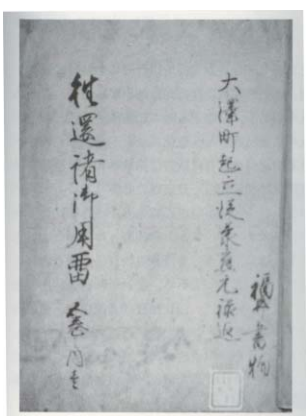
こうして移住民が増すにつれ、会田七左衛門は居住地神明下村に政重院、七左衛門村に真言宗観照院、越巻村に満蔵院、谷中村に妙柳院を開基、それに七左衛門大沼に武主大明神社を勧請、近世の村づくりに多大な功績を残した。この政重は寛永十九年（一六四二）十一月、六十二歳で没し、政重院に葬られた。

その後も、開発が進められたが、元禄八年（一六九五）の武蔵国幕領総検地によると七左衛門の名をとった七左衛門村、越巻村（現在の新川町）・大間野村・谷中村の四村に分村、うち七左衛門村の村高は一〇二石となつていた。

郷土史家

福井猷貞

幕府の高官や高家・公家・格式ある僧侶の休泊にあてられる旅籠を本陣と称した。当初より安永八年（一七七九）まで



本陣資料一括（福井家文書）

は、越ヶ谷宿の本陣は越ヶ谷本町会田八右衛門家が世襲で勤めていたが、財政不振で没落して退転、しばらくは大沢町の照光院が仮の本陣にあてられていた。これが天明四年（一七八四）、宿内一同の推挙により大沢の旅籠屋大松屋権右衛門が引受けることになった。当時祖父の猷貞が死去、引続き父の猷政が病没したため、十七歳の猷貞が福井家七代目を継ぎ、本陣役を勤めることになった。猷貞は本陣経営に専念し、宿内御用旅籠屋を統率する確固たる地位を固め、厚い信任のもと、宿内旅籠の休泊賄いを差配した。もとより猷貞は学問を好み、文筆にも長じていたことで、幕府の伝馬関係書や、そのつどの達し書を丹念に書留めたり、古くからの記録を収録、これをもとにした交通史料五編を編集、さらに越ヶ谷宿を中心とした飯盛女駈落一件、無宿者の狼藉一件、贖金づくり一件など、当時の世相を反映した奉行所吟味書を取録した「御用書留書」などを残している。そのなかには道中取締役人よりの「御内々御尋ねに付、諸家様風説」を申し上げた書付など、不法な人馬使用の数々を書立てた書

などもみられる。

また、猷貞は郷土をこよなく愛し、大沢町の地誌「大沢町鑑」や越ヶ谷町の地誌「越ヶ谷町鑑」などを編さんしていた。ことに大沢町や越ヶ谷町の百姓家を軒別に訪ね、その故事来歴を聞き取り調査した「大沢猫の爪」、「越ヶ谷瓜の蔓」は特筆される郷土誌である。ただし、猷貞は「越ヶ谷瓜の蔓」調査草稿中の文政五年（一八二二）二月、完結清書を待たずに五十四歳で没し、大沢照光院に葬られた。

その辞世句は、
「居ころのよき 学の瀬戸や 秋の風」というものであった。

これら福井猷貞の書残された記録により、日光街道の交通事情や、旅籠屋私宿泊者の行為の実態、ことに年六度上野東叡山寛永寺と日光東照宮を往き来する日光門主はじめ、大名や幕府高官など、本陣休泊者の送迎のしきたりやその賄方など細部にわたって知ることができている。このほか公式には旅人の乗船が禁止されている舟運と、日光街道宿々との旅人を巡る競争論など、あまり知られてない事柄なども記録されている。福井猷貞のこうして書残された記録は、越谷の歴史を知るうえで欠かせない史料であるのみでなく、日光街道における宿場の歴史、いや日本の街道歴史にとっても欠かせない文献といえる。現在この福井家史料は、その散逸や災害による損失を恐れ埼玉県立文書館に寄託されている。



至った。よって吾山は明和七年（一七七〇）五〇歳のとき妻子をともなつて江戸深川に転居した。このときの吾山は、

出る日の 旅のころもや はつかすみ

（久伊豆神社境内にこの句碑が建てられている。市文化財）との不安と希望を織りなした句を残している。江戸に出た吾山は身につけた俳諧の道を一層發揮させ、

安永三年（一七七四）には採点者である判者となり、芸道の最高位である法橋に推挙され、師竹庵法橋吾山と称した。この吾山のもとには数多くの門人が馳せ参じたが、その一人に「南総里見八犬伝」を著した滝沢馬琴などもいる。また、江戸は全国から人びとが集まった大都會であったので、それぞれ地方の方言などが吾山の耳に入った。吾山はこれに興味をいだき、安永四年にはこれらお国言葉やお国なまりを書留め、これを天体・地質・四季・人倫とに分類した「天地」、各地の動物や魚貝類・爬虫類を記した「動物」、各地の五穀や野菜・草木を記した「生殖」、各地の家具や器具・道具・生活

漢学者兼国学者

渡辺荒陽

渡辺荒陽は新方領恩間村の名主渡辺佐介の長子として宝暦二年（一七五二）二月に生まれ、当初政之助之望と称した。もとより渡辺家は中世来の土豪の系譜を引いた旧家で邸内の稲荷社には文保元年（一二二七）八月銘の板碑が建立されている。江戸時代の寛永三年（一六二六）恩間村は大竹・大道・三野宮とともに、岩槻藩の城付村に組み入れられた。このなかで之望の祖父佐介は慶安元年（一六四八）より恩間新田二〇余町歩を開発、岩槻城主より三町歩の免税地を与えられた。さて当の之望は二〇歳のとき粕壁宿名主関根治郎兵衛の娘とえを妻として二男三女をもうけたが、家業よりむしろ儒学を中心に学問修業に熱中、寛政元年（一七八九）妻とえが三十五歳で病没したのを機会に、家をその子太郎に譲り、翌二年次男彌と次女多勢子・三女里都子をともなつて江戸に転居、日本橋新右衛門町に塾舎「時習堂」を開いて門人の教学にあたった。時に之望三十九歳、以来荒陽と称した。

寛政十一年、荒陽が四十八歳のとき越後高田城主榊原政令のもとに入りが許され、築地に居宅を賜わり、藩士の儒学教授に携わった。しかし、文化九年（一八一二）荒陽は榊原家と仲たがいととなり、築地の榊原給宅から知人山本家の屋敷地に移り、儒学から国学に転じた。これは

用品を記した「器用」、各地の言語や文法・語義を記した「言語」の五冊を書き表した。これは我が国初めての方言を中心とした民俗学の著で、世人は、方言学の祖として絶賛した。また滝沢馬琴著の「耽寿漫録」の中には、天明三年（一七八三）卯元日銘による吾山の
打出す 玉かこがねか 初日影
との句が載せられている。こうして俳諧や方言研究で名を馳せた吾山は、天明七年に七〇歳で没し深川の日蓮宗靈巖寺に葬られた。

しかし、靈巖寺は度重なる水災や火災、それに移転などで散逸した墓石も多く、吾山の墓石も失われている。したがって吾山の墓石は越ヶ谷天嶽寺墓所の吾山と妻女の戒名が刻まれた供養墓石（市文化財）だけになった。これには法橋往譽吾山師竹居士とある。

窮民救恤の

稲垣市兵衛

稲垣市兵衛は、瓦曾根村の世襲名主中村彦左衛門重梁の第三子で明和五年（一七六八）の生まれ、幸次郎と称された。寛政二年（一七九〇）二十三歳のとき、江戸浅草福富町の豪商二代目池田屋稲垣市兵衛に請われて長女「こん」の婿養子に入ったが、養父吉兵衛は翌三年病没、中村幸次郎が三代目を継いで池田屋市兵衛を襲名した。この池田屋は享保元年（一七一六）、江戸浅草に移住してかりそめの店を開いたが、追々繁昌をきわめ両替商・質屋・

娘の多勢子が国学者村田春海の養女となり、春海や橘千蔭、さらに平田篤胤などの交友関係にあった影響によつたとみられている。こうして荒陽は文化十一年には、平田篤胤の門人に名をつらね、神道の国学の研究に没頭、篤胤の利根川伝導紀行には篤胤に随行「かく島日記」の歌集などを著していた。その後、荒陽は金銭上のもつれから篤胤と絶交、賀茂真淵の親友と称して、なお国学に精進した。

この間荒陽は四十二種にわたる書冊を著したが、このうち半数は漢文の儒学書、半数は国学神道の随筆書、このほか、俳諧・狂歌・和歌などもよくたしなんでいた。うち和歌では「妹とわれ うえし撫子花はさけど ひとりし見れば おもひかねつも “われもはや うきねの花の浮ぬはな うきくさながら 根はたえずけれ” などの歌を残している。また、荒陽のいやいとこにあたる浅草福富町の稲垣宗輔が、天保七年（一八三六）の飢饉の際、浅草猿屋町御貸付金に預けておいた預金を下ろして、瓦曾根村の窮民を救ったことに對し、その顕彰文と歌を寄せていた。その歌は「こがねより しるがねよりもなさけある ひとこそは世のたからなりけり」と詠んでいた。この荒陽は天保九年二月、八十九歳の長寿を保つて没し、本所牛島の長命寺に葬られた。なおその子には著名な歌人村田多勢子や繪師範渡辺彌などがいる。

酒商その他もろもろの品々を手広く商うようになり、江戸でも指折の豪商として知られるようになった。しかし、池田屋は豪商とは言え、江戸地付の住民でなかつたので、身分上は地借身分であった。池田屋の三代目を継いだ市兵衛は、先代以来の念願である地主身分獲得を目ざし、文化三年（一八〇六）家業の繁昌は御国恩によるものとして金五〇〇両を、同十年には金二〇〇両を町奉行小田切土佐守役所に上納、さらに毎年金五〇両を永年上納することを願っていた。

その上で文化十四年には金三〇〇両の献金とともに、宝暦七年（一七五七）より所有した浅草新旅籠町二六八坪余の屋敷地を献納するので、福富町三〇〇余坪の屋敷地を払い下げてほしいと願い出た。これに對し町年寄榊屋吉五郎らも「市兵衛儀は別して恩奉公に励む奇特な者である。御褒美とし特別な計らいをもつて、福富町の屋敷地を払い下げてほしい」と願い出た。町奉行も理解を示したが、市兵衛の屋敷地は浅草御蔵役人の拝領地の一つであったため、勘定奉行は難色を示し、献納金と新旅籠町の屋敷地上納は許可されなかった。それでもさまざまな方法で市兵衛は屋敷地の払い下げを働きかけたが、無駄であった。このように地主と地借の身分差は大きかったのである。

このなかで市兵衛は実家瓦曾根村の中村重梁の遺志を受継ぎ、文政九年（一八二六）金一〇〇両を凶年の備金として浅草の幕府御貸付所に預金した。この預金は天保七年（一八三六）の冷害による大凶作のとき、市兵衛は中村彦左衛門と相談の上、九十二両を払い下げ、瓦曾根村

俳諧師で方言字の祖でもある

越谷吾山

越谷吾山は定かでないが、享保二年（一七一七）、越ヶ谷宿草創の旧家会田出羽の一族で越ヶ谷新町の西名主会田四郎兵衛家に生まれ、文之助と名付けられたと伝えられている。幼年より学問を好んだが、成長後は特に松尾芭蕉の蕉風復活運動に共鳴、吾山と号して俳諧道に精通、近郷近在の著名な俳諧師と交流して親交を重ねた。うち元文五年（一七四〇）、吾山三十三歳の秋には、騎西の俳諧師桑落庵主人一同を招いてもてなし、新町の鎮守八幡社で句会を開いている。このときの吾山は

名月や うつむく物は 稲ばかり
初汐や 松にかわうそ 鶴の足

との句を詠んでいる。こうして名の知れた俳諧師を吾山亭に招いて句会を催すとともに、各地の大句会に進んで出席している。うち寛保三年（一七四三）の深川長慶寺での芭蕉五〇回忌発句会や鎌倉光明寺の「十夜会」に参加してそれぞれ句を詠んでいる。このなかで越ヶ谷の句会では、

ひとつるべ 水のひかるや けさの秋
との名句を詠んでいる（天嶽寺境内にこの句碑が建てられている）。寛保四年には佐久間柳居の門人に名を連ね、俳人としての位置を確立させていた。こうして吾山は家業を省みず、俳諧や学問に熱中したため、家計は傾き、家を破産させるに

の窮民九十二人に金一両宛を施金してこれを救った。なお市兵衛は天保六年、隠居して成斎と称したが、瓦曾根蓮院の地続き慈悲山最勝院、通称観音堂境内地内二九坪を永代借地、ここに稲垣成斎瘞齒の碑を建立、天保八年、六十八歳で没した。やはり故郷の地は忘れられなかつたといえる。

越谷の剣豪

中村万五郎有道軒

武家は武士のたしなみとして、幼時より剣道に心掛けたが、幕末期になると、勘当帳外で戸籍から除かれた無宿者や、金銭を強奪する無頼漢が横行するようになり、治安の乱れが進んだ。そこで百姓町人も生命財産を護るため剣術道場に通って剣道を身につけ、脇差をさして旅に出たり、村や町を出歩くようになった。ことに尊王攘夷・佐幕開国両派が激突するようになると、百姓町人も一旗あげようとして、どこの剣術道場も門前市をなす盛況状態が続いた。

このなかで剣豪としてその名が知られた一人に、大相模郷東方村（現在の大成町）の中村万五郎を挙げることができる。中村家の遠祖は、武蔵七党野与党の支族、大相模を支配した大相模次郎能高と伝える。中村家は連綿としてその家系を維持し、江戸期には世襲名主を勤めた家柄、その館跡敷地内は約六千坪、この敷地内の祠からは、中村氏祖先が造塔したという文和三年（一三五四）正月銘の六字名



号板石塔婆（市文化財）、応永二十年（一四一三）九月銘の弥陀一尊板碑など、数基の板碑が確認されている。

さて剣豪とうたわれた中村万五郎は、政敏と称し天明四年（一七八四）の生まれ、幼時より剣道を志し、成人後上清久村（現在の久喜市）の神道無念流戸賀崎知道軒暉芳の門下生として、一時は戸賀崎道場に住込み剣道に精進、またたく間に頭角を顕わし二代目戸賀崎有道軒胤芳の代には師範代に昇格、上清久と江戸麹町戸賀崎道場をかけもちで子弟の養成にあたった。このなかで文化十五年（一八一八）その師戸賀崎有道軒は病氣にかかり臨終を迎えた。このとき有道軒は、その子芳栄が若年の身として、万五郎に有道軒の称号を負わせて、戸賀崎道場三代目の後見人とした。万五郎は、上清久と江戸麹町の道場経営に専念していたが、芳栄が免許皆伝に上達したのを機会に、戸賀崎道場の経営を芳栄に返上、故郷東方村に、道場を開くべく、再び諸国武者修業に旅に出た。この諸国遍歴中一度も

試合に負けたことはなかったという。

その後、東方の実家に戻り、屋敷内に道場を設けたところ、門前市をなす盛況で、その門人は一千余人を数え、奥伝を授けた高弟は数十人に達した。このなかには田代義武など著名な剣道家が名をつらねており、有道軒万五郎の名は広く知れわたっていた。こうして万五郎は万延元年（一八六〇）三月、七十七歳の長寿を保って没した。よって高弟一四七名は、西方大聖寺境内に、大槻磐溪撰文による、壮大な「有道軒先生碑」を建立してその遺徳を讃えた。この自然石による碑の高さは二メートル、幅は一・七メートルに及んでいる。

なお六千坪の中村家屋敷地は、都市化の波で一部住宅地に開放されたが、構堀の遺跡がその規模を偲ばせている。また館跡敷地内の祠脇に祀られていた数基の板碑は、中村家の墓所である桜堂墓地に移されている。

日本一の力持ち

三ノ宮卯之助

卯之助は、文化四年（一八〇七）に三野宮村の農家に生まれ、四十八歳で亡くなったとされている。後に「日本一の力持ち」となる卯之助だが、少年のころは虚弱体質で村の相撲や力持ち大会では、「力なし」「弱虫」などと馬鹿にされていた。しかし、奮起して夜間や人目のつかないところで猛練習に励み、十五歳になるころには、村一番の力持ちになってい



た。ある日、家の近くを流れる元荒川で米俵を積んだ舟が浅瀬に乗り上げ、船頭や村人が舟を押しても引いても動かないときに卯之助が舟の下に潜り両手両足で舟を持ち上げて少しずつ深みへ押し返し、舟を浅瀬に離した。この一件が元荒川沿い一帯に伝わり、岩槻・長宮の力持ち肥田文八の弟子となり力持修行に励んだといわれている。

越ヶ谷の久伊豆神社では、本殿右側の生垣の中の台座上に卵型の力石が大事に飾られ、注連縄が巻かれている。その石には「奉納 五十貫目 天保二辛卯年四月吉日 三野宮卯之助持之 本町 會田権四郎」と刻まれている。卯之助が、天保二年（一八三一）に、この五十貫（一八七キログラム）の石を持ち上げ、越ヶ谷本町の會田権四郎が記念に奉納したといわれている。また、この日の催しは、江戸で大評判となった卯之助の凱旋興業のようなもので、多くの観衆と奉納金が集まったのではないかと推測されている。

越ヶ谷が世界に誇る美術家

斎藤豊作

明治十三年（一八六八）に当時の大相模村大字西方に生まれる。生家は、天保九年（一八三八）創業の醤油・味噌醸造業の名主で旧家。

越ヶ谷順正会旗揚げに尽力

高橋正義

越谷市役所敷地内に、「相扶共済」の碑が建てられている。この碑文の中で国民健康保険の発祥の地なりと讃えられているのは、相互扶助を目的として成立した「越ヶ谷順正会」を指したものである。

昭和四年（一九二九）、日本の農村部に大打撃を与えた世界恐慌は、そのまま都市部の不況につながり、そして商業都市越ヶ谷町でも商家の倒産が相次いだ。越ヶ谷町では税収の落ち込み、滞納者の急増などにより、財政は極度にひっ迫していた。「町の財政の立て直しは町税の完納から」と考えた町有志は納税組合を結成し滞納の一掃を図った。

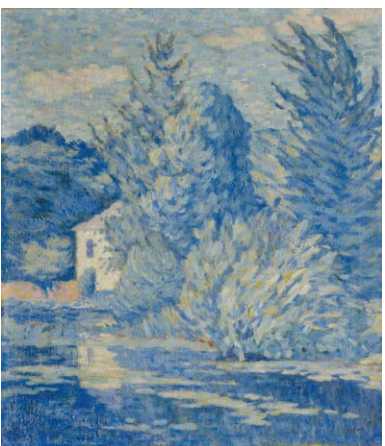
その後、納税組合員は「至誠会」という無尽講を設立し、ここで得られた流動資金を利用し、生活困窮者の救済を目的とした医療共済を計画した。滞納の原因が疾病によるものが多かったからである。無尽講ができて三年目にあたる昭和十年には、至誠会の流動資金は一三〇〇円に達し、有志一同はこの資金を罹病者の医療救助に充てた。これが「順正会」の発端である。

この計画に基づき役員は、町有診療所を共済医療機関にあてるため、埼玉県に働きかけるとともに、地元高橋正義医師の協力を求めた。高橋医師は、日本医師会の了解を求め、さらに地元医師会に了解を求め、以後の援助を懇請した。

昭和十年四月、町有の旧高橋診療所の建物を譲り受けて改造し、さらに医療器具等の整備を実施した。そして、県の正式な認可を得るために、納税組合を母体としての順正会の仮役員を選出し、その事業計画書と目論見書を提出したが法人組織になってないこと、資金が不安定なことを理由に認可は見送られた。そこで、資金確保のために会員制を採用し、会員の募集に着手したが、警察はこれを治安維持法に触れるとして中止を命じた。

県や警察の反対により、この順正会の活動は行き詰まっていた。その頃、偶然高橋医師の友人杉本氏の紹介により順正会の事業計画書を内務省に示し、意見を求めることができた。この順正会の計画が、当時内務省が立案していた国民健康保険の構想と類似していることが分ると内務省の好意により参考資料や規則書雛形などの提供を受けることができたのである。

内務省の協力を得た順正会のメンバーは、県や警察、町役場に設立の運動を起すが、同意は得られなかった。しかも、越ヶ谷町の医師団も医療費支弁の保証や



「風景」

明治二十三年三月、大相模尋常小学校を優等で卒業した豊作は、父孫兵衛の二歳違いの姉ヨ子の養子として東京日本橋區亀島町へ転住し、旧制開成中学へ入学。明治三〇年、父孫兵衛が死去したが、明治三十二年東京美術学校（現在の東京芸術大学）に入学。同級に青木繁などが居た。

卒業後の明治三十九年に渡仏。パリ近郊に居り、冬は英国の田舎で制作。晩年の約三年間は、パリ西南のブルターニュで過ごしたという。

明治四十五年、新印象派の画風を習得、帰国後は東京小石川區小日向台町に居を構え、第一回光風会展に滞欧作「初冬」ほか四点を出品した。その秋の第六回文展には「秋の色」を初出品、大正二年（一九一三）、秋の第七回文展に「落葉かき」と「夕映の流れ」の二点を出品、見事褒状を受賞。「夕映の流れ」は豊作の代表作として現在、東京国立近代美術館に遺されている。

以後、大正三年、文展洋画部門に第二科を設ける運動が激化。要求が当局に受



「相扶共済」の碑

責任の所在をめぐって順正会設立の反対にまわった。こうして、高橋医師を含む順正会発起人は苦境に立たされた。

しかしながら昭和十年十二月、医師団の強固なる反対を押し切って、発起人九名で越ヶ谷教会で発会式が挙行され、役員が選出された。昭和十一年四月、内務省技官らの斡旋で医師団との協定が成立、その名を「越ヶ谷順正会」と改め、高橋医師は相談役に推薦される。同年十一月、事務所を開設した時には加入会員は四八八世帯となっており、会員は増大の一途を辿った。これが国民健康保険発祥の地といわれる所以である。

日本の植物分類学の権威

おおいじさぶろう

大井次三郎

大井次三郎は、昭和四十六年（一九七二）度の朝日賞を受賞した。理由は「日本植物誌」の完成に至る植物分類学への貢献である。

越谷には昭和二十一年（一九四六）から二十七年まで住んでいた。大沢四丁目現在の越谷郵便局の斜め向かいあたりである。

ここから国立博物館に通っていた。そして本格的に植物誌作りに取り組んだのだ。

植物の研究は京都大学でイネとスゲの魅力に取りつかれて深入りすることになる。スゲは一つの属で二百余种もあり、しかも、よく似ているので分類が難しい。これも見事にやってのけ、三百種近くあるイネも初めて分類した。

昭和十八年、陸軍軍属としてジャワのポゴール植物園に送られた。ここは当時のオランダが誇る東洋一の植物園で、日本にはない膨大な資料があった。

このポゴールでの研究が、大井次三郎に日本の植物分類学大成への道を開いた。しかし、昭和二十年の終戦、身一つで日本へ引き揚げて来た。そして、兄の住んでいた越谷の大沢に身を落ち着かせることとなったのである。ほどなく、京都に住んでいた家族も越谷に来ることとなり、やっと一家団らの生活を取り戻した。

紙も満足にない時代だったので、標準ラベルや便せんの裏側を原稿用紙代わりに使ったり大変な苦勞をした。今では考えられない物の貴重な戦後の一時期であった。

これまで日本の植物を分類した本は少なくない。日本は南北に長く、雨が多い



「日本植物誌」

話をし、その緊張の中で感情を面と同化してから演ずるのだという。そうしないと、静止のなかで人生の烈しい葛藤を表現することなどできないというのである。

顔研究の文化人・画家（歯科医師）

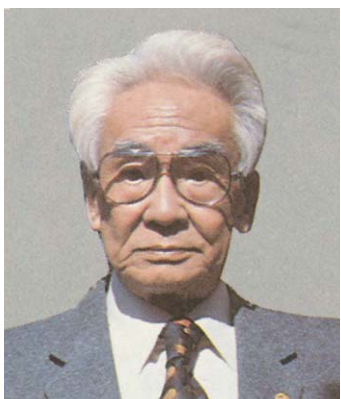
やまざき

山崎清

きよし

山崎清は特に晩年、フランス仕込みの人生の達人として、奔放・闊達にさまざまなメディアに登場した。また油彩の腕前も、文化人の手慰めの域を遥かに越えて、天来の抽象画家であった。越ヶ谷の国定教科書販売店「協立舎」主、山崎恭輔氏の子として明治三十四年（一九〇二）に生まれ、旧制の柏壁中学校を経て、日本歯科医学専門学校に学び、卒業後、パリに留学、歯科の学校で研鑽を積んだ。当時のパリはファッションの台頭を前にした新しい思潮の渦があつたようだ。ここで山崎清は絵画の魅力に心奪われ、洋画家児島善三郎の知遇を得て腕前を磨いた。パリで、フランス人女性スザンナさんと結婚、長女マルトさんが生まれる。この間に、歯科の学校を卒業し、さらに国立の人類学の学校をも卒業している。山崎の後の幅広い教養は、この学校での学習や経験が生かされたのであろう。

二十九歳のとき帰国、母校の日本歯科医学専門学校の教壇に立ち、昭和三十三年（一九五八）、口腔外科の教授を担当した。日本歯科医学専門学校を退職後は、鶴見大学歯学部教壇に立った。周知のように、山崎清は、歯の治療学のほかに、



顔や骨相の研究に、存分な学識を示した。好著「顔の研究」はベストセラーとして人口に膾炙している。最晩年は五十年の歯科の生活を終え、絵画に没頭したが、昭和六十年に永眠した。

越谷市教育委員会発行の「川のあるまち」の創刊号の表紙は、山崎画伯の「宮前橋の夕景色」と題する油彩で飾られていて、豊かな色彩に暮れていく川の沈黙の表情が印象的である。

付記として、越谷市職員のインタビューに答えた山崎清の懐かしい言葉を紹介しておく。「越谷近郊を歩いていると、右を向いても左を向いても、絵になる風景ばかりです。むろん越谷八景（中村不折）といわれた昔の面影はなくなっています。それでも、緑と水と雑木林、土手や畑など、懐かしい風景はいっぱいあります。私は、これらを死ぬまで描き続けていたのです。私の心の風景として」

「私は水の流れを見ているのが好きです。それは川べりで、じっと水の流れを見ているのが、故郷の元荒川や古利根のような静かな流れがいいのです。メコンでもセーヌの橋の下でも夜中の水の流れを見ていました」

ので、植物の種類は豊富である。だが、そのどれもが、植物全般の分類にまではいたらなかった。いわば、内容が玉石混交だったのである。

その中で、四千二百種をまとめた「日本植物誌」（顕花植物編）の初版が出たのが、昭和二十八年。日本の植物が初めて集大成された年と言われる。

昭和三十二年には四百種余りにわたるシダ編を出し、昭和四十年には顕花植物編を書き直して改訂出版。これが米国で出版され、欧米でも日本植物の決定版となった。

こうして一人で書き上げた「日本植物誌」は、厚さ十センチあまり。その量もさることながら、質の高さは、内外から惜しみない評価を得たのである。

昭和四十五年に科学博物館を退官し、昭和五十二年に没した。

絶対を問いつづけた能楽師

せきねなおたか

関根直孝

関根直孝は明治四十二年（一九〇九）に蒲生村登戸の旧家に生まれた。十八歳のとき、能の世界へ入り、大正、昭和と戦乱や復興の時代の長い歳月を、能楽一筋に歩き通した達人である。関根直孝の能楽は、観世流である。ひたむきな求道と、厳しい修行によって体得した関根直孝の芸域は、夢幻的・神秘的と評されるに至った。越谷を始め、西新井や渋谷の松壽の仕事場で多くの弟子を育てた。

晩年の関根直孝の芸道はまさに宗教的

窮民を救った農地解放

せきねそうすけ

関根宗輔

大正期（一九一二～一九二六）は大正デモクラシーと称され、人道主義的風潮の昂揚期で、都会を中心に民主的、進歩的な世評が広がっていた。一方、農村では定着した地主制のもとで実際に農事に携わる小作人層の立場は厳しいもので、そのほとんどは困窮にあえぐ日常で「水呑」と称されていた。ことに、大正四年（一九一五）産米の質的向上や俵装における二重俵などを義務づけ、一等・二等の等級が付けられた米穀検査制度の実施により、小作人層の負担は一層重くなった。しかも当時の農村経済は慢性的な不況下で農業不振は悪化の一途をたどっていた。

この中で大正七年、シベリア出兵に端を発した米価暴騰に米の廉売を求めた米騒動が発生、社会問題ともなつて米価は暴落、小作人層の困窮に拍車がかけられた。よつて小作人層は生活防衛のため小作料の引下げを求めて地主と抗争、小作争議が頻発するようになった。これに対し、埼玉県では小作料の軽減、奨励米や俵装料の増額、金融上の便宜を図るよう通達したが、地主層の反感が強く、実現を見なかつた。こうして小作争議は一層激化した。越谷地域でも大正九年から十年にかけての争議件数は増大の一途をたどった。

このうち南埼玉郡で頻発する小作争議については、警察の調査報告によると、



な領域に達して、いって、「奴僕（ぬぼく）として生きる」という不修行者の生き方を弟子たちに説いたという。いうまでもなく、能は舞や謡の技を通してより内面的な抽象美の世界を開いていくもので、そのことを関根直孝は、次のように語っている。

「謡を研究しないで、舞だけを研究してもだめです。その謡も、文学として完成されたものだから、古典文学の素養というか、これもまた勉強しないと理解できません。謡と舞の両方に立って研究するのだから、究めるには長い年月がかかります。そして初めて、大輪の花を咲かせることができます」

関根直孝の芸道の深さをよく物語っている。さらに次のようにも語っている。「要するに、絶対を問う、ということなんです。道にはいろいろな道があります。しかし、究めていけば、すべてひとつの道につながるんですね」能を舞うときの関根直孝は無我の境地に立ち、能面と対

東京市（当時）で開業の弁護士古島義英は都内各地に出没、小作人を煽動して組合を作らせるなど、争議を助成しているなどと書き立てていた。この中で増林村上組の関根宗輔は人道的な見地から、大正十一年、小作地四十余町歩のうち、田畑十一町歩を自発的に小作者へ譲渡していた。これに対する警察の報告では、関根宗輔は居村近辺の名望家で数十万財の資産家だが、本人は現在の社会状況を大観し、労働者や小作人が各所で争議を起こしているのは労使所得の不公平から生じるものにして、これを憂慮したものである。この譲渡価格は時価より三割以上低い一反歩当たり平均七百元、畑は同五百円、代金は米穀収穫後の後払い。中には三カ年賦としたものもある。この小作地を解放したのは、小作問題に関しては、地主のとるべき対策として小作地を譲渡するのが、もつとも適切な処置であると熟慮した結果ならん、これに対する世評は、小作人はもちろん自作農とても、関根宗輔は自覚した珍しい地主であり、全ての農民が非常に喜んでいて、との旨がその報告書に述べられている。

ちなみに、この関根家の遠祖は、天正元年（一五七三）、織田信長に滅ぼされた越前国の領主、浅倉義景の一族で増林に逃げのび、新田を開発して、この地に土着したと伝えられている。増林の林泉寺墓所には巨大な二基の五輪塔が建立され、その銘には、かすれて判読しがたいが、浅倉に関する由緒が刻まれている。

祖父と戦争

千間台中2年 千田 菜の子
ちだ なのこ

戦争、それはとてつもなく大きな戦い。何千万以上の罪のない人々が命を落とし、誰なのかわからないぐらいに体や心をズタズタに引き裂きます。

私の祖父は、広島原爆を、体験しています。祖父は、私の母と母の姉、私にも、その時の話をしようとはしません。

そして、私達の方からも聞くことができないのです。もし、私が祖父に戦争について聞いたら、どんな顔をするでしょうか。祖父の話す顔を想像してみると、いつも私は怖くなります。

目の前に映る赤い海に祖父は何を思ったのか。突然の出来事に対してどう考えたのか。沢山の命が消えていくのを、どんな顔を見ていたのか。どれも私は、そして母も知りません。ただ、知っていることは、原爆がおきた時、祖父がどうしていたかということ。祖父は、その時友人の家へ行く所だったそうです。その時、何の予告もなく、原爆が落とされたのです。祖父の友人の母親が、急いで家へと入れてくれたおかげで、祖父は無傷だったそうです。しかし、この話は祖父からは聞いていません。私の母が話をしてくれました。

戦争というものが、どのようなものか、私には分かりません。けれど、優しい祖父が戦争について話さないのだから、とてつもなく恐ろしいものだということは感じる事ができます。

つと私は途中で逃げ出してしまっていたと思います。支えてくれて、しかも私を変えてくれたのは友達です。本当に感謝しているし、皆が大好きです。信じられる、頼りになる存在が近くにいるというのは幸せすぎるのだと思っています。

自分は、たくさん支えられているけれど、逆に私は、友達にとつて信じられる、頼りになる存在になっているのでしょうか。そう思っています。素直に私は嬉しいです。私を信じてくれる人がいるならば、私は、その人達のことを絶対裏切りません。

中学生の今、出逢った友達、それは私の人生の中でとても大きな財産になると思っています。同じクラスの仲間、同じ部活の仲間、同じ委員会の仲間、人生の中で出逢える人は限られています。そんな中で、この仲間と出逢えたのは奇跡なのかもしれません。奇跡だとしたら、すごいことです。出逢えたことに感謝したいと思います。皆がいるから、今の私は成り立っているのです。今の私だけではなく、きつと十年後になっても、友達に支えられているのに変わりはないと思います。いつになっても私には友達が必要です。

十年後、二十年後の未来の私へ
今、あなたは友達を大切にしていますか。友達に支えられているということ、忘れてはいませんか。昔、出逢った友達との思い出、覚えてはいますか。あなたは、今日まで何人も友達に支えられてきたはず。そんな皆を裏切るな

何も体験していない私達は、ただこの先の平和を願うことしかできません。私には、過去へと行く能力も、戦争を止める力もありません。黙る祖父の姿を見て、奥歯をギリと咬む私の姿が、たまにうかんできます。よく考えれば、私自身も、祖父に戦争というものを聞こうとしたことはないのです。祖父に戦争の真実を聞こうと思ったことが、まったくありません。

こんな言い方をしては、とてつもなく失礼な気がします。私にとつて、戦争は、ささいな食い違いで、沢山の人々が命を落としてしまうという、無責任で、自己中心的な戦いでしょうか。ええ。そんな戦いで、何の罪もなく、幸せに暮らしていた人達をメチャクチャにして、そんなことで良いわけがありません。大切な人を守れず、犠牲ばかりの戦いなんて、ただ虚しく、どうしようもないのではないのでしょうか。

何のために戦って、何のために死ぬのか。私の考えでは、どうしようもないということしか思えないのです。争いなんて、本当にくだらないことしか思えません。

だからこそ、私は祖父が、今、この世に生きていけることが、私に笑いかけてくれることが、私をとてつもなく大切に思ってくれていることが、そういう一つ一つのことが、とてつもないのです。『生きていてくれて、ありがとう。』そういうのも思います。もし、祖父がこの世に今、いなかったら、母も私も母の姉もこの世にはいません。

私は、この世界に生きる全ての人達が、心から笑っていられることが、本当の意味での平和です。
んてことは絶対しないと約束して下さい。そうすれば、今、あなたの近くにいる友達もきつとあなたを裏切ったりなんてしなはずです。そして、その友達を信じて下さい。そうすれば、友達もあなたを信じてくれると思います。私は、未来の自分が、友達を愛し、大切にす、立派な大人になっていることを信じ、今出来ることを、未来に向かって精一杯やっつけていこうと思います。

夢を追い求める

平方中3年 山崎 達哉
やまざき たつや

将来の夢を聞かれてあなたは何と答えますか。まだ決まっていなくてと答える人も多いと思います。ですが、夢は尊い物であり、それを糧にして生きているの気力とするものでもあると思います。だから、夢を持つことは前向きに生きることだと思ふのです。

半年ぐらい前、寒い冬の中、私は母と二人歩いていました。すると、段差が上れない、車イスに乗った人と、それを押している人がいました。母はその姿を見たと同時に、すぐに手助けにきました。私が手助けしようか迷っているときでした。私は素直にすごいと思いました。それと同時に迷っていた自分が馬鹿らしく思えました。自分が少しの力を割くだけで、助かる人がいるのだから。

私は今度から同じような場面に出くわした場

のではないかと考えます。そして、私はいつの日か、この世界が、沢山の笑顔であふれることを、地球という星が、幸せな星になれるように、願っていききたいと思ふいます。

未来の自分へ

中央中3年 本田 杏菜
ほんだ あんな

十年後の私は、どこで何をしているのだろうか、最近よく思うようになりました。しかし、未来の自分の姿は、今の自分には分かりませんが、未来の自分がどうなっているのかは、今の自分次第だと思います。

今の私は、とても充実した中学校生活を送っています。学校生活には楽しいこともあれば、悲しいこともあります。色々なことがあります。嬉しいときやつらいときに共通して言えることがあります。それは、まわりで支えてくれる友達がいるということです。一緒に笑ったり、一緒に泣いたり、一緒にぶざけたり、一緒に悩んだり。そんな友達が私のそばにいてくれます。私は中学に入学してから、中央委員という、クラスや学年をまとめる委員会に入っています。いつもいつもうまくいかず、皆をまとめるといふことは、とても大変なことだと改めて感じ、もう自分には出来ない、私は何度も落ち込んでしまうことがありました。しかし、今まで諦めず精一杯やっつけてくる事が出来ました。もし私に、友達という存在がいなかったら、き

合迷わず手助けしようと心に決めました。そして、将来、人を助けられるようになりたいと思ふいました。これが私の夢です。私はこの夢を叶えるために今、一生懸命頑張っています。そして、その夢は私に希望を与えてくれます。

将来の夢ときくと職業を思いがちですが、別に、職業に限った話でもないと思ふのです。きつと、将来の自分に重ねるものとして職業が一番重ねやすいのではないかと思ふます。私はそうは思わないのですが、野球選手とかは夢があつていいですが今の私たちの年では、そんなことをいう人はあまりいません。もつと小さかつたころはそうではありませんでした。きつと心身ともに成長して大人になり現実的になつたのでしょうか。少しさびしい気もします。正義の味方なんて言う人はいなくなりました。私はとてもよい夢だと思いますが、私はなれるもんなら正義の味方になりたいと思ふます。正義の味方は人を助けることができるのだから。

最後に、将来の夢をもつことは簡単なことではないと思ふます。だからこそ、じっくり考えて自分がやりたいこと、職業にかかわらず、胸をはれるような将来の夢をみんなにもつてもらいたいと思ふます。



蒲生南小 2年 鈴木 諒祐

「人間と動物と恐竜が楽しく暮らせる夢のまち越谷です」



東越谷小 2年 高橋 璃央

「未来のショッピングモール。虹の橋をわたってショッピングモールに入ります」



南越谷小 1年 山川 楓太

「未来の越谷も水と緑と太陽のまちになってほしいな」

「未来の越谷～こんなまちになったらいいな～」

みんなが仲良く暮らすまち、笑顔がいっぱいのまち、自然がたくさんあるまち、交通が発達したまち。
次代を担う子どもたちに、「未来の越谷～こんなまちになったらいいな～」をテーマに絵を描いていただきました。
応募いただいた作品は331点。この中から、越谷市制施行50周年記念事業推進市民委員会で審査し、優秀作品30点を選びました。子どもたちが描いた作品をご覧ください。
(順不同・敬称略)



西方小 2年 飯野 菜々実

「かわいい小鳥がたくさん飛んで、きれいな花が咲いている越谷です」



蒲生小 2年 藤本 晴香

「魚や鳥などの生き物と楽しく暮らせるまちです」



川柳小 2年 本間 文音

「未来の越谷は、自分たちの家が大きくなって、買い物ができるビルがあって便利で明るいまちです」



明正小 2年 清水 千夏

「みんなが仲良く楽しく暮らせて、空を自由に飛べる楽しいまちです」



明正小 2年 井上 彩花

「車が飛んで、山から水が流れ、マンションやビルが虹色の楽しいまちです」



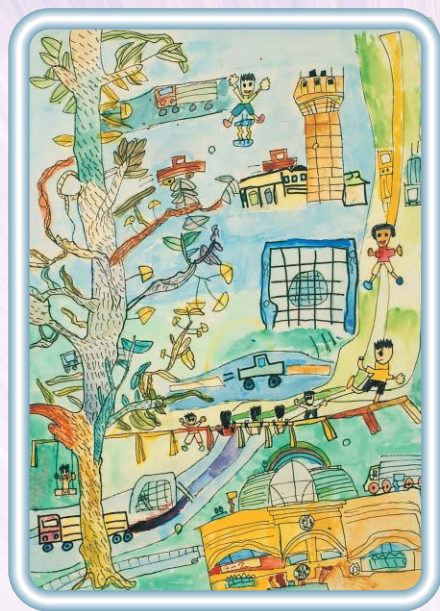
南越谷小 2年 山田 廉

「いろいろな乗り物に乗ってどこでもいけるといいな」



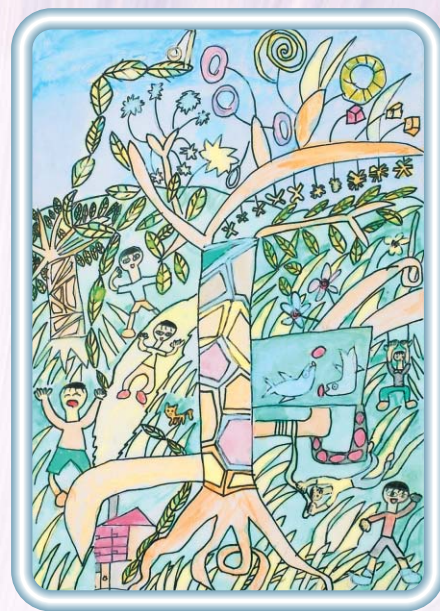
南越谷小 2年 深津 希望

「未来の越谷はきれいな花がいっぱい咲き、笑顔がいっぱいのまちです」



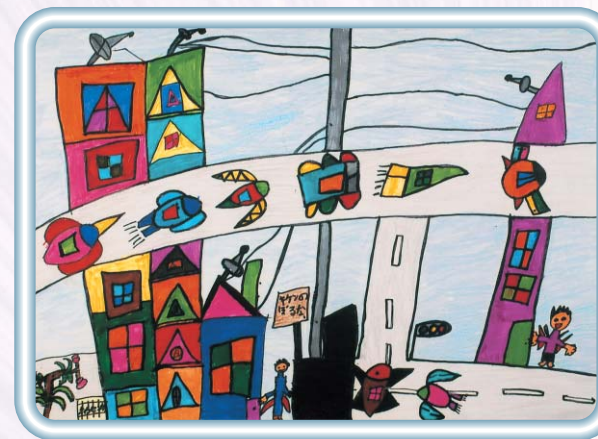
増林小 4年 ^{なかむら} 中村 ^{じゅん} 淳

「人が遊ぶさわやかな木。未来の越谷がにぎやかになるとうれしいな」



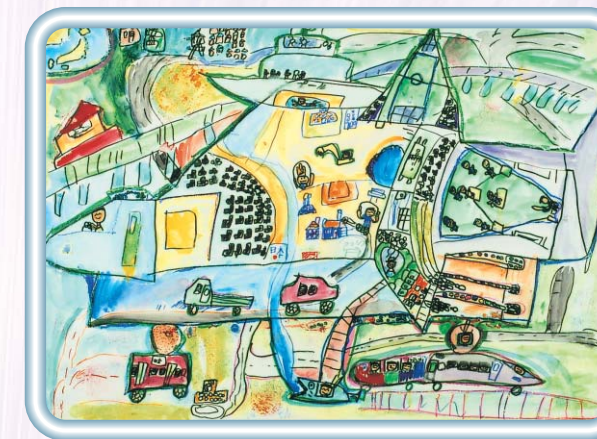
出羽小 4年 ^{ひらかわ} 平川 ^{しゅうこ} 秋胡

「子どもたちがアイデアを出してつくった地球と生き物にやさしいまち。酸素を作り出す木や葉の形の家、うすまき学校、地下のショッピングモールに続く木の根の道路」



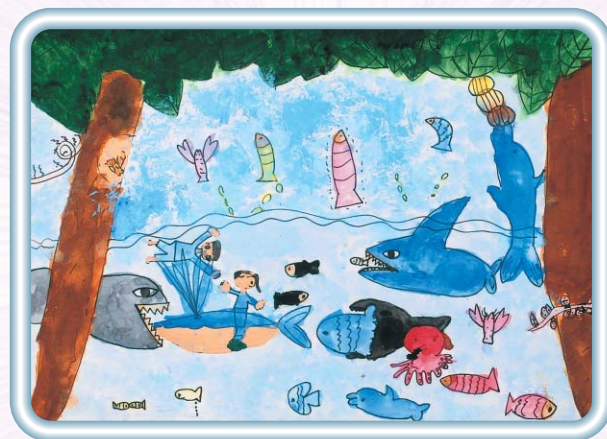
大沢北小 3年 ^{くどう} 工藤 ^{しゅうや} 秀哉

「越谷市の道路は高くなります。僕たちは背中に羽をつけて飛びながら遊びます」



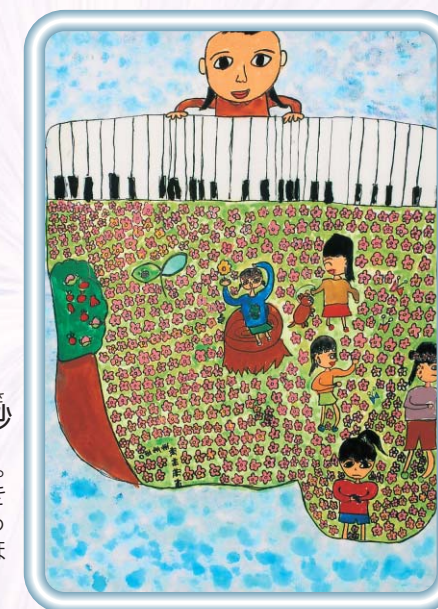
越ヶ谷小 3年 ^{みうら} 三浦 ^{なつき} 夏稀

「未来のスーパーランド飛行機。飛行機の中に車も電車、野球場、サッカー場、温泉、プールなど何でもありの飛行機が越谷にあったらいいな」



平方小 4年 ^{だいたく} 大徳 ^{あかり} 彩里

「越谷に海ができて魚といっしょに遊びたいな。クジラやサメの上に乗ってみたいな」



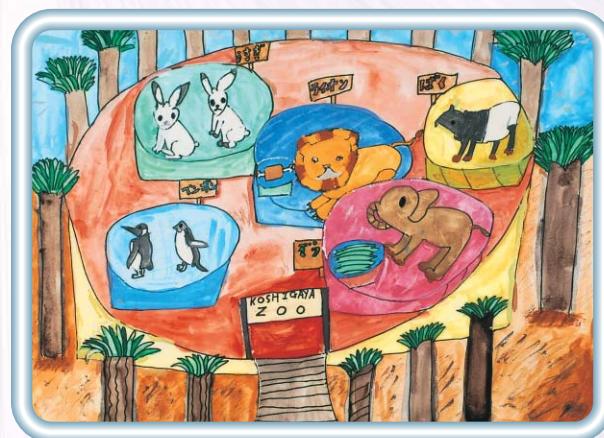
越ヶ谷小 4年 ^{こいで} 小出 ^{りさ} 梨紗

「わたしはピアノが大好き。ピアノの中の花畑が好きな場所です。大人になってもこの花畑があってほしいな」



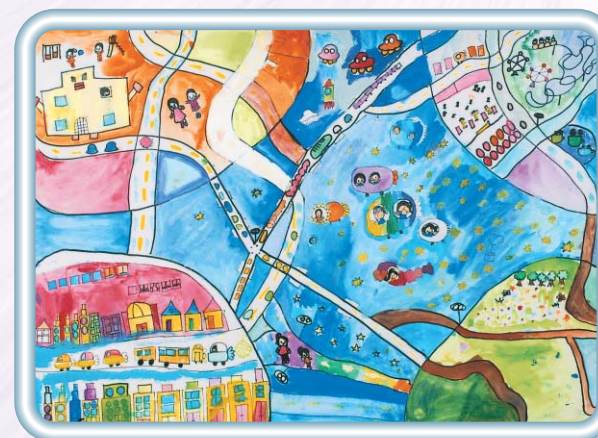
大間野小 4年 ^{すえなが} 末永 ^{ゆいか} 唯花

「車でなくて自分の思った方法で移動できればいいな。カラフルで虹のまち越谷」



弥栄小 4年 ^{はせがわ} 長谷川 ^{さゆ} 沙優

「動物園などみんなが集まる場所ができればいいな」



荻島小 4年 ^{よしだ} 吉田 ^{なな} 奈々

「未来の越谷は自由に行けるトンネルカプセルでつながっています。排気ガスが減ってきれいになった空にはたくさんの星が輝いています」



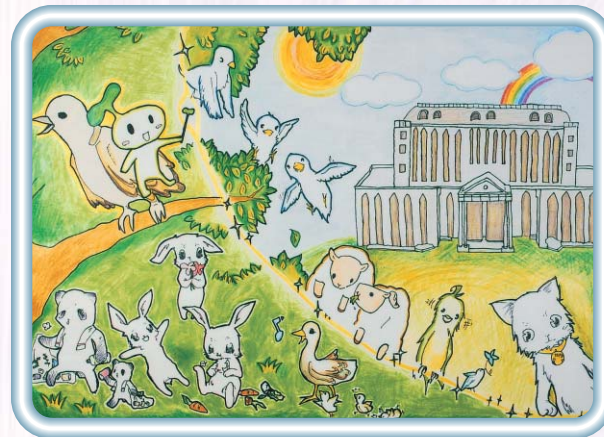
大間野小 4年 ^{たなか} 田中 ^{りかこ} 理香子

「川がいっぱい網の目のように流れて、生き物がすんでいるので鳥が集まります。水と水鳥のまちです」



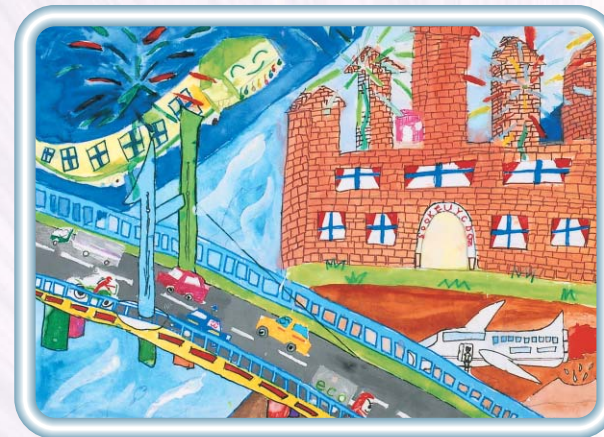
大沢北小 6年 ^{なみき けいすけ} 並木 慧介

「国際交流が盛んな明るいイメージを持ったまちになったらいいな」



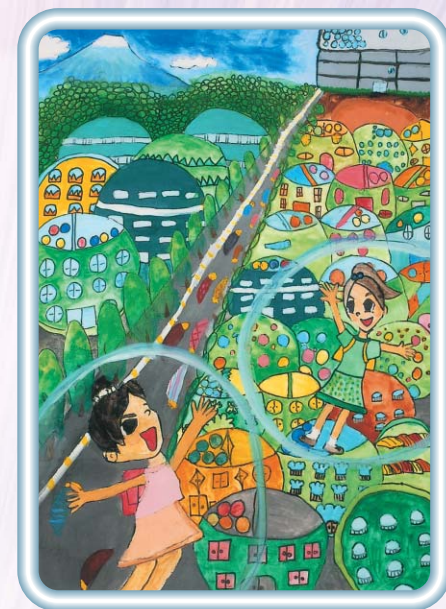
南越谷小 6年 ^{とがわ ゆり} 戸川 優里

「緑あふれる住みよい環境になりますように。動物たちにとってもやさしいまちになるといいな」



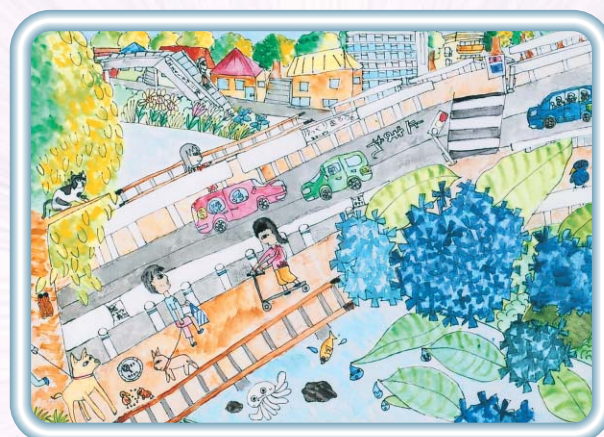
東越谷小 5年 ^{みなかわ けんた} 皆川 健太

「2108年の越谷。水素で走る車や空を電気で走る電車があって、環境にやさしくなっているといいな」



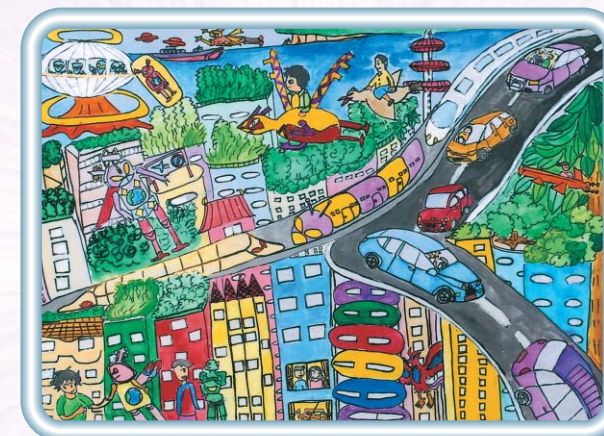
蒲生小 5年 ^{なかしま なつみ} 中島 捺実

「未来の越谷は空気もきれいで富士山が毎日見られます。建物はドーム型でシャボン玉の交通が登場します」



西方小 6年 ^{のむら あやか} 野村 彩華

「未来の越谷は川にいろいろな魚がいて、さまざまな生き物がすんでいるまちです」



北越谷小 6年 ^{やまかわ ゆうき} 山川 優希

「人間もロボットも、そこに生活するすべてが楽しく暮らせるまちにしたいな。地球環境のため建物の屋上にも緑を植えました」



桜井南小 6年 ^{たかはし ここ} 高橋 呼々

「未来のレイクタウン。水と緑と太陽に恵まれたまちです」



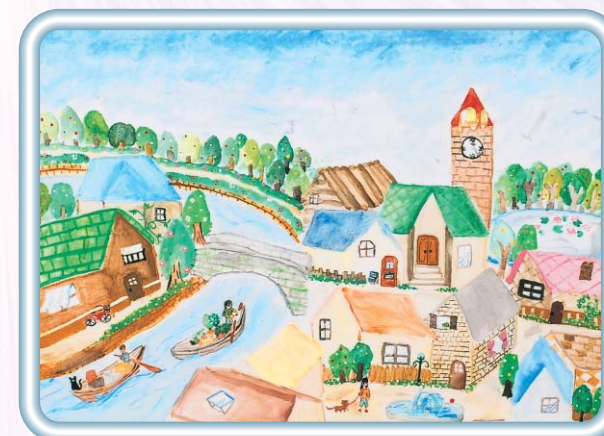
桜井南小 6年 ^{たけした かおり} 竹下 佳織

「未来の越谷は不思議な乗り物でいっぱい。自動で空き缶を拾うロボットもいて環境もよくなります」



増林小 6年 ^{おおかわ なな} 大川 菜名

「大好きな動物が自由に暮らせるまちになってほしいな」



出羽小 6年 ^{おおつか} 大塚 まりな

「緑の山、森、花、そしてきれいな川、人々が仲良く福祉活動が盛んな安全で住みよいまちになってほしいな」

越谷市福祉憲章

わたしたち越谷市民は、生涯にわたって、すこやかに、いきいきと、人間らしく、川の流れるこの豊かなまちに、安心して暮らせることを願っています。

そのためには、個人、家庭、地域、企業、行政などが、しっかりと手をたずさえ、知恵をだしあい、それぞれの役割を自覚し、責任を果たしていかなければなりません。

すべての市民が、ふるさとと実感でき、愛着のもてる福祉のまちをめざして、この憲章を定めます。

ともに生きよう かけがえのない あなたのいのち 明日に向けて みんなでつくろう やさしいまちを
ともにつなげよう あなたのちから わたしの経験 知恵をだしあい みんなで築こう 住みよいまちを
ともにかけあおう ほほえみと 思いやり 手をとりあって みんなで育てよう ふれあいのまちを
ともに高めよう すこやかな こころと体 明るい家庭 みんなで愛そう ふるさとのまちを

平成11年9月15日制定

安全都市宣言

最近における産業、経済、文化の発展と交通量は極度に増加し、交通事故が頻発して大きな社会問題となっている。また火災の発生も文化生活の向上、暖房用火器具類の発達普及に伴って増加の傾向にある。よって全市民とともに安全都市造成の理想を達成するため「安全都市」とすることを宣言する。(抜粋)

昭和37年3月制定

スポーツ・レクリエーション都市宣言

水と緑と太陽に恵まれた私たちのまち、越谷市も急激な開発と人口増加により、美しい自然と生活洋式様式に大きな変化がもたらされました。

私たちは、いつも美しい自然にあふれ、健康で明るく人間性豊かなまち越谷市でありたいと思います。

私たちは、ひとりひとりが生活をとおしてスポーツ・レクリエーションを親しみ、健康でたくましい心とからだをつくるとともに、さらに市民の交流を深め、連帯感に支えられた明るく豊かな住みよいまちを築くことを誓い、次の目標をかかげて越谷市を「スポーツ・レクリエーション都市」とすることをここに宣言します。

- すべての市民がスポーツ・レクリエーションを楽しみましょう。
- すべての市民が力を合わせてスポーツ・レクリエーションのできる場をつくりましょう。
- すべての市民がスポーツ・レクリエーションに進んで参加しましょう。
- すべての市民が身近かにスポーツ・レクリエーションのできる仲間をつくりましょう。

昭和49年9月26日制定

文化都市宣言

清らかな川の流れると豊かな緑、青い空。

昔から水郷こしがやとして親しまれてきた

わたしたちの郷土は、先人達が遺(のこ)してくれた

かけがえのないふるさとである。

わたしたちは、

先人から受け継いだ恵みを守り、はぐくみ、

さらに、人間愛に満ちた

ゆとりと潤いと安らぎのある文化のまちを創(つく)って

次の世代に引き継いでいこう。

みんなで心と力をあわせて、

わがまち越谷 と だれもが誇れるまちづくりをすすめ、

生涯を心豊かに過ごせるような市民生活を築いていこう。

市制25周年にあたり、

越谷市を「文化都市」とすることを宣言する。

昭和58年11月3日制定

平和都市宣言

わがまちは、古くから「水郷こしがや」として親しまれてきた水と緑と太陽に恵まれた美しいまちであります。

そして、このかけがえのない自然と明るく平和な暮らしは、越谷市民すべての願いであります。

わが国は、先の大戦による戦禍にみまわれ、世界で唯一の被爆国として、尊い命や貴重な財産を失ってきました。この戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを後世に伝えていかなければなりません。

わたしたちは、未来に向けて平和で豊かな社会を築き、美しい自然環境を新しい世代に引き継ぐため、人類共通の願いである世界の恒久平和実現を希求し、市制施行50周年を期して、ここに平和都市宣言をいたします。

平成20年11月3日制定

越谷市民憲章

わたくしたちは、越谷市民であることに誇りと責任を持ち、水と緑と太陽に恵まれた豊かなまちを築くため、限らない願いをこめて、ここに市民憲章を定めます。

1. 教養を豊かにし、人間性あふれる文化のまちをつくります。
1. きまりを守り、信じあい心豊かな明るいまちをつくります。
1. 自然を愛し、お互いに助けあい、きれいなまちをつくります。
1. 健康で楽しく働き、明るいスポーツのまちをつくります

昭和53年11月3日制定

第7章

越谷 もの知りページ



市役所の位置

所在地●埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号
経緯度●東経139度47分 北緯35度53分

位置・地勢

越谷市は埼玉県の南東部に位置し、面積は60.31km²(東西8.6km、南北11.5km)。大宮台地と下総台地にはさまれた中川流域の沖積平野にあり、丘陵のない平坦な土地です。

人口・世帯

総人口●322,195人(男●161,508人 女●160,687人)
世帯数●131,723世帯(平成20年10月1日現在)

越谷市子ども憲章

水と緑と太陽に恵まれた越谷市の未来を担うわたしたちは、夢と誇りを持ちみんな仲良く助け合って生きていくことを誓い、ここに「越谷市子ども憲章」を定めます。

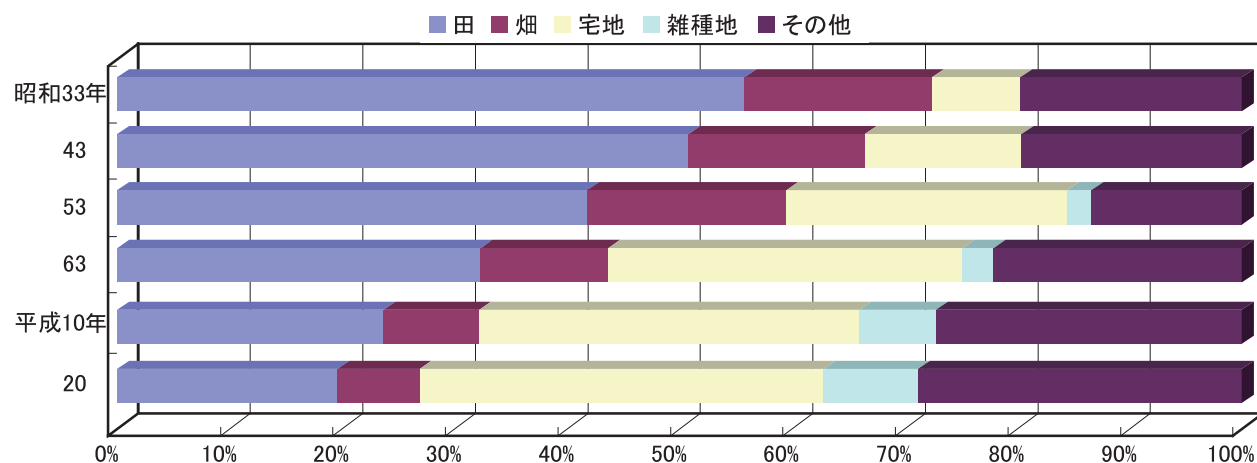
自立 わたしたちは、互いに認め励まし合い、自分の道を歩んでいきます。
責任 わたしたちは、礼儀正しく、きまりを守り、責任を持って行動します。
健康 わたしたちは、生命を大切に、明るく、たくましく生きていきます。
感謝 わたしたちは、思いやりの心と、「ありがとう」の気持ちを持ち続けます。
環境 わたしたちは、自然や文化を大切にし、環境にやさしくします。

平成10年11月3日制定

土地

人口の増加とともに農地割合が低下し、宅地割合が上昇しています。この50年間で農地割合が72%から27%になり、一方、宅地割合が4.6倍と高くなり、平成20年4月現在で約36%を占めています。

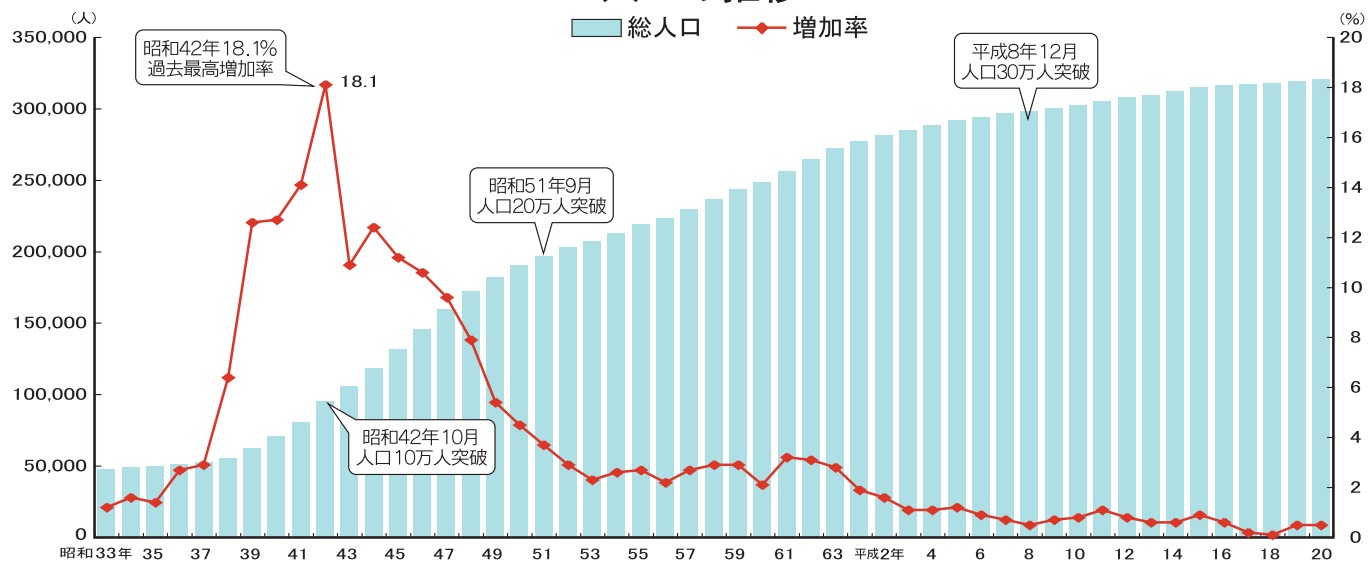
地目別土地面積割合



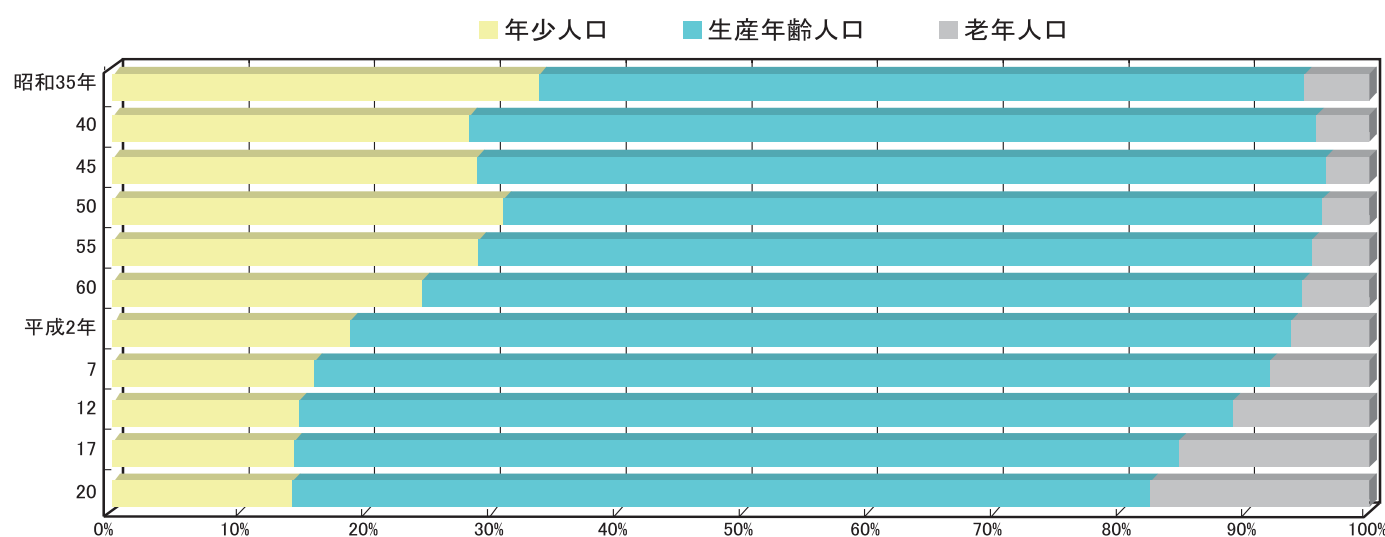
人口

越谷市は、平成8年12月に全国で66番目、県内6番目の30万都市の仲間入りをしました。昭和37年に地下鉄日比谷線が北越谷駅まで相互乗り入れを開始後、人口が急激に上昇し、昭和42年には人口増加率のピークを迎えました。その後、昭和48年まで年間1万人の増加が続き、徐々に緩やかな増加傾向となっています。人口を年齢3区分別にみると昭和55年以降、年少人口（15歳未満）の割合が減少するとともに、老年人口（65歳以上）の割合が上昇しており高齢化が進んでいます。

人口の推移



年齢3区分別人口割合



データからみた越谷市の推移

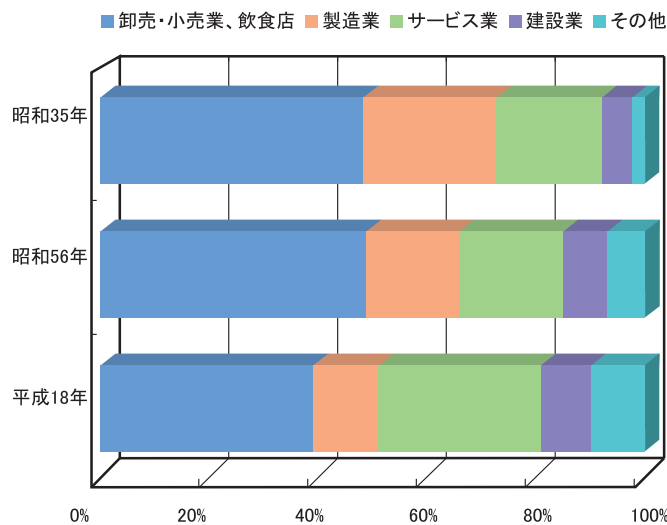
項目	年代	昭和33年	昭和43年	昭和53年	昭和63年	平成10年	平成20年
人口 (4月1日現在)		48,048人	105,492人	207,575人	271,964人	302,368人	320,802人
世帯 (4月1日現在)		8,342世帯	26,803世帯	59,486世帯	85,258世帯	108,239世帯	130,392世帯
人口密度 (4月1日現在)		796人/Km ²	1,766人/Km ²	3,475人/Km ²	4,553人/Km ²	5,014人/Km ²	5,319人/Km ²
1世帯当り人員 (4月1日現在)		5.8人	3.9人	3.5人	3.2人	2.8人	2.5人
1日当り出生数		2.77人	8.85人	9.90人	7.85人	8.70人	7.98人 (19年中)
1日当り死亡数		1.18人	1.34人	2.13人	2.98人	3.99人	5.72人 (19年中)
1日当り婚姻数		0.98件	4.19件	3.72件	4.43件	5.29件	5.14件 (19年中)
1日当り離婚数		0.06件	0.21件	0.68件	0.91件	1.64件	1.98件 (19年中)
1日当り転入者数		4.90人	47.24人	46.43人	49.51人	46.16人	39.57人 (19年中)
1日当り転出者数		4.58人	18.37人	40.19人	38.59人	42.71人	37.99人 (19年中)
1日当り交通事故		0.44件	3.65件	5.23件	13.21件	21.42件	19.4件 (19年中)
1日当り救急出動		—	9件	10件	16件	22件	33件 (19年中)
1日当り犯罪件数		1.9件	4.5件	5.3件	9.7件	17.5件	19.7件 (19年中)
1日当りごみ排出量 (家庭系)		—	18.8t	100.0t	188.2t	233.8t	218t (19年中)
市内駅1日当り乗車人員		9,126人	49,391人	112,094人	182,603人	216,506人	225,290人 (19年度)
病院診療所		18力所	42力所	81力所	119力所	149力所	167力所 (19年度)
児童数生徒数		10,023人	13,421人	37,410人	39,405人	27,428人	27,868人

産業

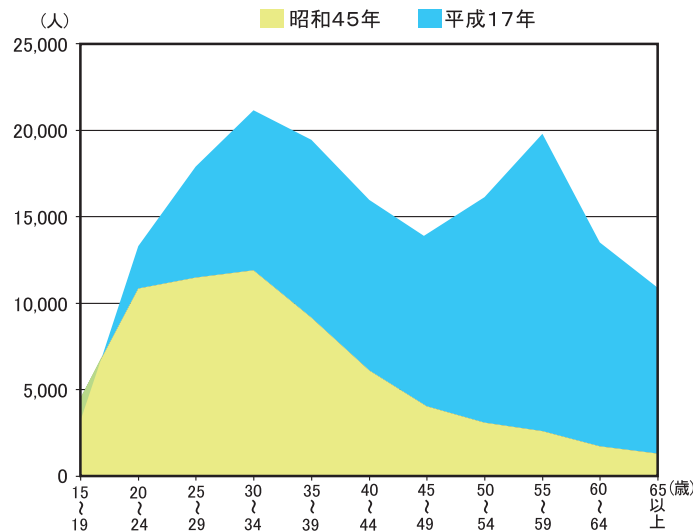
産業別に事業所割合をみると、卸売・小売業、飲食店及び製造業が低下したのに対し、サービス業が伸びています。労働力人口の年齢別構成をみると、40歳以上の中高年齢の労働力層が拡大しています。また、農家数は昭和35年から3分の1に減

少し、特に専業農家は著しい減少となっています。工場数は昭和40年から50年にかけて大幅に増えています。商店数、年間商品販売額は、平成3年をピークに減少しています。

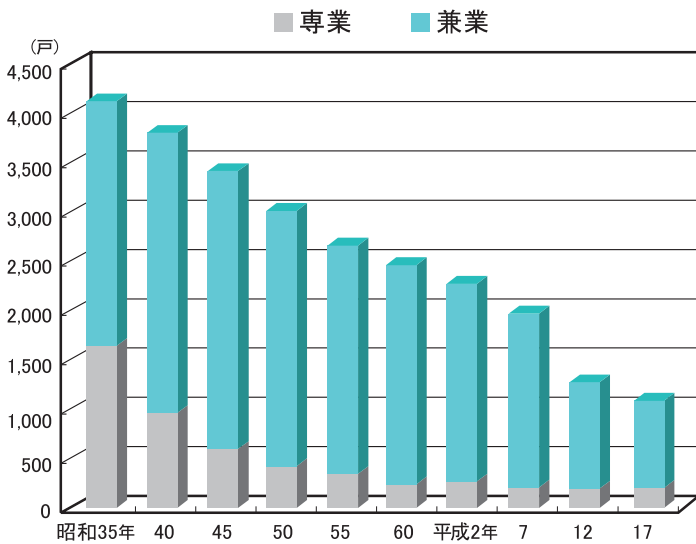
産業別事業所割合



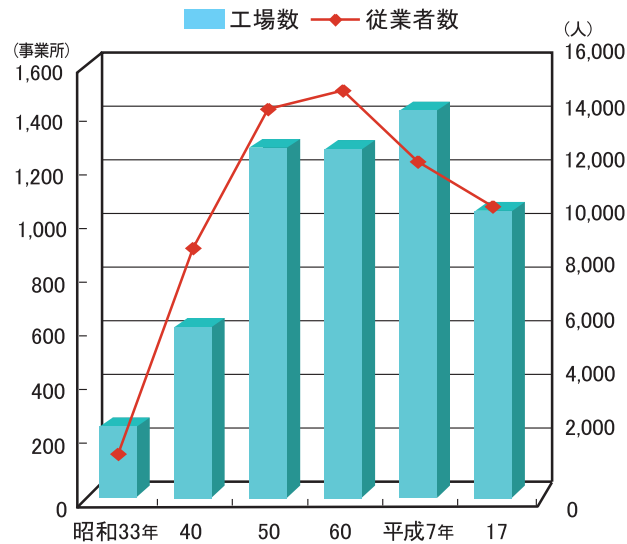
労働力人口年齢別構成



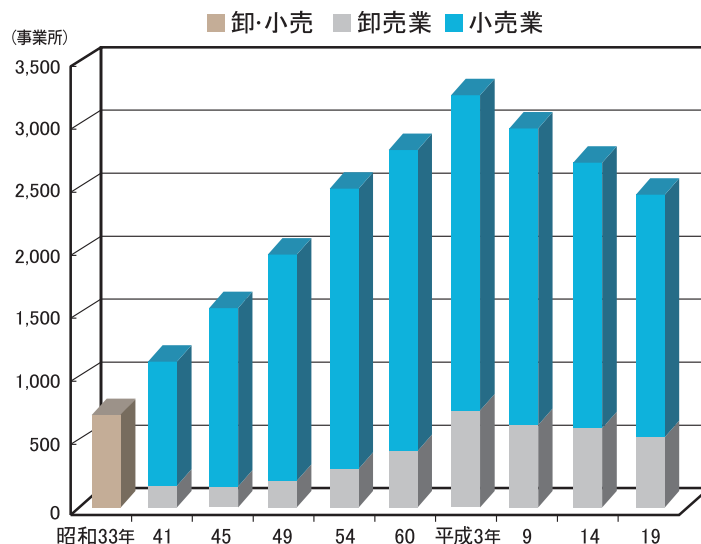
農家数



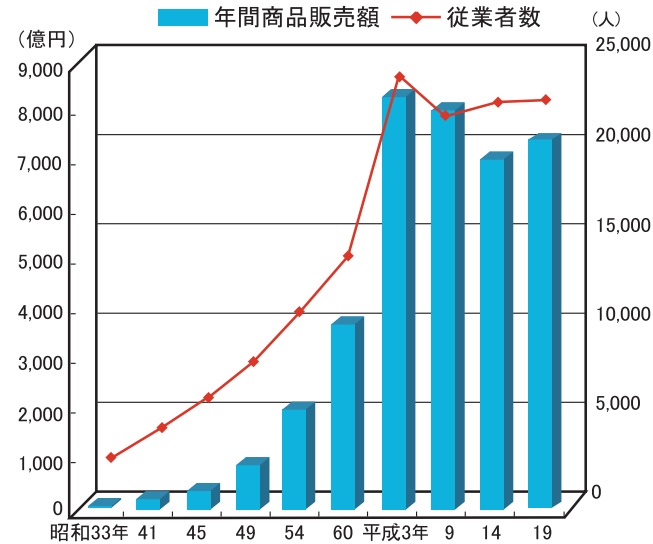
工場数



商店数



年間商品販売額と従業者数

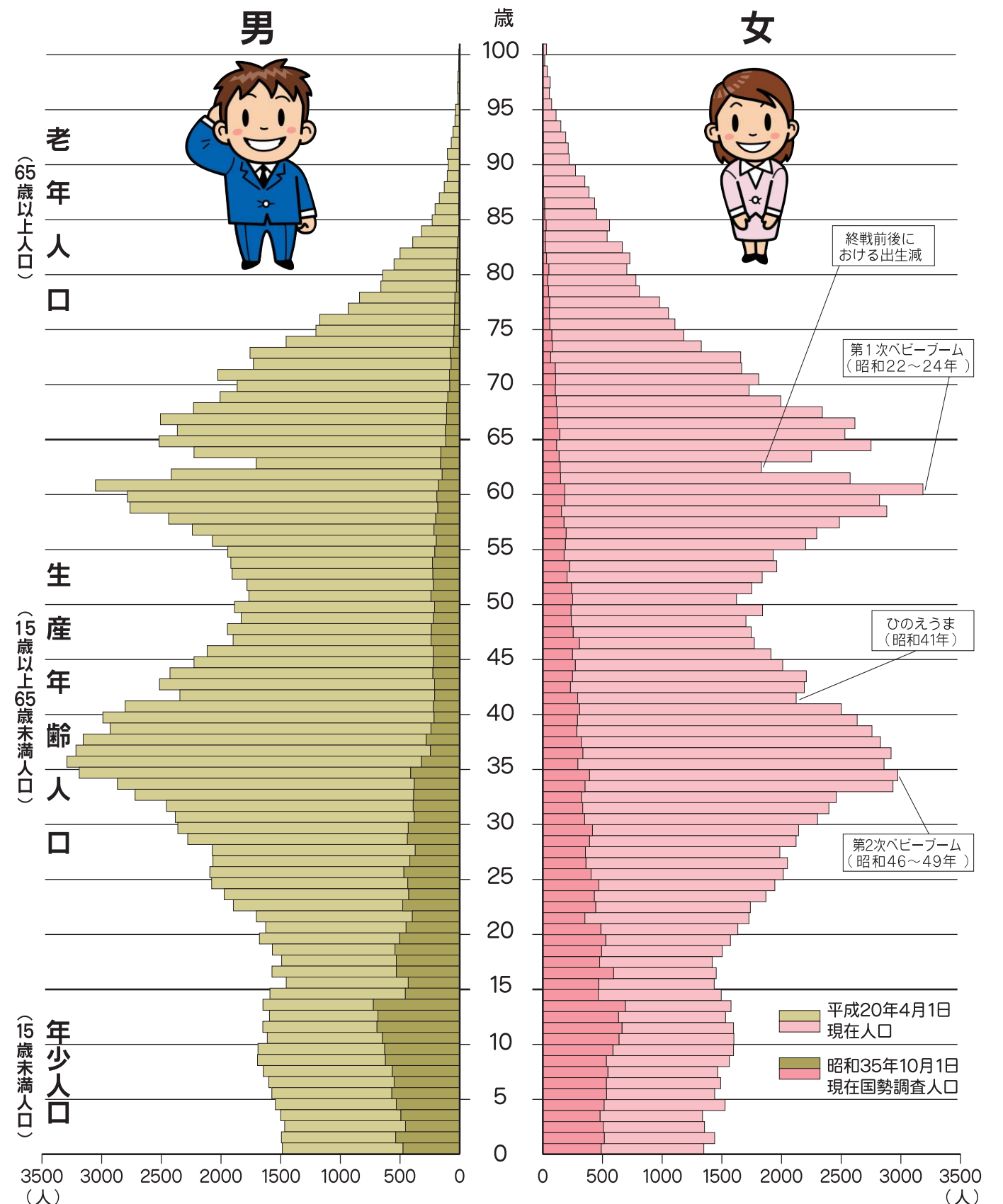


人口ピラミッド

昭和35年と平成20年の年齢別人口を重ねてみると、人口の著しい増加と年齢構成の変化の様子がわかります。昭和35年には13歳を人口のピークとした人口構成になっていましたが、平成20年では

35歳前後と60歳前後をピークとした「ひょうたん型」になっており、終戦前後及びひのえうま年における出生の減少や第1次・第2次ベビーブームの状況がわかります。

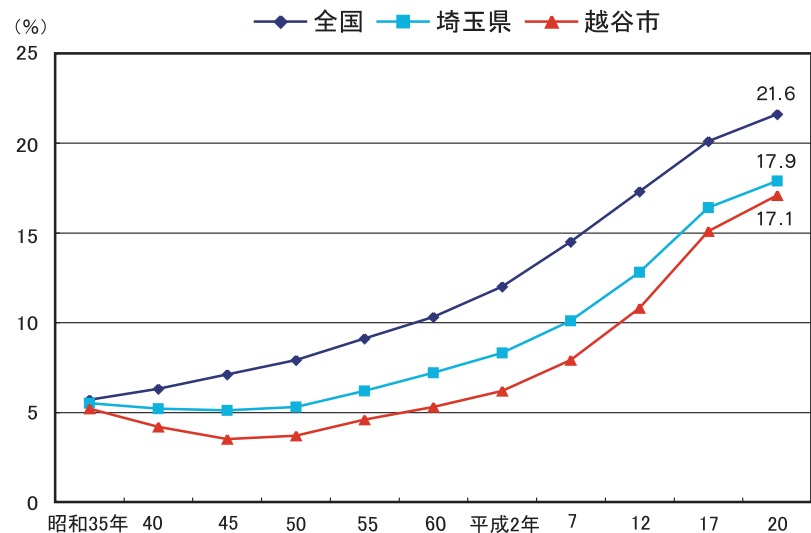
平成20年4月1日現在人口と昭和35年10月1日現在国勢調査人口



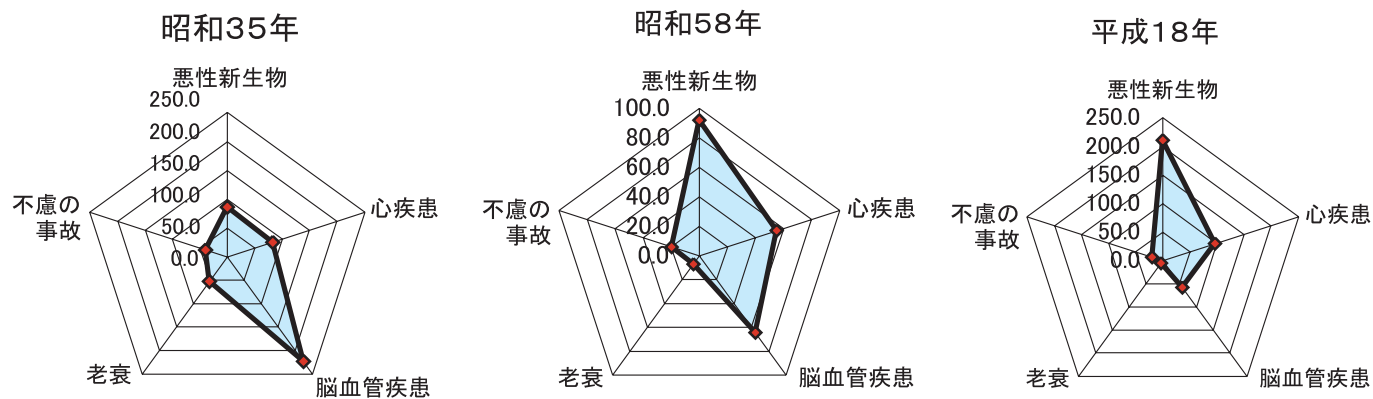
保健・福祉

平成20年1月現在、65歳以上の人口割合が17.1%となっており、昭和35年の5.2%と比較して3倍以上も上昇し、急速に高齢化が進んでいます。また、人口10万人対死亡率をみると、昭和35年においては脳血管疾患が最も高い数値であったが、徐々に低下し、平成18年では悪性新生物が210.3と最も高い値となっています。小学校6年生の身長・体重の平均を昭和33年当時と平成19年を比較すると、男女とも身長で約10cm、体重で約8kg増え、体位の変化がみられます。

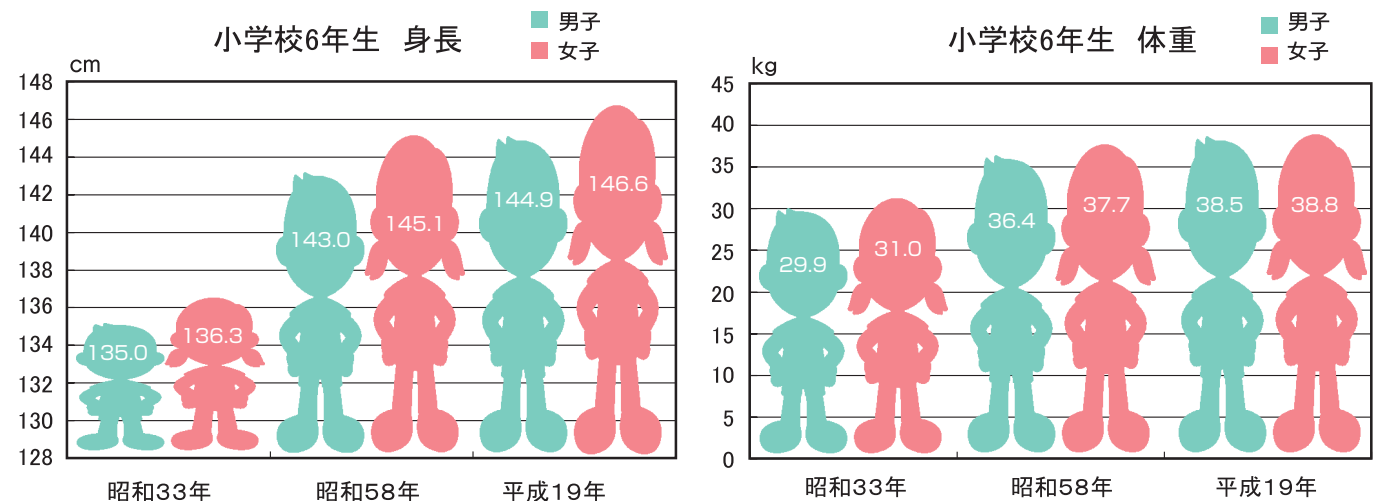
全人口に占める65歳以上人口の割合



主な死因別人口10万対死亡率



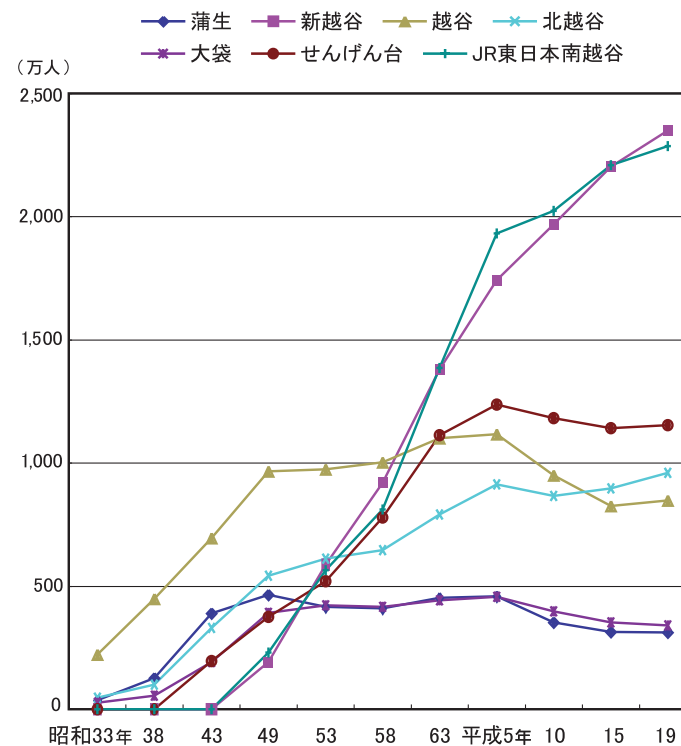
児童の平均身長・体重



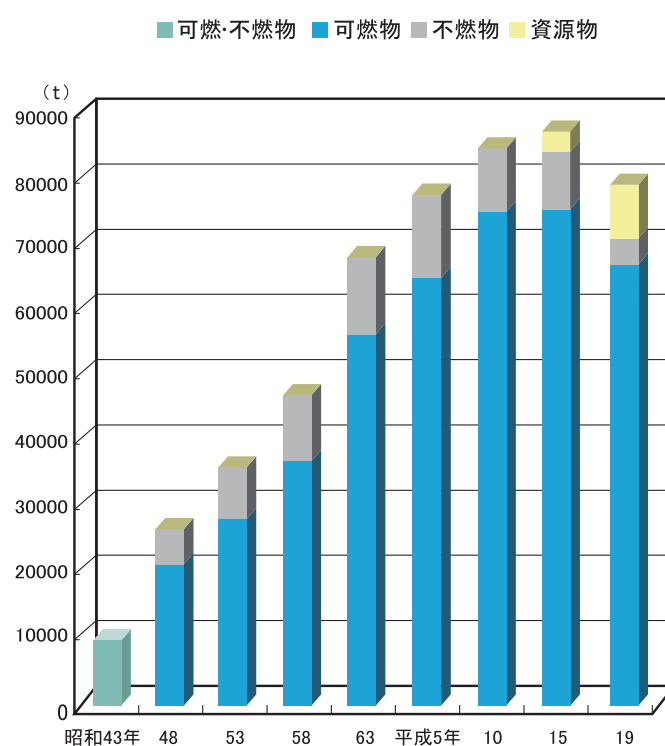
市民生活

昭和37年の地下鉄日比谷線と東武伊勢崎線の相互乗り入れ以降、乗車人員が急増し、平成5年度を境に鈍化傾向となっています。ごみの収集量は、平成15年まで増加していましたが、それ以降は徐々に減少しています。都市公園の供用面積は昭和56年度から約2倍に増えています。公共下水道の普及率は平成19年度において81.4%となっています。

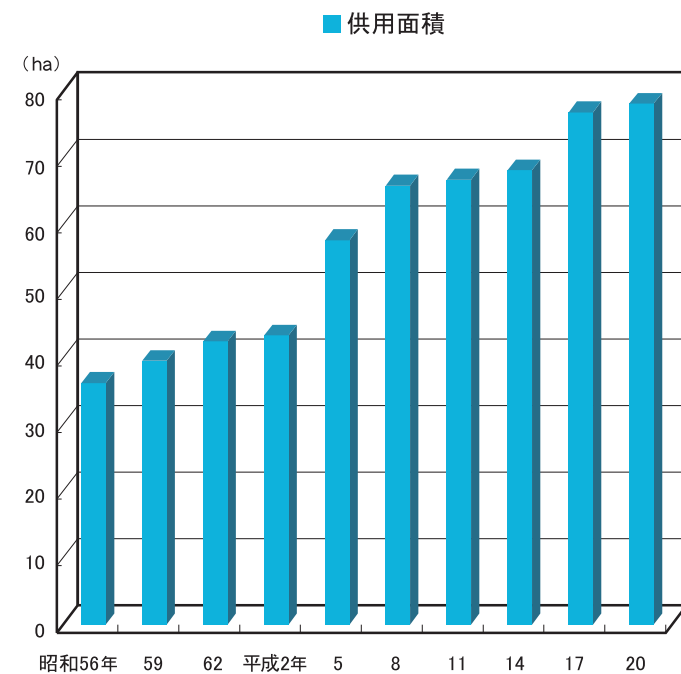
各駅別乗車人員



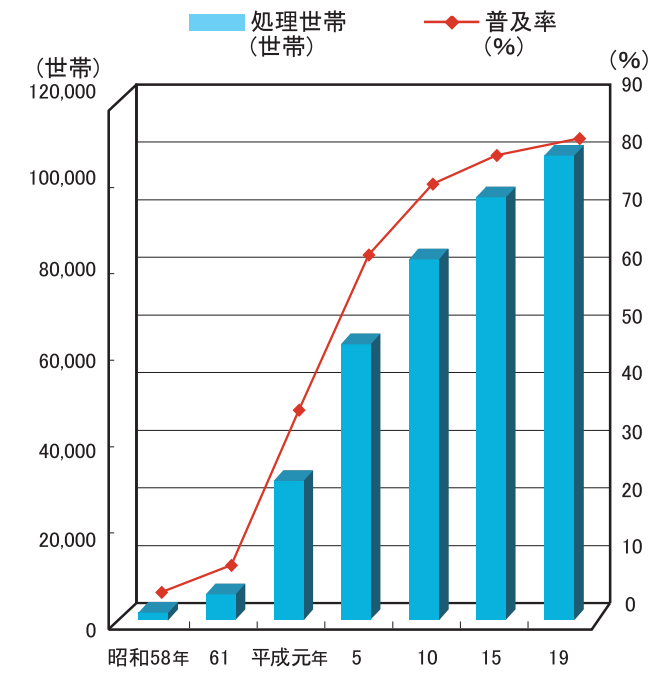
ごみ収集量(家庭系)



都市公園



公共下水道



地目別土地面積割合

(単位：%)

年次	田	畑	宅地	雑種地	その他
昭和33年	55.8	16.7	7.8	...	19.7
43	50.8	15.7	13.9	...	19.6
53	41.8	17.7	24.9	2.2	13.4
63	32.3	11.4	31.5	2.7	22.1
平成10年	23.7	8.5	33.8	6.8	27.2
20	19.6	7.3	35.9	8.4	28.8

資料：昭和33年は「埼玉県統計年報」
昭和43年以降は資産税課

人口

各年4月1日(単位：人、%)

年次	人口	増加率	年次	人口	増加率	年次	人口	増加率
昭和33年	48,048	1.2	昭和50年	190,079	4.5	平成4年	288,101	1.1
34	48,800	1.6	51	197,087	3.7	5	291,519	1.2
35	49,460	1.4	52	202,857	2.9	6	294,257	0.9
36	50,793	2.7	53	207,575	2.3	7	296,426	0.7
37	52,285	2.9	54	212,977	2.6	8	297,822	0.5
38	55,648	6.4	55	218,817	2.7	9	299,870	0.7
39	62,637	12.6	56	223,687	2.2	10	302,368	0.8
40	70,600	12.7	57	229,656	2.7	11	305,566	1.1
41	80,540	14.1	58	236,406	2.9	12	308,047	0.8
42	95,113	18.1	59	243,328	2.9	13	309,743	0.6
43	105,492	10.9	60	248,435	2.1	14	311,737	0.6
44	118,570	12.4	61	256,486	3.2	15	314,667	0.9
45	131,887	11.2	62	264,487	3.1	16	316,466	0.6
46	145,878	10.6	63	271,964	2.8	17	317,033	0.2
47	159,931	9.6	平成元年	277,144	1.9	18	317,483	0.1
48	172,555	7.9	2	281,623	1.6	19	319,164	0.5
49	181,822	5.4	3	284,836	1.1	20	320,802	0.5

(注) 昭和60年までは住民基本台帳人口であり、昭和61年からは総数(住民基本台帳人口+外国人登録数)である。

年齢3区分人口

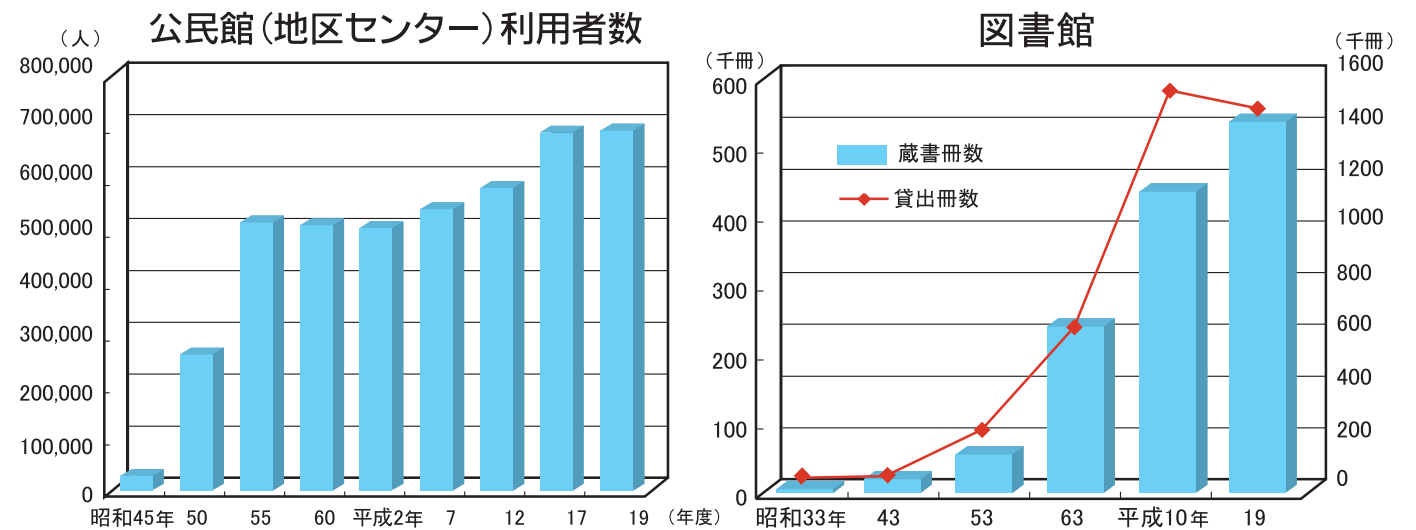
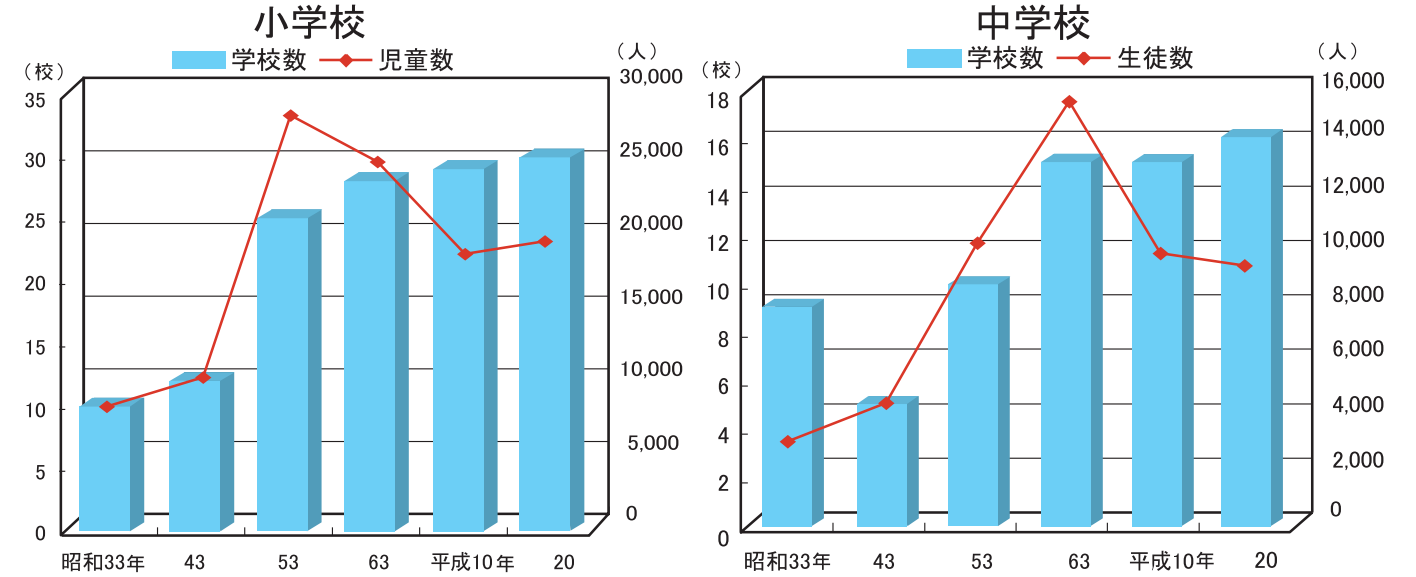
(単位：人、%)

年次	総数	15歳未満		15~64歳		65歳以上	
		実数	割合	実数	割合	実数	割合
昭和35年	49,585	16,817	33.9	30,201	60.9	2,567	5.2
40	76,571	21,738	28.4	51,641	67.4	3,192	4.2
45	139,368	40,389	29.0	94,049	67.5	4,930	3.5
50	195,917	60,982	31.1	127,538	65.1	7,300	3.7
55	223,241	64,984	29.1	147,804	66.3	10,233	4.6
60	253,479	62,394	24.6	177,440	70.0	13,534	5.3
平成2年	285,259	53,529	18.9	212,014	74.8	17,756	6.3
7	298,253	47,639	16.0	226,087	76.0	23,581	7.9
12	308,307	45,756	14.9	228,204	74.3	33,353	10.8
17	315,792	45,423	14.4	221,669	70.4	47,559	15.1
20	320,802	45,868	14.3	219,003	68.3	55,931	17.4

資料：1.国勢調査(各年10月1日)
2.総数には「年齢不詳」を含む。従って3区分人口の合計とは一致しない。
3.平成20年は4月1日現在の総人口(住民基本台帳人口+外国人登録数)

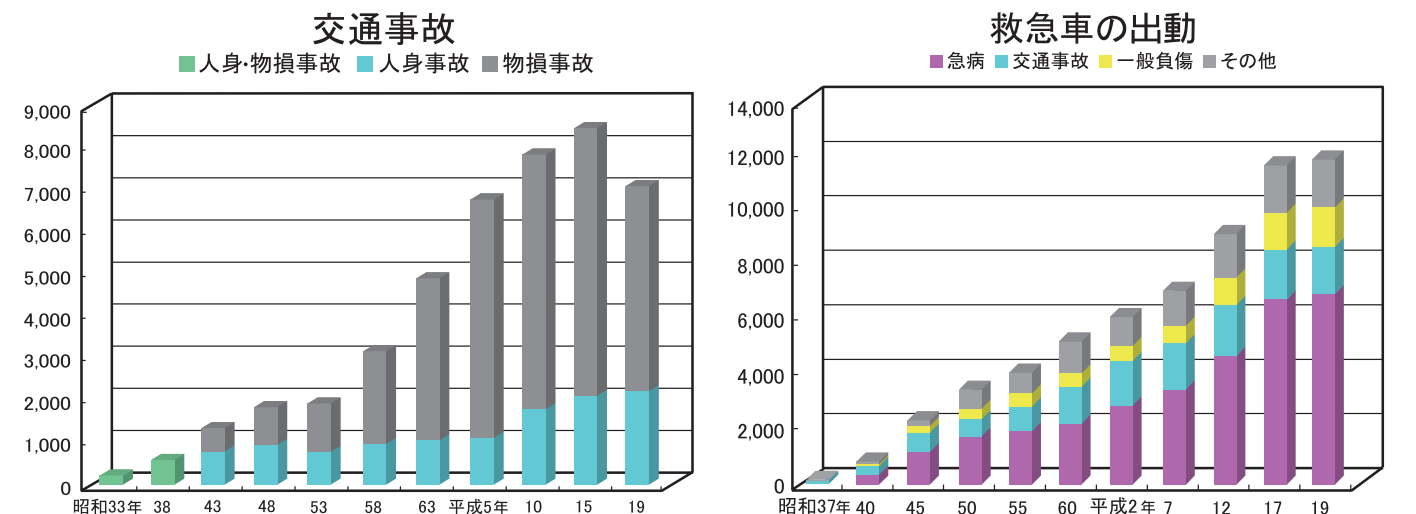
教育・文化

児童・生徒数は、第2次ベビーブームの影響などにより小学校は昭和56年、中学校は昭和61年をピークに、その後は少子化により減少傾向が続いています。公民館(地区センター)の利用については、市内13館となった昭和54年以降、年間50万人以上の利用があります。図書館貸出冊数については、平成19年度で143万冊を数えます。



災害・事故

交通事故は、昭和43年から急激に増加し平成15年頃をピークに徐々に減少しています。救急車の出動件数については、昭和37年から比較してみると、約77倍にも増加しており、平成19年中では1日当たり32.6件の出動で、今後も徐々に増加傾向を示しています。



図書館

(単位：冊)

年度	蔵書冊数	貸出冊数
昭和33年度	4,400	13,222
43	19,308	19,871
53	55,857	191,996
63	240,558	588,853
平成10年度	436,784	1,503,036
19	536,875	1,434,917

資料：図書館要覧

(注) 1.昭和33年度については、4月1日から11月3日まで。
2.北部市民会館図書室、南部図書室、移動図書館を含む。

公民館(地区センター)利用者数

(単位：人)

年度	利用者数
昭和45年度	26,044
50	261,680
55	516,558
60	509,731
平成2年度	502,992
7	540,563
12	582,211
17	688,295
19	690,718

資料：生涯学習課

全人口に占める65歳以上人口の割合

(単位：人、%)

年次	全国			埼玉県			越谷市		
	総数	65歳以上人口		総数	65歳以上人口		総数	65歳以上人口	
		実数	割合		実数	割合		実数	割合
昭和35年	9,430	540	5.7	2,430,871	133,006	5.5	49,585	2,567	5.2
40	9,921	624	6.3	3,014,983	157,685	5.2	76,571	3,192	4.2
45	10,467	739	7.1	3,866,472	198,589	5.1	139,368	4,930	3.5
50	11,194	887	7.9	4,821,340	256,014	5.3	195,917	7,300	3.7
55	11,706	1,065	9.1	5,420,480	333,874	6.2	223,241	10,233	4.6
60	12,105	1,247	10.3	5,863,678	420,099	7.2	253,479	13,534	5.3
平成2年	12,361	1,489	12.0	6,405,319	530,539	8.3	285,259	17,756	6.2
7	12,557	1,826	14.5	6,759,311	681,172	10.1	298,253	23,581	7.9
12	12,693	2,200	17.3	6,938,006	889,243	12.8	308,307	33,353	10.8
17	12,777	2,567	20.1	7,054,243	1,157,006	16.4	315,792	47,559	15.1
20	12,774	2,761	21.6	7,179,565	1,287,191	17.9	320,332	54,873	17.1

資料：平成17年以前は国勢調査(各年10月1日)

平成20年の埼玉県・越谷市については「埼玉県町丁字別人口調査人口」(1月1日)

平成20年の全国については「人口推計月報」(1月1日)

(注) 全国の総数、実数は、単位が万人。

交通事故

(単位：件、人)

年次	総事故件数	人身事故			物損事故
		件数	死者	傷者数	
昭和33年	160	...	19	164	...
38	615	...	15	365	...
43	1,332	777	34	1,049	555
48	1,830	937	23	1,237	893
53	1,909	766	15	967	1,143
58	3,155	957	13	1,184	2,198
63	4,882	1,049	27	1,310	3,833
平成5年	6,756	1,100	17	1,447	5,656
10	7,819	1,778	12	2,285	6,041
15	8,448	2,103	13	2,614	6,345
19	7,073	2,210	12	2,635	4,863

資料：越谷警察署

主な死因別人口10万対死亡率

死因	昭和35年	昭和58年	平成18年
悪性新生物	86.7	92.1	210.3
心疾患	82.7	55.0	96.0
脳血管疾患	223.8	64.5	57.8
老衰	52.4	6.6	5.1
不慮の事故	40.3	19.4	19.3

資料：越谷保健所

児童の平均身長・体重

(単位：cm、kg)

年次	小学6年生 男		小学6年生 女	
	身長	体重	身長	体重
昭和33年	135.0	29.9	136.3	31.0
58	143.0	36.4	145.1	37.7
平成19年	144.9	38.5	146.6	38.8

資料：昭和33年は学校基本調査における県平均

昭和58年、平成19年は学校課

救急車の出動

(単位：件)

年次	総数	内訳			
		急病	交通事故	一般負傷	その他
昭和37年	154	23	111	13	7
40	820	351	317	68	84
45	2,333	1,180	698	241	214
50	3,451	1,743	641	392	675
55	4,095	1,953	901	487	754
60	5,234	2,226	1,344	503	1,161
平成2年	6,141	2,884	1,642	553	1,062
7	7,103	3,486	1,686	658	1,273
12	9,192	4,710	1,879	1,007	1,596
17	11,692	6,781	1,834	1,357	1,720
19	11,908	6,989	1,727	1,449	1,743

資料：1.昭和44年以前については市勢要覧「こしがや1970」

2.昭和45年～63年については「越谷市消防史-30周年記念-」

3.平成2年以降は消防本部

小学校・中学校

(単位：校、人)

年次	小学校		中学校	
	学校数	児童数	学校数	生徒数
昭和33年	10	7,413	9	2,610
43	12	9,414	5	4,007
53	25	27,513	10	9,897
63	28	24,313	15	15,092
平成10年	29	17,918	15	9,510
20	30	18,816	16	9,052

資料：学校基本調査(各年5月1日)

編集を終えて

ここに本市の市制施行50周年記念誌を企画編集し、皆様にお届けできますことに心よりお礼申し上げます。記念誌発刊にあたり多くの方々から、貴重なご意見や資料の提供を賜りました結果、今日を迎えられました。

市制施行50周年記念事業推進市民委員会記念誌作成部会長という重責に逡巡いたしました。部会員に支えられますことを頼りにお引受けいたしました。

本市の礎を築かれた「先人各位の50年の実績と県南東部地域の32万中核都市の発展と推移」を伝えること、そしてイメージの伝達は大切な責務と認識した次第です。

幸いなことに編集に携わる歴史・教育・文化・コミュニケーション・産業経済・福祉医療・情報・写真・デザイン等々各部門の部会員による印刷監理や監修・校正作業には、充分な力の発揮がありました。

編集に要した時間が約一年余りと短期間での調査不足等もあろうかとは思いますが何卒、ご理解とご賢察をいただきますようお願い申し上げます。

末尾にあたり温かいご協賛とご協力を賜りました各方面の方々に厚くお礼申し上げ、後記といたします。ありがとうございました。

越谷市制施行50周年記念事業
推進市民委員会 副委員長 戸井田 熙
記念誌作成部会 部長

◆主な参考資料

- 越谷市史
- 市制施行40年の足跡「ときを超えて」
- 越谷市勢要覧
- 広報こしがや
- 越谷の歴史物語
- わたしたちの郷土こしがや
- 川のあるまち 越谷文化
- *このほか、市発行のパンフレット、各種団体発行の記念誌などを参考にしました

◆記念誌作成部会（敬称略）

- 部長 戸井田 熙
- 副部長 大森 修一
- 山崎 昭二
- 部会員 鴨川 繁夫
- 坂巻 高次
- 大徳 幸雄
- 高崎 力
- 中野 鉄雄
- 安井 晃
- 事務局 秘書室広報広聴課

◆記念誌に掲載した写真を提供いただいた方（敬称略・50音順）

- | | |
|--------|--------|
| 大野 光政 | 坂巻 高次 |
| 鈴木 知亥 | 高崎 力 |
| 高橋 恒 | 竹永 啓太郎 |
| 戸井田 熙 | 中村 朝之助 |
| 中村 豊次 | 中村 ゆき |
| 福田 美代子 | 谷塚 藍造 |
| 山崎 軍司郎 | |

「越谷市制施行50周年記念誌」

- 発行日 平成20年11月
- 企画・編集 越谷市制施行50周年記念事業推進市民委員会 記念誌作成部会
- 発行 越谷市
- 〒343-8501
- 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号
- ☎048(964)2111(代表)
- 印刷 中央印刷株式会社
- *掲載した写真の複写・転載を禁じます



10個の外輪は、合併した2町8カ村を表し、中央にカタカナの「コ」の字を4つ集めて「越」の意味、中心は「谷」の文字を図案化しました。この図案は町村合併後に、町章として町民の皆さんから

募集したもので、昭和30年1月10日に制定しました。その後、市制施行とともに市章となりました。



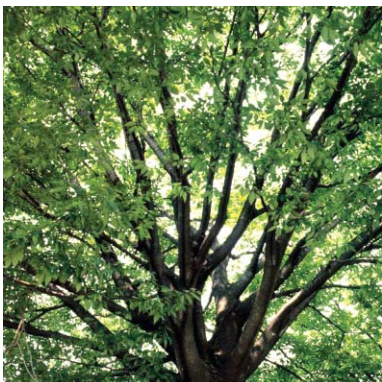
「水郷こしがや」と親子のシラコバトが未来にはばたく様子を表現しています。市民の皆さんとともに暮らしやすいまちづくりを進めるためのシンボルとして、全国公募の中から市民投票によって選ばれました。

平成10年11月3日選定

市制施行50周年記念

ロゴマーク 「50」と「シラコバト」をモチーフにして、越谷市が100周年に向け、さらなる飛躍する姿を描きつつロゴマークにしました。

キャッチフレーズ *歩みつけて半世紀 さらに飛躍の初老紀*



市の木 ケヤキ
昭和53年11月3日制定



市の花 キク
昭和53年11月3日制定



市の鳥 シラコバト
昭和63年11月3日制定

市の歌

椎木一男 作詞 / 宮沢章二 補作 / 奥村 一 作曲

- | | | |
|--|---|---|
| 一、流れ 幾すじ 波おどり
空へ舞い立つ しらこばと
歌おう 望みを よろこびを
水と みどりと 太陽の
わが市 わが町 越谷よ | 二、花のいのちに 飾られて
愛が かおるよ 人の輪に
生きる日 励む日 夢みる日
共に 根を張り 幸を生む
わが市 わが町 越谷よ | 三、昇る朝日の ほほえみは
今日と 明日を むすぶ虹
ひかりを集めて さわやかに
老いも 若きも 肩を組む
わが市 わが町 越谷よ |
|--|---|---|

昭和53年11月3日制定